

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

徳丸高堰Ⅱ遺跡
徳丸仲田Ⅲ遺跡
西善尺司Ⅲ遺跡
下増田常木Ⅱ遺跡
下増田越渡Ⅳ遺跡

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

徳	丸	高	堰	遺	跡
徳	丸	仲	田	遺	跡
西	善	尺	司	遺	跡
下	増	田	常	木	跡
下	増	田	越	渡	跡

II III III II IV

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる、水と緑のあふれた地に前橋市はあります。

前橋は古代よりの文化に富んだ地で、東国の奈良と称されています。今から二万八千年前の旧石器から9基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの発展を物語る群馬県庁などの近代化遺産を始めとして多くの文化財があります。

自然環境に恵まれたこの地では、人々が古代から生活を営んできた跡が市内いたるところに見られます。古代東国の中心地としての生産力のある土地とも言え、埋蔵文化財の宝庫ともいえます。古代の遺跡の発掘調査による歴史を変える発見が毎年のようにあり、本年の発掘調査でも貴重な資料を得ることができました。

前橋市南部地区は市内でも従来遺跡のあまりない地区と言われてきましたが、古代から近世の遺跡が近年の調査で次々と発見されています。縄文時代草創期の土器が徳丸仲田遺跡より発見されるなど、地域の歴史を変える貴重な遺跡も見つかっています。

この前橋南部地区より東部に横断して建設される北関東自動車道はそのほとんどが遺跡地であり、前橋市ではその市事業地である側道部分の発掘調査を実施しました。平成10年度は古墳時代から平安時代の水田跡や住居の跡が発見されました。

前橋南部・東部地区にとっての始めての発見も多く、前橋市の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。発掘調査は今後も続きますが、また新たな発見が期待されます。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました北関東自動車道対策室、県文化財保護課、県埋蔵文化財調査事業団、地元関係者、酷暑のなか調査に従事されました皆様方に感謝とお礼を申し上げます。

平成11年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長 渡辺勝利

例　　言

- 本書は北関東自動車道側道路改良事業に伴い、記録保存のために事前調査された徳丸高塚Ⅱ遺跡、徳丸仲田Ⅲ遺跡、西善尺司Ⅲ遺跡、下増田常木Ⅱ遺跡、下増田越渡Ⅳ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 渡辺勝利）が受諾したもので、発掘調査は委託を受けた山武考古学研究所が埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとに実施した。
- 発掘調査は平成10年4月23日より平成11年3月19日の間に実施した。
- 遺跡の区割りは埋蔵文化財発掘調査団の指導により、本文掲載の表（表2）の通りに行われている。
- 遺跡の所在地および調査面積・担当者は、以下の通りである。

遺跡名	所在地	調査面積	調査担当者（山武考古学研究所）
徳丸高塚Ⅱ遺跡	前橋市徳丸町68-1他	1,218m ²	千葉孝之
徳丸仲田Ⅲ遺跡	前橋市徳丸町75-1他	3,402m ²	千葉孝之 矢島博文 野平伸一 大越直樹 長谷川秀久
西善尺司Ⅲ遺跡	前橋市西善町1,166他	370m ²	大越直樹 矢島博文 千葉孝之
下増田常木Ⅱ遺跡	前橋市下増田町1,541-1他	614m ²	近藤晋一郎
下増田越渡Ⅳ遺跡	前橋市上増田町1,535他	2,449m ²	山崎悟 近藤晋一郎 高階敏昭

- 本書の編集は千葉孝之・近藤晋一郎・間宮正光・大賀健が行ない、文責は以下の通りである。

I 序章	第1章	宮内 輝
	その他	千葉孝之 高階敏昭 大賀 健
II 徳丸高塚Ⅱ遺跡	遺構・遺物	千葉孝之 間宮正光
III 徳丸仲田Ⅲ遺跡	遺構・遺物	千葉孝之 間宮正光
IV 西善尺司Ⅲ遺跡	遺構	千葉孝之 間宮正光
	遺物	松田政基
V 下増田常木Ⅱ遺跡	遺構	近藤晋一郎
VI 下増田越渡Ⅳ遺跡	遺構	近藤晋一郎
	遺物	松田政基

- 本調査において得られた図面・写真等の記録類、及び遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

- 調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力をいただいた。

群馬県教育委員会、前橋市北関東自動車道対策室、前橋市教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、新成田総合社、JR東日本重機、須賀工業㈱、前橋文化財研究所、開成測量㈱、J・T空撮、降龍山善昌寺

9. 発掘調査及び整理調査参加者

青木集一　青木貞子　赤星惇子　石井百々子　石関博　石関道子　石田満理　糸井栄子　糸井重信
糸井政子　糸井ふみ　伊藤順子　今井弘子　今泉郁美　宇津木明子　梅山淳　江頭宏枝　江口弘子　大
賀良助　大澤義雄　大山敬子　落合高男　小野里岩雄　小野里みと　小野沢昌子　鎌塚重治　神山祐吉
木村春代　齊藤明　板垣てる子　桜井れい　佐々木房子　佐野勝次郎　島田儀一郎　新保富恵　新保昌
子　末廣弘子　須藤和春　高橋山治　都丸主女作　角田玉雄　中川宗彦　奈良あい子　萩原専一　萩原
真理子　萩原洋子　羽鳥繁夫　羽鳥なを　原鶴サイ子　半澤利江　堀川富太郎　藤曲ひろ子　星美和
堀越道男　堀越律子　丸山保治　室田毅　室橋美智子　横田義雄

凡　例

1. 採図中に使用した北方位は座標北である。
2. 採図に建設省国土地理院発行1/2.5万地形図（前橋・高崎・大胡・伊勢崎）と前橋市都市計画課発行の1/2,500原形図「73・74・75・76」、明治21年陸地測量部発行1/20,000地方迅速図（伊勢崎町・倉賀野驛）を使用した。
3. 遺跡の略称は以下の通りである。
 - 徳丸高塚Ⅱ遺跡 10G-26
 - 徳丸仲田Ⅲ遺跡 10G-27
 - 西普尺司Ⅲ遺跡 10G-28
 - 下増田常木Ⅱ遺跡 10F-4
 - 下増田越渡Ⅳ遺跡 10F-5
4. 各遺構の略称は次の通りである。

H-1住居跡	D-1土坑	I-1井戸	K-1掘立柱建物跡	W-溝
道-1道路状遺構	P-1柱穴	A-1畦畔	堀-1堀	堅-1堅穴状遺構
土層堆積模式図	1/20・1/30・1/80			方周-1方形周溝墓
5. 掲載した遺構・遺物の縮尺は以下の通りである。
 - 遺跡位置図 1/50,000・1/25,000 調査区区割り図 1/2,500 遺跡全体図 1/300
 - 各遺跡別調査区位置図・調査区区割り対比図 1/3,000
 - 土層堆積模式図 1/20・1/30・1/80
 - 遺構実測図 1/60、1/160
 - 遺構セクション図・エレベーション図 1/30・1/60・1/80
 - 遺物実測図 土器・土製品・鉄製品 1/3 古銭 1/1
石器・石製品 1/3 (石鎧1/1)
6. 掲載したスクリントーンは以下を示す。



7. 遺物観察表の計測値（ ）は推定復元値を示す。
8. 以下のテフラは略号を使用する。
 - 浅間 B 軽石……As-B　浅間 C 軽石（4世紀前半）……As-C
 - 榛名二ツ橋沢川テフラ（6世紀初頭）……Hr-FA

目 次

序
例言
凡例
目次

I 序章		
第1章 調査に至る経緯	1	
第2章 遺跡の地理・歴史的環境	1	
第3章 調査の方法		
第1節 遺跡および調査地区的呼称	7	
第2節 調査の方法	8	
II 徳丸高塚Ⅱ遺跡		
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	9	
第2章 調査の経過	11	
第3章 標準堆積土層	12	
第4章 遺構と遺物		
第1節 B区北側道	13	
第2節 C区北側道	15	
第5章 まとめ	16	
写真図版		
III 徳丸仲田Ⅲ遺跡		
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	17	
第2章 調査の経過	19	
第3章 標準堆積土層	21	
第4章 遺構と遺物		
第1節 A区北側道	23	
第2節 C区北側道	24	
第3節 C区南側道	24	
第4節 D区北側道	26	
第5節 D区南側道	26	
第6節 E区北側道	27	
第7節 E区南側道	27	
第8節 F区北側道	27	
第9節 F区南側道	28	
第10節 G区北側道	28	
第11節 H区北側道西地区	28	
第12節 H区北側道東地区	28	
第5章 まとめ	31	
写真図版		
IV 西善尺司Ⅲ遺跡		
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	33	
第2章 調査の経過	35	
第3章 標準堆積土層	35	
第4章 遺構と遺物		
第5章 まとめ	37	
写真図版		
V 下増田常木Ⅱ遺跡		
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	39	
第2章 調査の経過	41	
第3章 標準堆積土層	41	
第4章 遺構		
第5章 まとめ	42	
写真図版		
VI 下増田越渡Ⅳ遺跡		
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	43	
第2章 調査の経過	45	
第3章 標準堆積土層	47	
第4章 遺構と遺物		
第1節 A区北側道	49	
第2節 B区北側道	49	
第3節 C区南側道	60	
第4節 D区北側道	65	
第5節 D区南側道	67	
第6節 E区北側道	67	
第7節 G区北側道	67	
第5章 まとめ	70	
写真図版		
抄録		

挿図目次

I 序章	
第1図 遺跡の位置と路線内の遺跡	2
第2図 徳丸高塚・徳丸仲田・西善尺司遺跡 の位置(迅速図)	3
第3図 下増田常木・下増田越渡遺跡 の位置(迅速図)	3
第4図 調査区区割り対比図(1)徳丸高塚遺跡	4
第5図 調査区区割り対比図(2)徳丸仲田遺跡折図1	
第6図 調査区区割り対比図(3)西善尺司遺跡	5
第7図 調査区区割り対比図(4)下増田常木遺跡	6
第8図 調査区区割り対比図(5)下増田越渡遺跡折図2	
II 徳丸高塚Ⅱ遺跡	
第9図 周辺の遺跡	9
第10図 調査区位置図	10
第11図 標準堆積土層	12
第12図 B区北側道全体図	折図3
第13図 C区北側道全体図	折図4
第14図 B区北側道1・2号掘	14
第15図 B区北側道出土遺物	15
III 徳丸仲田Ⅲ遺跡	
第16図 周辺の遺跡	17
第17図 調査区位置図	18
第18図 標準堆積土層	20
第19図 A区北側道全体図	22
第20図 A区北側道1号溝	23
第21図 C区北側道全体図	折図5
第22図 C区南側道全体図	25
第23図 D区北側道全体図	折図6
第24図 D区南側道全体図	折図7
第25図 E区北・南側道全体図	折図8
第26図 F区北・南、G区北側道全体図	折図9
第27図 H区北側道西地区全体図	29
第28図 H区北側道東地区全体図	30
第29図 H区北側道東地区3号溝	30
第30図 出土遺物	30
第31図 本遺跡と力丸城の位置	32
第32図 本遺跡検出の中世館跡配置図	32
IV 西善尺司Ⅲ遺跡	
第33図 周辺の遺跡	33
VI 下増田常木Ⅱ遺跡	
第34図 調査区位置図	34
第35図 標準堆積土層	35
第36図 西地区・東地区全体図	36
第37図 1号掘平面図・断面図	38
第38図 7号土坑・同出土遺物、1号溝 出土遺物	38
VII 下増田越渡Ⅳ遺跡	
第39図 周辺の遺跡	39
第40図 調査区位置図	40
第41図 標準堆積土層	41
第42図 全体図	折図10
VIII 下増田越渡Ⅴ遺跡	
第43図 周辺の遺跡	43
第44図 調査区位置図	44
第45図 標準堆積土層	47
第46図 A区北側道全体図	48
第47図 B区北側道全体図(1)	50
第48図 B区北側道1・2号住居跡、41号土坑	52
第49図 B区北側道7・8・10号住居跡	53
第50図 B区北側道出土遺物(1)	54
第51図 B区北側道出土遺物(2)	55
第52図 B区北側道出土遺物(3)	56
第53図 B区北側道出土遺物(4)	57
第54図 B区北側道全体図(2)	58
第55図 B区北側道1・2号掘立柱建物跡、 10-11-13号溝	折図11
第56図 B区北側道大溝・同出土遺物	59
第57図 C区南側道全体図(1)	60
第58図 C区南側道1号井戸・同出土遺物	61
第59図 C区南側道3・4・5号住居跡 同出土遺物	62
第60図 4号住居跡出土遺物、30号土坑・ 同出土遺物	63
第61図 C区南側道全体図(2)	63
第62図 C区南側道1号方形周溝幕	63
第63図 D区北側道全体図	64
第64図 D区北側道6号住居跡・同出土遺物	65
第65図 D区南側道、E区北側道全体図	66
第66図 G区北側道出土遺物	68
第67図 G区北側道全体図(1)	折図12
第68図 G区北側道全体図(2)	折図13
第69図 遺構外出土遺物	69

表 目 次

I 序章	
表1 前橋管内北関東自動車道路関連遺跡一覧	2
表2 地区别遺跡呼称一覧	7
II 徳丸高塚II遺跡	
表3 1・2号堀計測表	15
表4 遺物観察表	15
III 徳丸仲田III遺跡	
表5 遺物観察表	31
表6 畦畔走向一覧	31
表7 溝走向一覧	31
IV 西善尺司II遺跡	

表8 遺物観察表	38
V 下増田當木II遺跡	
VI 下増田越渡IV遺跡	
表9 B区北側道住居跡一覧	51
表10 C区南側道住居跡一覧	61
表11 遺構一覧表	70
表12 B地区遺物観察表(1)	71
表13 B地区遺物観察表(2)	72
表14 C地区遺物観察表(1)	72
表15 C地区遺物観察表(2)	73
表16 D地区遺物観察表	73
表17 G地区遺物観察表	73
表18 遺構外遺物観察表	73
表19 道情外遺物観察表	74

写 真 図 版

II 徳丸高塚II遺跡

図版1 1 B区北側道全景	
2 同 中世面1号堀	
3 同 中世面2号堀	
4 出土遺物	
図版2 1 C区北側道全景	
2 同 弥生時代以前面1号溝	
3 同 As-B下面土坑	
4 同 As-B下面ピット群	
5 基本堆積土層	

III 徳丸仲田III遺跡

図版3 1 A～F区全景	
2 A区北側道As-B下面全景	
3 同 As-C混下面全景	
4 同 As-C混下面1号溝	
5 同 弥生時代以前面全景	
図版4 1 C区北側道As-B下面全景	
2 同 As-B下面畦畔	
3 同 As-B下面水田	
4 同 As-B下面ピット群	
5 同 As-C混下面全景	
6 同 As-C混下面1号土坑	
7 同 弥生時代以前面全景	
8 同 弥生時代以前面2号溝	
図版5 1 C区南側道As-B下面全景	
2 同 As-B下面1号畦畔	
3 同 2号畦畔	
4 同 3号畦畔	
5 同 As-C混下面全景	
6 同 As-C混下面ピット	

7 同 As-C混下面2号溝	
8 同 弥生時代以前面全景	
図版6 1 D区北側道As-B下面全景	
2 同 As-B下面2号畦畔	
3 同 FAに被覆された帶状遺構	
4 同 FA土層断面	
5 同 As-C混下面全景	
6 同 As-C混下面1号畦畔	
7 同 弥生時代以前面全景	
8 同 弥生時代以前面3号溝	
図版7 1 D区南側道As-B下面全景	
2 同 As-B下面2号畦畔	
3 同 As-C混下面全景	
4 同 As-C混下面1号溝	
5 同 As-C混下面2号溝	
6 同 弥生時代以前面全景	
7 同 弥生時代以前面溝	
8 同 弥生時代以前面溝土層	
図版8 1 E区北側道As-B下面全景	
2 同 As-B下面2号畦畔	
3 同 As-B下面工具痕	
4 同 As-C混下面全景	
5 同 As-C混下面1号溝	
6 同 As-C混下面1号土坑	
7 同 弥生時代以前面全景	
図版9 1 作業風景	
2 E区南側道As-B下面全景	
3 同 As-B下面1号畦畔断面	
4 同 As-C混下面全景	
5 同 弥生時代以前面全景	
6 F区北側道As-B下面全景	

	7 同 弥生時代以前面全景	5 同 As-B下面 A区北トレンチ
	8 同 弥生時代以前面 1号溝	1 作業風景
図版10	1 F区南側道 As-C混下面全景	2 B区北側道 As-B下面14~16号溝
	2 同 As-C混下面土坑	3 同 1号住居跡
	3 同 弥生時代以前面全景	4 同 遺物出土状況
	4 同 弥生時代以前面小掘込み	5 同 カマド近景
	5 G区北側道 As-B下面全景	6 同 2号住居跡
	6 同 As-C混下面全景	7 同 カマド近景
	7 同 あえり跡 (昭和40年以前)	8 同 7号住居跡
	8 同 弥生時代以前面全景	
図版11	1 H区北側道西地区 As-B下面全景	図版18 1 B区北側道 8号住居跡
	2 同 As-B下面 1号豎穴状遺構	2 同 遺物出土状況
	3 同 As-B下面 1号畦畔・2号畦畔	3 同 9号住居跡
	4 同 As-C混下面 1号畦畔	4 同 10号住居跡
	5 H区北側道東地区中世館跡検出面全景	5 同 41号土坑
図版12	1 H区北側道東地区中世館跡検出面全景	6 同 9世紀前半以前面 1号掘立柱建物跡
	2 同 中世館跡検出面 3号溝	7 同 10~11号溝 (道路状遺構)
	3 同 中世館跡検出面 4号溝	8 同 9世紀前半以降大溝
	4 同 旧石器時代試掘坑	
	5 作業風景	図版20 1 C区南側道全景
	6 実測風景	2 同 1号井戸跡
	7 出土遺物	3 同 遺物出土状況
		4 同 2号井戸跡
		5 同 土層堆積状況
		6 同 3号住居跡・5号土坑
		7 同 4号住居跡
IV 西善尺司II遺跡		図版21 1 C区南側道 5号住居跡
図版13	1 遺跡全景 (空撮)	2 同 1号方形周溝墓
	2 遺跡全景 (空撮)	3 同 土層堆積状況
図版14	1 西地区 As-C混下面 1号塚全景	4 D区北側道 As-B下面全景
	2 同 As-C混下面全景	5 同 6号住居跡
	3 同 弥生時代以前面 7号土坑	6 同 9世紀前半洪水層下面全景
	4 同 旧石器時代試掘坑	7 同 9世紀前半洪水層下面水口
	5 作業風景	8 同 As-C混下面全景
	6 調査前風景	
	7 出土遺物	図版22 1 D区南側道 9世紀前半洪水層下面全景
V 下増田常木II遺跡		2 同 As-C混下面全景
図版15	1 遺跡遠景 (矢印部分)	3 E区北側道 As-B下面全景
	2 近世面 2号溝全景	4 同 As-B下面 4号溝土層堆積状況
	3 同 土層堆積状況	5 同 9世紀前半洪水層下面全景
	4 同 3号溝土層堆積状況	6 同 土層堆積状況
	5 同 5・6号溝全景	7 同 As-C混下面全景
図版16	1 近世面 4~6号溝全景	8 同 As-C混下面畦畔
	2 同 1号道路状遺構	
	3 9世紀前半洪水層下面 1号畦畔	図版23 1 G区北側道 As-B下面基本堆積土層
	4 同 1号畦畔土層堆積状況	2 同 As-B下面畠跡
	5 同 1・2号畦畔	3 同 As-C混下面水田跡
	6 同 1・2号畦畔	4 同 水口
	7 同 3号畦畔	5 同 水田跡
	8 同 1・2・3号畦畔	6 同 As-C混下面15号溝
VI 下増田越渡IV遺跡		7 同 As-C混下面畦畔
図版17	1 遺跡遠景	8 同 As-C混下面水田跡
	2 A区北側道 As-B下面全景	
	3 同 As-B下面 1・2号溝	図版24 B区 1・2号住居跡出土遺物
	4 同 9世紀前半以降大溝	
		図版25 B区 7~10号住居跡・41号土坑・大溝・C区30号土坑・井戸・G区畠出土遺物
		図版26 遺構外出土遺物

I 序 章

第1章 調査に至る経緯

北関東自動車道に係わる埋蔵文化財発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団により平成7年度から行われている。本市においても、本線北側および南側に側道の建設を予定しており、本線同様、埋蔵文化財包蔵地における工事であり事前の記録保存の発掘調査を行うこととなった。

このため、本市では平成9年度から前橋市北関東自動車道対策室より、発掘調査の依頼を受けて側道の調査を開始した。横手湯田遺跡を始め計4遺跡の調査が行われ、貴重なデータを得ている。

今年度の発掘調査は平成10年4月6日付で前橋市長萩原原弥惣治より前橋市教育委員会あてに北関東自動車道側道道路改良事業に伴う本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受託し、4月21日に両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。

その後、前橋市埋蔵文化財発掘調査団は本発掘調査の委託契約を4月23日付で山武考古学研究所と締結し、発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと、平成11年3月19日までの調査期間で実施された。

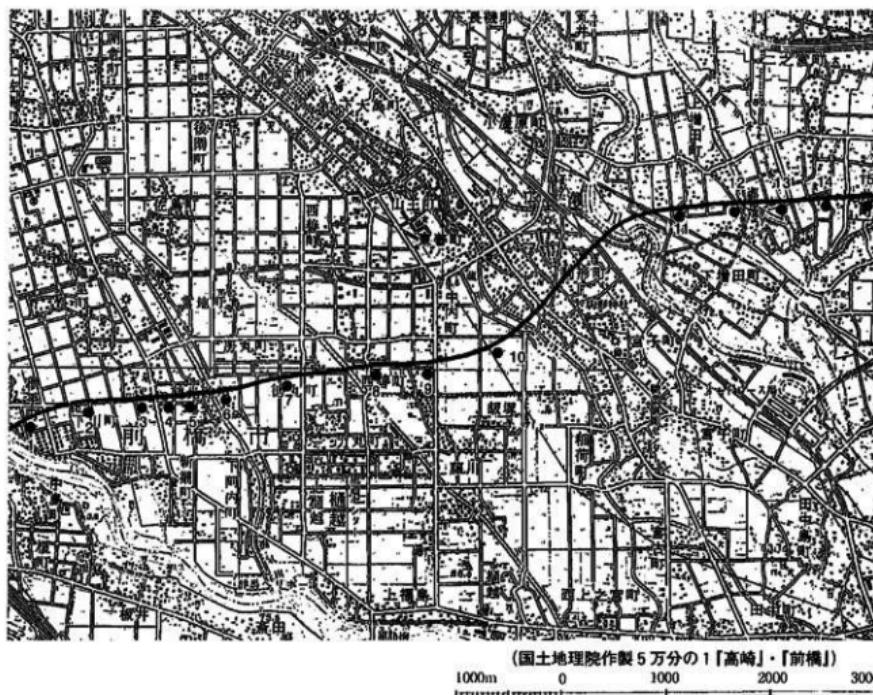
第2章 遺跡の地理・歴史的環境

前橋市は背後に赤城山、榛名山がそびえ、前方には関東平野が広がり、山間部と平野部の境に位置している。市域を地形的に区分すると、赤城山麓一帯に広がる大間々扇状地（赤城火山斜面）、赤城山麓端部から前橋市街地の北部に広がる河成段丘、旧利根川流路の広瀬川低地帯、南部を中心に広がる前橋・伊勢崎台地の4つにおおむね区分される。現利根川は前橋・伊勢崎台地の中央を縦うように北西より南東方向に流下している。

大間々扇状地は赤城山の噴火に伴う火山碎屑岩層堆積からなり、広域にわたり緩傾斜を形成している。また、この傾斜面には多くの小河川が南流する。そして、この傾斜面の端部と、旧利根川により形成された全新世の河成段丘上には旧石器時代より中・近世にわたる多くの遺跡が点在している。広瀬川低地帯では、前橋台地と大間々扇状地とを分断するように、北西～南東方向へ帶状に広がっている。関東ローム層の堆積がほとんど見られず、かつて利根川が運搬してきた沖積砂礫物が厚く堆積している。そのため、遺跡が希薄であるという見解が一般的であったが、近年の発掘調査の結果、低地帯にも各時代にわたり遺跡が点在していることが明らかとなった。さらに、前橋・伊勢崎台地上には広瀬川低地帯を挟む河成段丘上と同様に、多くの遺跡が展開することが知られているが、これまで縄文時代以前の遺跡についての検出例は極端に少なかった。しかしながら、前橋市總社町高井桃ノ木遺跡の調査では、縄文時代前期末より中期初頭の一括資料が確認され、今回の北関東自動車道関連の調査でも縄文時代草創期の資料が検出されるなどその数は徐々に増えている。

今回の北関東自動車道側道および同道路改良事業に伴う発掘調査は、第1図に示す通り前橋管内では15遺跡に及ぶ。この4区分される市域を東西に横断し、市の西端より東端までの広範な範囲で線状に実施されている。また、第2・3図に示す迅速図で見ると、基本地形の変化はないものの、周辺環境の変貌は著しい。

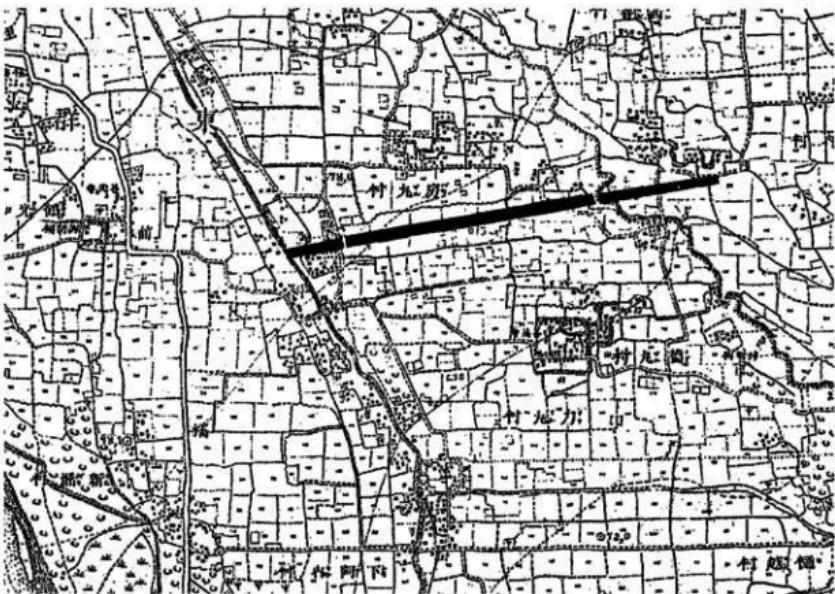
本報告に掲載する徳丸高畠遺跡(6)・徳丸仲田遺跡(7)・西善尺司遺跡(8)の3遺跡は、旧利根川流路である広瀬川低地帯とその西側に広がる前橋・伊勢崎台地上に、下増田常木遺跡(12)・下増田越渡遺跡(13)の2遺跡はこの広瀬川低地帯と大間々扇状地とが接する河成段丘上に立地している。



第1図 遺跡の位置と路線内の遺跡

表1 前橋管内北関東自動車道路関連遺跡一覧

遺跡名	調査年度	遺跡の概要	備考
1 横井戸山遺跡	平成10年度	古墳時代～近世の集落と水田・墓	9年度調査報告概刊
2 横手湯田遺跡	平成8～10年度	古墳時代～中・近世の水田と畠及び集落・墓	
3 村中遺跡	平成10年度	古墳時代～近世の集落と水田	
4 西田遺跡	平成9・10年度	古墳時代～平安時代の水田と集落・墓	
5 鶴光路桜橋遺跡	平成9・10年度	古墳時代～中・近世の水田と集落・館	10年調査部分調査本報告
6 徳丸高塚遺跡	平成10年度	古墳時代～中・近世の集落と水田・館	10年調査部分調査本報告
7 徳丸仲田遺跡	平成9・10年度	縄文時代～中・近世の水田と集落及び墓	10年調査部分調査本報告
8 西普尺司遺跡	平成9・10年度	古墳時代～中・近世の集落・水田・館・墓	
9 中内村前遺跡	平成9・10年度	古墳時代～中・近世の集落・館・水田	
10 前田遺跡	平成9・10年度	古墳時代～近世の集落と水田	
11 上増田烏遺跡	平成10年度	近世の集落	
12 下増田常木遺跡	平成8・10年度	弥生時代～中・近世の集落と水田	10年調査部分調査本報告
13 下増田越渡遺跡	平成8～10年度	古墳時代～中・近世の集落と水田及び墓	10年調査部分調査本報告
14 萩原遺跡	平成8・10年度	縄文時代～中・近世の集落と水田	
15 荒井大田園遺跡	平成8年度	古墳時代～中・近世の水田と集落	

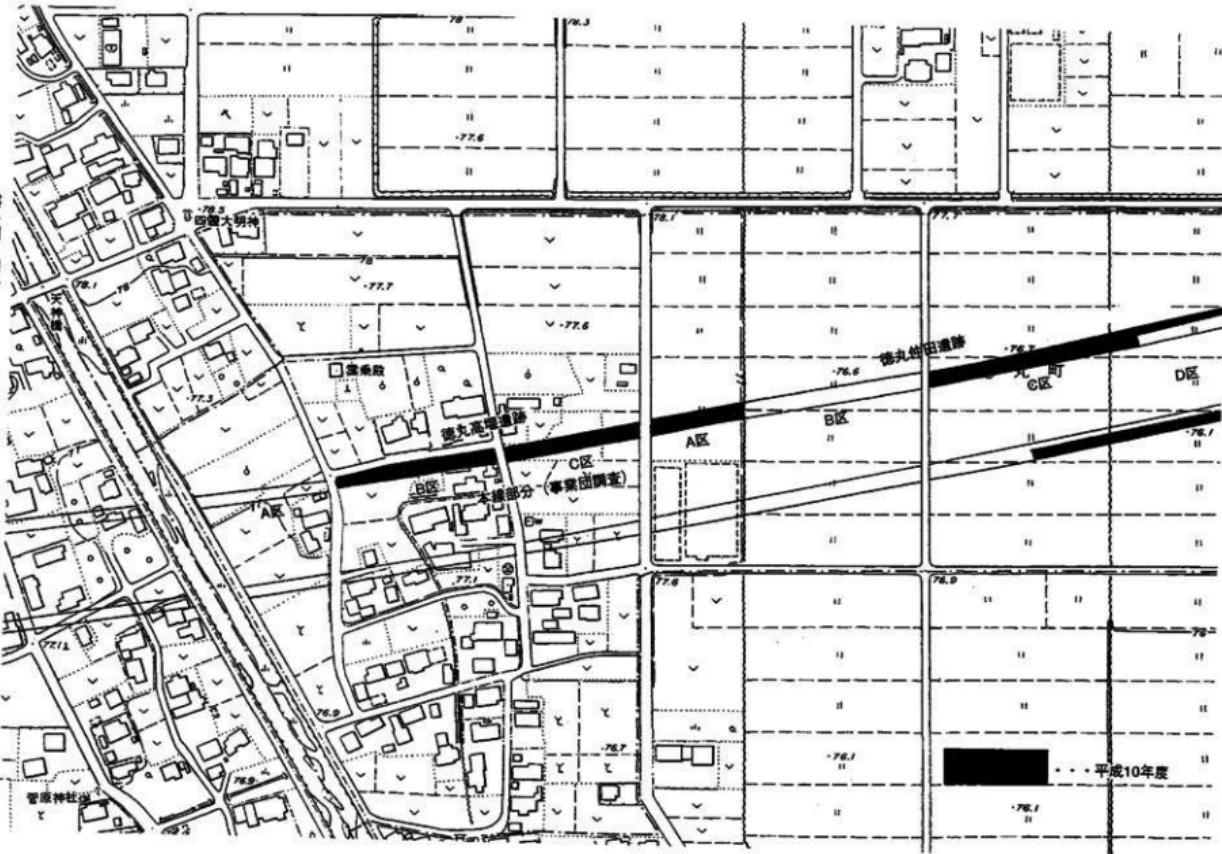


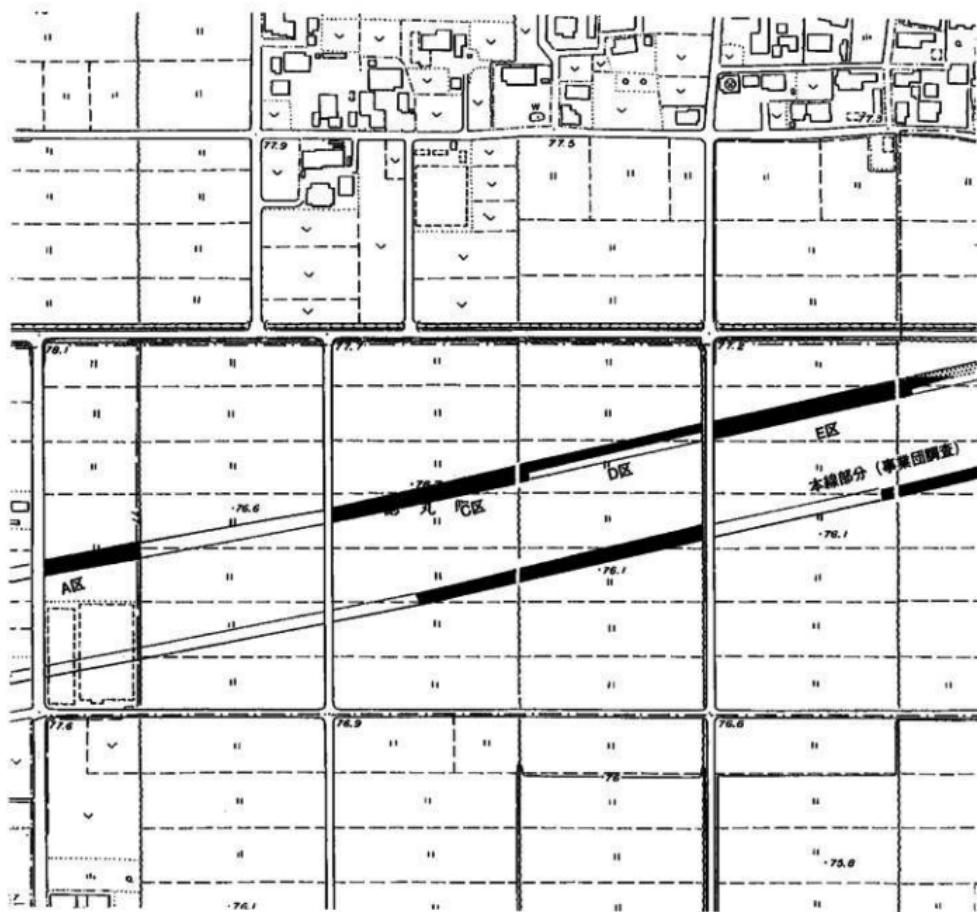
第2図 德丸高塙・徳丸仲田・西善尺司遺跡の位置（迅速図1：20,000倉貢野驛）



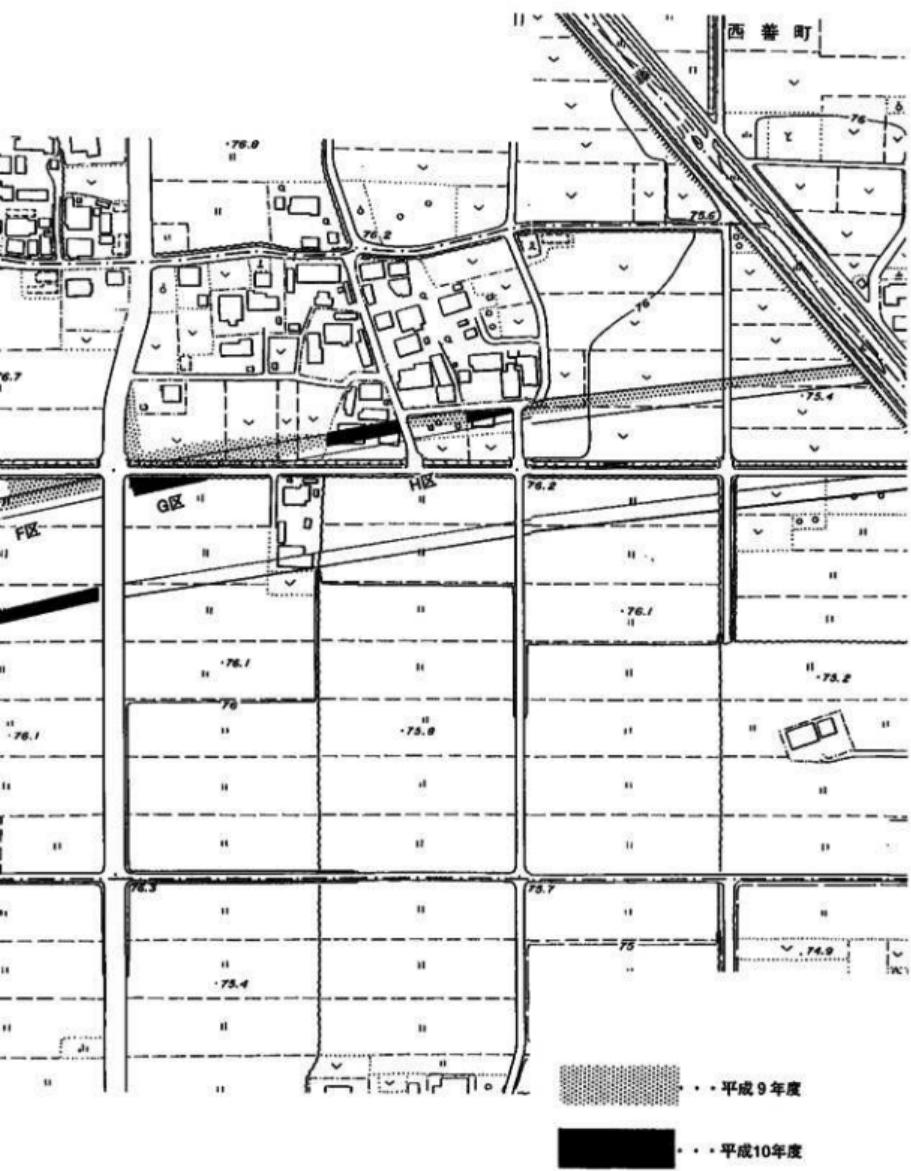
第3図 下増田常木・下増田越渡遺跡の位置（迅速図1：20,000伊勢崎町）

第4図 調査区区割り対比図(1) 徳丸高架道路 (1 : 3,000)



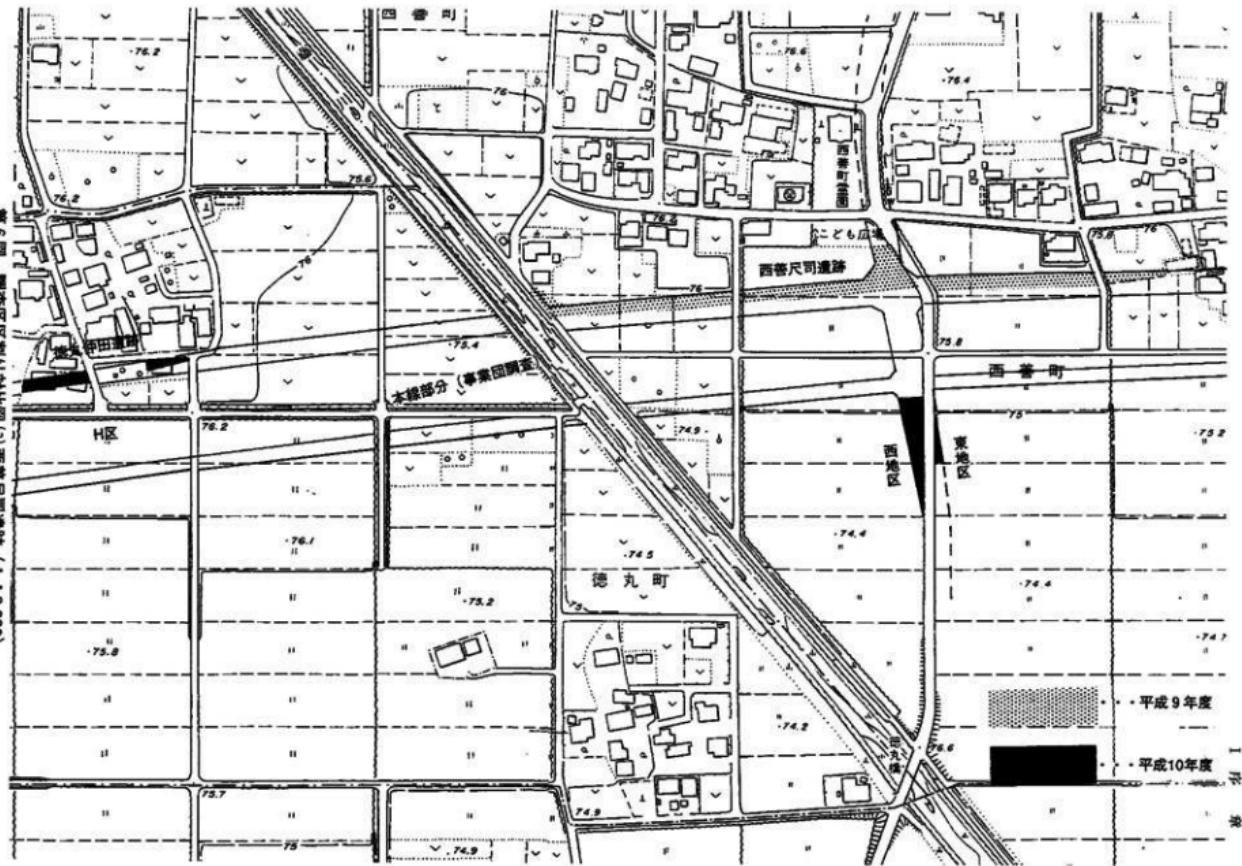


第5図 調査区区割り対比図(2)徳九仲田遺跡

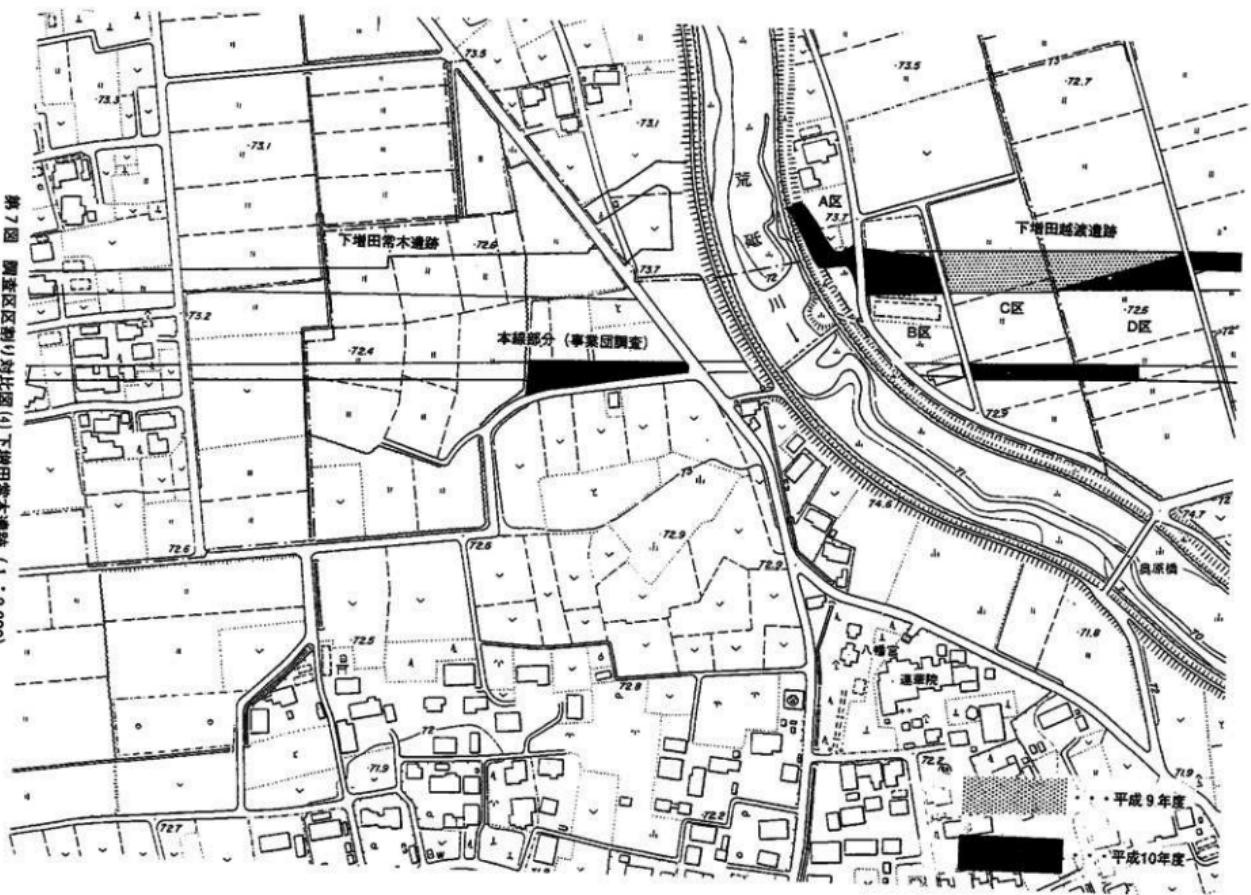


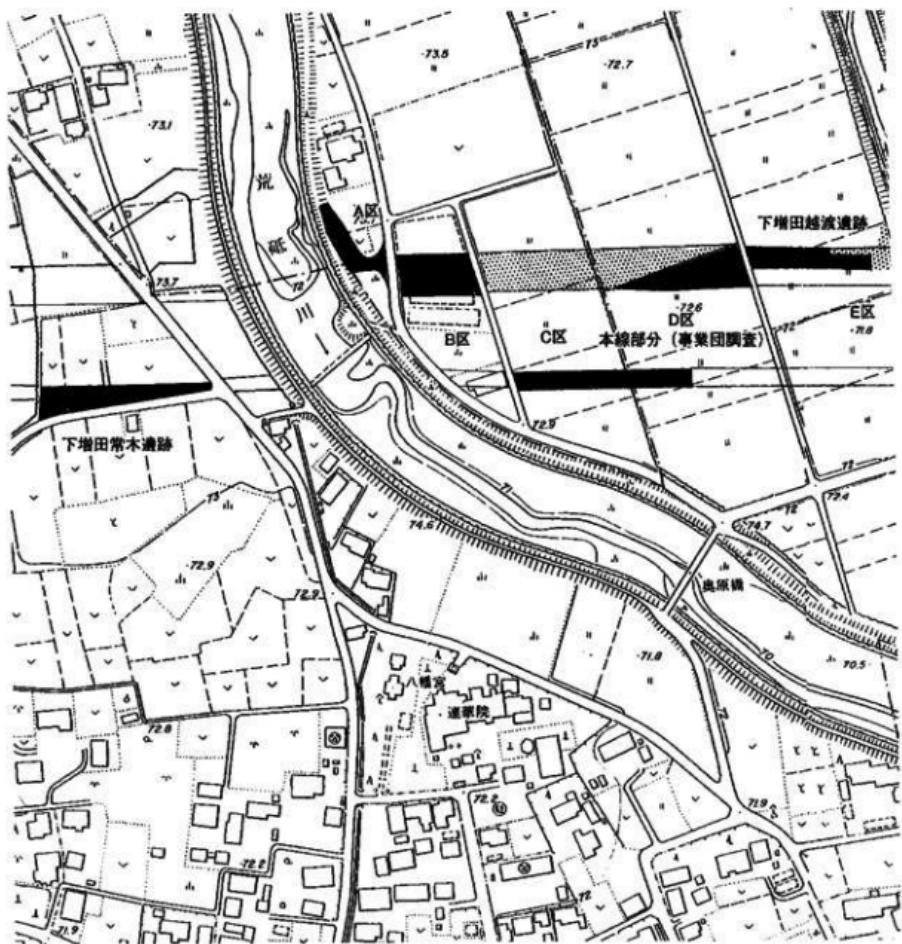
第6図 西堀町区割り対比図(3)西堀尺司遺跡(1:3,000)

— 5 —

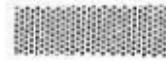


第1圖 調查區剖面圖(4)下增田常木遺跡 (1:3,000)





第8図 調査区区割り对比図(5) 下増田越渡遺跡 (1)



・・・平成9年度



・・・平成10年度

第3章 調査の方法

第1節 遺跡および調査地区の呼称

① 遺跡の呼称

徳丸高塚遺跡、徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、下増田常木遺跡、下増田越渡遺跡の5遺跡は、いずれも各々單一遺跡であり、I・II・・等と本來は区分されるものではない。しかしながら、前橋市教育委員会の指導により、調査および整理の便宜を圖る為に、県埋蔵文化財調査事業団が行った本線部分をI区（下増田越渡遺跡はI・II区）、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した側道部分を調査年度毎にII区～IV区（下増田越渡遺跡はIII・IV区）と以下の様に区分・呼称している。

表2 地区別遺跡呼称一覧

遺跡名	調査年度	調査主体	備考
徳丸高塚遺跡	平成10年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線
徳丸高塚II遺跡	平成10年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 B・C区
徳丸仲田遺跡	平成9・10年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線
徳丸仲田II遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 A～E区（18工区～21工区）
徳丸仲田III遺跡	平成10年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 A・C・D・E・F・G・H区
西善尺司遺跡	平成9・10年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線
西善尺司II遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 A～D区
西善尺司III遺跡	平成10年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	取りつけ道路部分 西地区・東地区
下増田常木遺跡	平成8・10年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線
下増田常木II遺跡	平成10年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道
下増田越渡遺跡	平成8・9年度	群馬県埋蔵文化財調査事業団	本線 I (A・B・C・D区)、II (H・I区)
下増田越渡III遺跡	平成9年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 C～H区
下増田越渡IV遺跡	平成10年度	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	側道 A・B・C・D・E・G区

② 調査区域の呼称

今回、前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施した各遺跡（側道部分）は、調査年度毎に第4～8回に示す通り現道および現水路を基準として細かに区分される。その為、調査の便宜を圖る目的で側道部分を西側よりA・B・・H、又本線部分を境に北側を北側道、南側を南側道とそれぞれ呼称した。

また、検出された遺構名も各調査区域毎に付して調査を進めた。したがって、連続する調査区域で同一遺構でありながら遺構番号が異なる場合も生じている。これらの遺構については各説明の中で同一遺構であることを述べている。

尚、県事業団並びに市教育委員会実施遺跡とは文化財および遺構の確認面について御指導を賜り、統一を図るよう努めた。しかし、同調査区は未報告であり、検出遺構に関する呼称の統一は行われていない。

第2節 調査の方法

① 遺構検出作業

遺構の検出作業は、各地区別の各文化層の埋没状況を確認した上で、表土層および遺構確認面上部までの土層を重機により除去した。また、第1面の調査終了後、第2面以下（最大5面調査）の掘り下げも同様に重機によった。その後、鍵層を慎重に除去し遺構の検出を行った。

各文化層において遺構の有無が確認できない場所や、平面的に遺構を把握することができない場合等は、状況に応じてサブトレーナーを設定し、確認を行ないつつ表土（各文化層までの土層）除去作業を実施した。尚、標準堆積土層は調査区と区域外を隔する際で実施している。

② 遺構調査

遺構の掘り下げに当たっては、半截若しくはベルトを設定し、土層を観察した後に完掘した。出土遺物については、遺構外出土遺物はグリッド毎に一括して取り上げを行った。遺構内出土遺物については、まとまりのある資料については、状況に合わせた出土状況図を作成し取り上げを行い、また、その他の細片については遺構内一括で取り上げを行った。

③ 測量

調査グリッドの基準点測量は、北関東自動車道本線建設事業の基準点測量で用いられたトラバースを使用して行い、調査区域全体に国家座標系第IX系に合わせて10m方眼のグリッドを設定した。このグリッドは当初、各遺跡ごとに設定を行ったが、調査地区的細分割により同一名称のグリッドが数多く設定され、整理に混乱をきたす状況が予測された為に、グリッド表記をやめて南東角の座標値で行うこととした。

水準点は公共水準を用い、調査区の各所にB、Mを設定し、測量の便宜を図った。

各遺構の測量に当たっては、埋没状態の観察等、遺構の全貌が把握できるよう記録した。

遺構の平面実測図は各文化層毎に航空測量を基本とし、状況に併せて平板による地上測量も実施した。航空測量、平板測量共に1/40縮尺で地区別の個別測量を行い、その後、同図を縮小編纂して1/200の遺跡全体図を作成した。

尚、各遺構のセクション図、エレベーション図は1/20の縮尺で、遺物出土状況の個別実測についても同様に1/20の縮尺で作成した。

④ 写真撮影

遺跡の全景写真は一部を除き、各文化層毎に航空写真撮影を実施した。航空写真撮影は6×6cm白黒、およびカラースライドフィルムにより実施した。

各遺構の写真撮影は各調査の段階毎に遺構の状況が把握できるように実施した。使用したカメラは小形カメラ3台で、使用フィルムは白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mmの3種類である。

尚、重要遺構については、遺構の詳細が明確に把握できるよう撮影した。

⑤ 安全対策

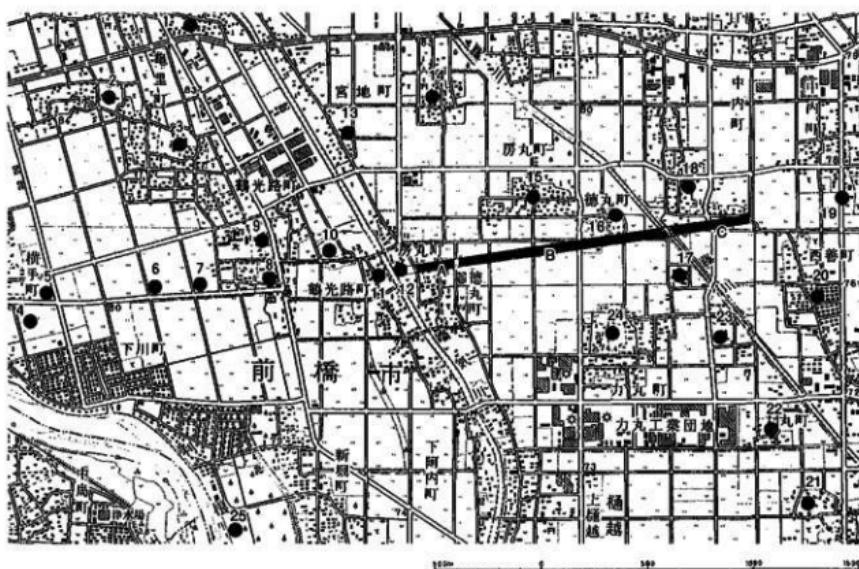
調査区には、調査を実施していることを明示し、関係者以外の立入を禁止する為に、調査区の周囲に単管パイプを2m間隔で打ち込み、三重のロープで囲い、要所には立入禁止の看板を設置した。

その他、夜間の侵入を禁止する為に赤色灯を点灯させ、安全の確保につとめた。

II 德丸高塚 II 遺跡

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

徳丸高塚II遺跡の所在する徳丸町は前橋市の南部にあたり、JR前橋駅の南東約6.5kmに位置している。遺跡地の北1.0kmには県道高崎駒形線が東西に走り、西0.8kmに鎌倉期以降の古道に沿っているといわれる県道前橋玉村線が南北に走る。本遺跡の所在する徳丸町および周辺の下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・西善町・中内町は、低地上に水田・畑が広がり、微高地には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の群馬郡徳丸村地味の項には「黒埴ニシテ緑色ヲ帶ヒ音脂アリ水利便ニシテ諸種ニ適ス但東西河畔ノ地砂壠ニシテ桑柘ニ宜シ」と記され旧状を伝える。



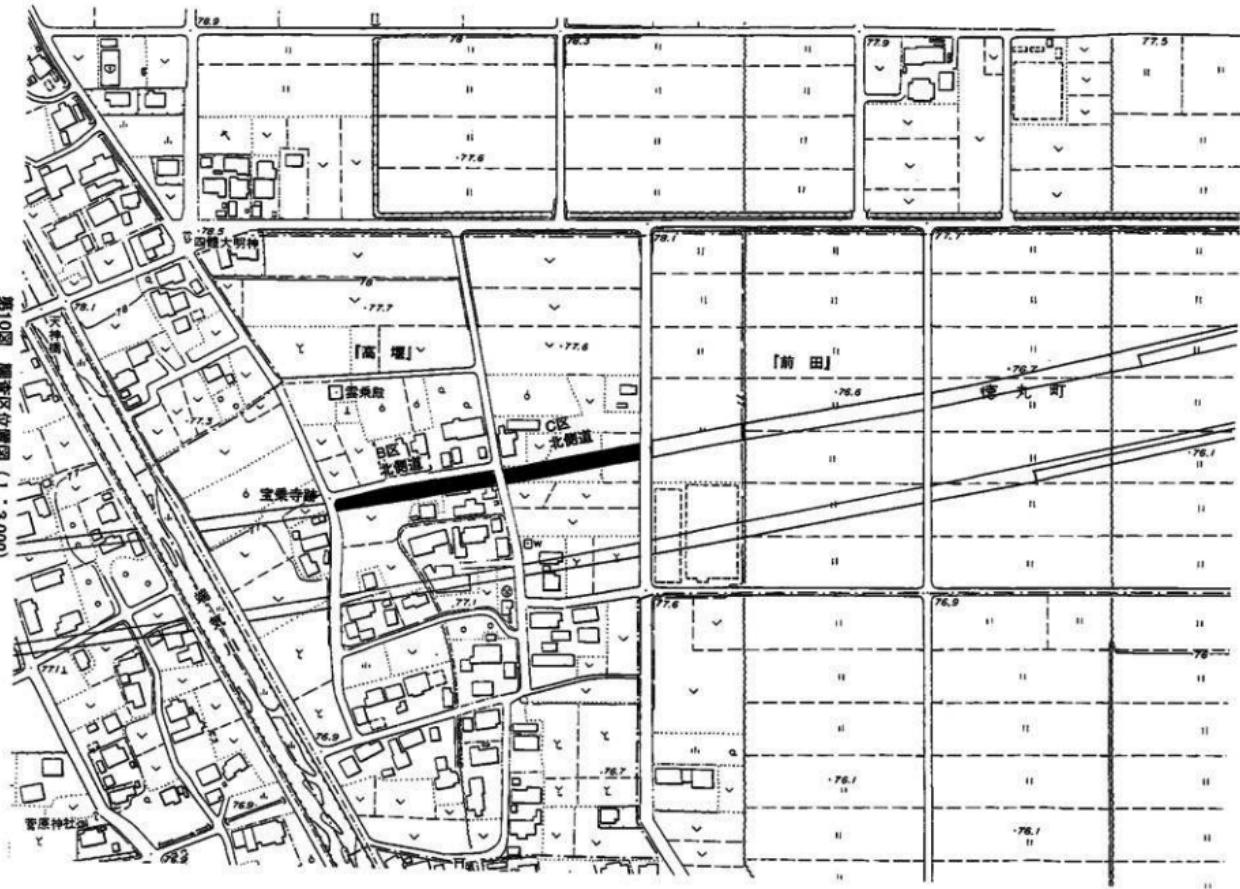
(国土地理院 2万5千分の1 「前橋」「大胡」「高崎」「伊勢崎」)

A 徳丸高塚遺跡 B 徳丸仲田遺跡 C 西善寺跡遺跡

1. 宿阿内城（危里阿内城）跡 2. 危里（天神）矢島百石屋敷跡 3. 成菩提山光明院極楽寺 4. 井戸南遺跡 5. 横手宮田遺跡 6. 横手湯田遺跡 7. 鶴光路線引遺跡 8. 鶴光路（村中）環壕造構群 9. 雲上山普光寺 10. 西田遺跡 11. 鶴光路板橋遺跡 12. 宝乗寺跡 13. 宮地中田遺跡 14. 東宮地環壕造構群 15. 房丸東環壕造構群 16. 徳丸東（鶴川）環壕遺構群 17. 徳丸東（後）環壕遺構群 18. 伊西善環壕造構群（須田屋敷） 19. 中内村前遺跡 20. 橫堀環壕造構群 21. 中猶越環壕造構群 22. 東力丸（宮川）環壕遺構群 23. 東力丸（藤川）環壕造構群 24. 力丸城跡・降龍山普昌寺 25. 新堀城跡

第9図 周辺の遺跡

第10回 調査区位置図(1:3,000)



II 徳丸高塚Ⅱ遺跡

本遺跡の周辺を概観すると、西2.7kmに利根川が南流し、周辺に、端気川・藤川などの小河川が南東へ流下する。現在では河川改良事業・圃場整備事業により改良が行われ、一面に重畠たる穀倉地帯が広がりをみせ、旧地形を読み取ることは難しい。これまで実施された調査からは、低地上に浅間山噴火の影響のみられる古墳時代前期および平安時代後期の水田が営まれておらず、現在に至るまで生産行為がなされたことが推測されている。さらに端気川および藤川沿いの微高地上では同時期の集落・中世館跡および環濠屋敷跡が展開する。特に本遺跡の位置する三丸地区（徳丸・力丸・房丸地区的通称）や鶴光路、西善地域周辺は、中世以降の城館跡（宿阿内城・力丸城・新堀城など）、環濠屋敷跡および寺社（成落提山光明院極楽寺・雲上山善光寺・降龍山善昌寺など）が数多く確認される地域である。三丸地区（徳丸・力丸・房丸）は、すべて地区名に「丸」が使用されている。この「丸」は中世館等を示すもの、あるいは莊園制の単位などの諸説があり、詳細は不明であるものの、中世期において一つのまとまりを示すものであると推測される。

本遺跡は、前橋市徳丸町小字「高塚」に所在し、東側に徳丸仲田Ⅲ遺跡が位置する。また本遺跡B区北側道以西は微高地上に、C区北側道以東（徳丸仲田Ⅲ遺跡を含む）は低地上にそれぞれ立地している。

第2章 調査の経過

9月 下旬 平成10年度徳丸高塚Ⅱ遺跡の発掘調査を開始する。

C区北側道の調査区設定、表土除去を行う。

C区北側道、As-B下面調査を行う。

C区北側道、As-C混土層下面調査を行う。

C区北側道、弥生時代以前面調査を行う。

10月 上旬 C区北側道、As-B下面調査を行う。

C区北側道、As-C混土層下面調査を行う。

C区北側道、弥生時代以前面調査を行う。

C区北側道の発掘調査を終了する。

中旬 C区北側道にテントを設営する。

下旬 B区北側道の産業廃棄物撤去および搬出を行う。

B区北側道、中世面調査を行う。

11月 上旬 B区北側道、中世面調査を行う。

B区北側道、弥生時代以前面調査を行う。

B区北側道の発掘調査を終了する。

C区北側道に設置したテントおよびトイレ・発掘器材等を撤去する。

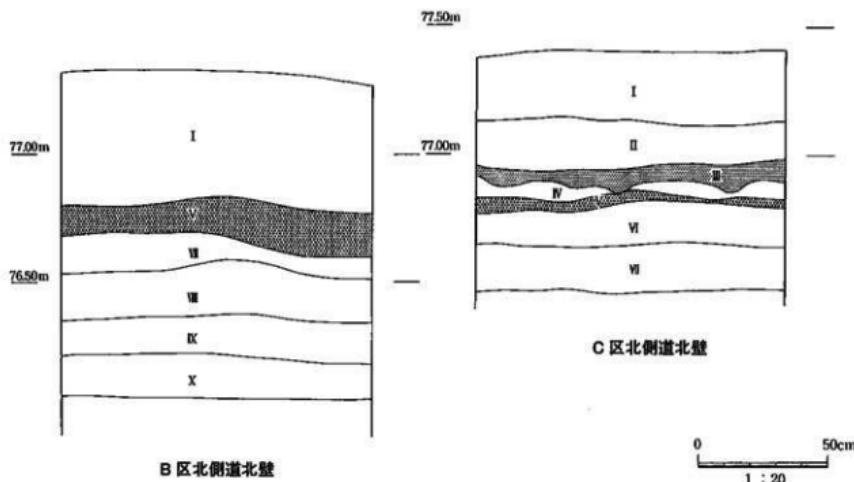
B区北側道およびC区北側道に設置した安全対策器材を撤去する。

B区北側道の調査終了をもって平成10年度徳丸高塚Ⅱ遺跡の発掘調査を終了する。

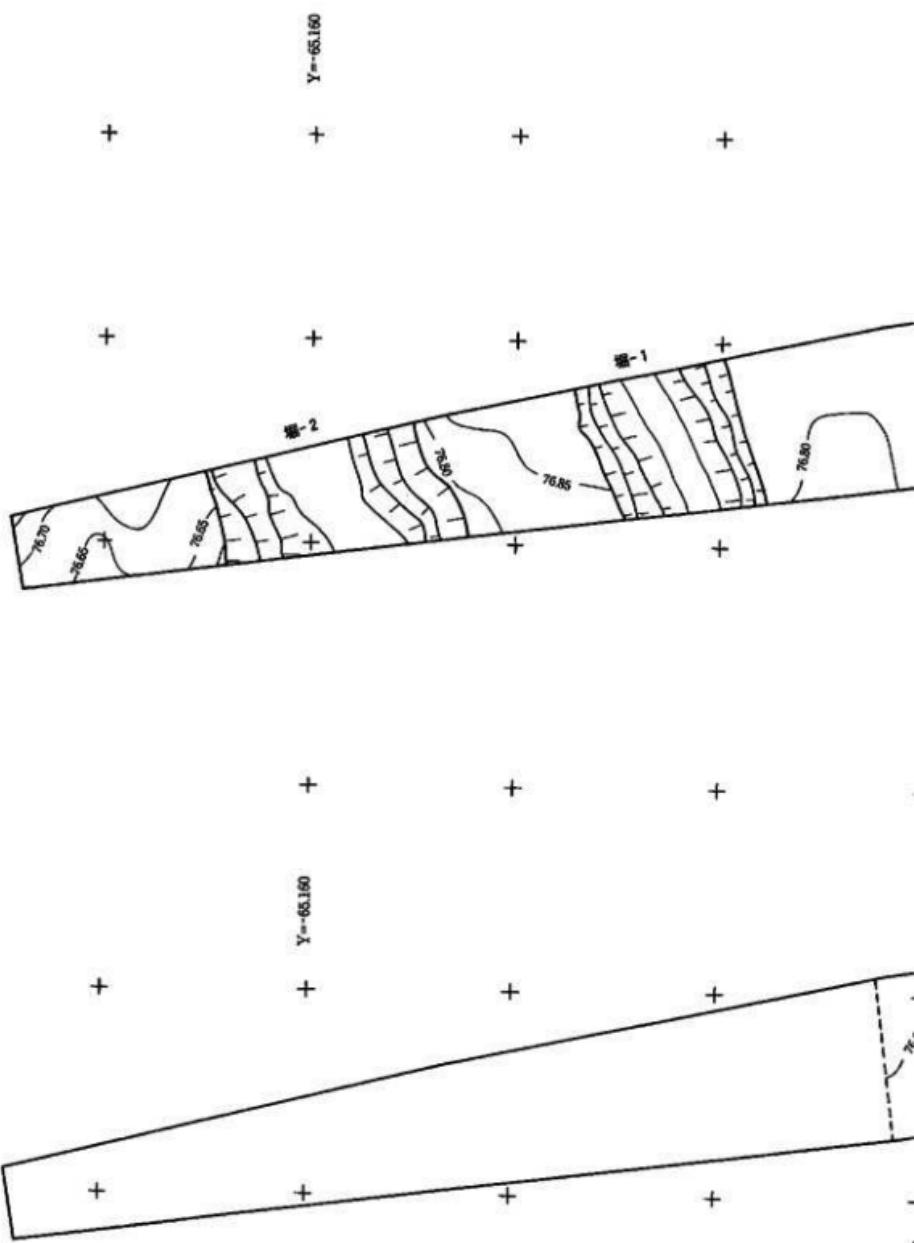
第3章 標準堆積土層

本遺跡調査によって検出された文化層は、中世面の第1面、浅間B軽石下面の第2面、浅間C軽石混土層下面の第3面、弥生時代以前面の4面に分けられる。本遺跡で確認された縦層は浅間B軽石層、浅間C軽石混土層であった。以下はB区北側道、C区北側道で観察したもので、本遺跡の層序を示すものである。

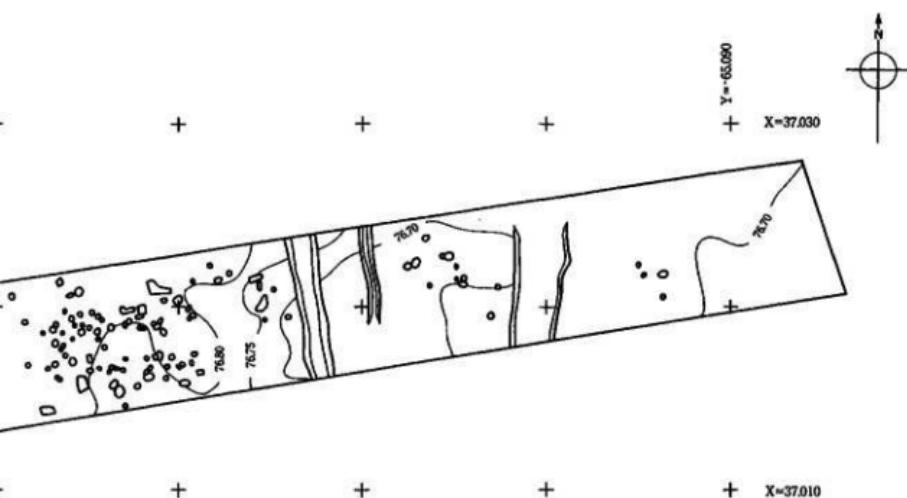
- I 暗褐色土層 現耕作土。しまり、粘性ともに弱い。
- II 灰色土層 旧耕作土。しまりはあるが、粘性は弱い。
- III 浅間B軽石堆積層 天仁元年(1108年)降下浅間B軽石堆積層。(上面が第1面 中世面であるが、上層は擾乱を受けている)
- IV 黒色土層 (上面が第2面 浅間B軽石下面)
しまり、粘性ともに弱い。
- V 灰褐色土層 しまり、粘性ともにあり。白色軽石(浅間C軽石)を少量含む。
(下面が第3面 浅間C軽石混土層下面)
- VI 黒灰色土層 しまり、粘性ともにあり。
- VII 淡灰色土層 しまり、粘性ともにあり。
- VIII 灰色土層 しまり、粘性ともにあり。砂質。
(下面が第4面 弥生時代以前面)
- IX 灰白色土層 しまり、粘性ともにあり。シルト質。
- X 黑灰色土層 しまり、粘性ともにあり。



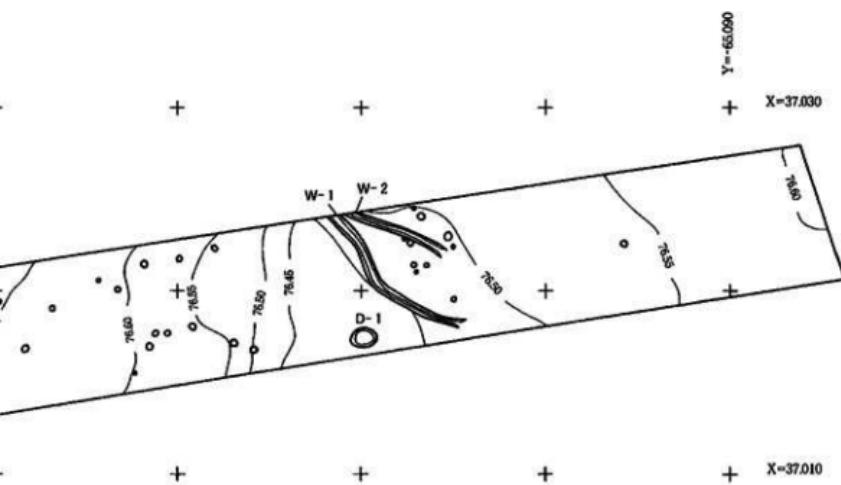
第11図 標準堆積土層



第12図 B

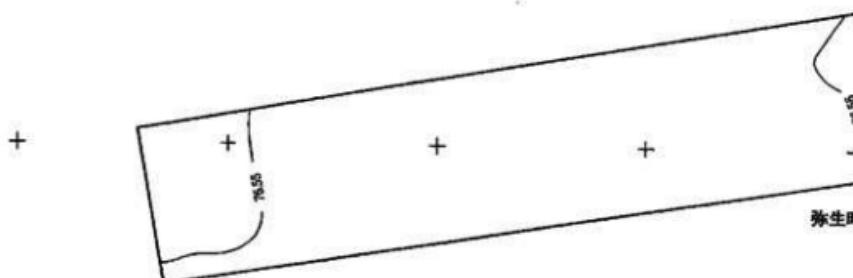
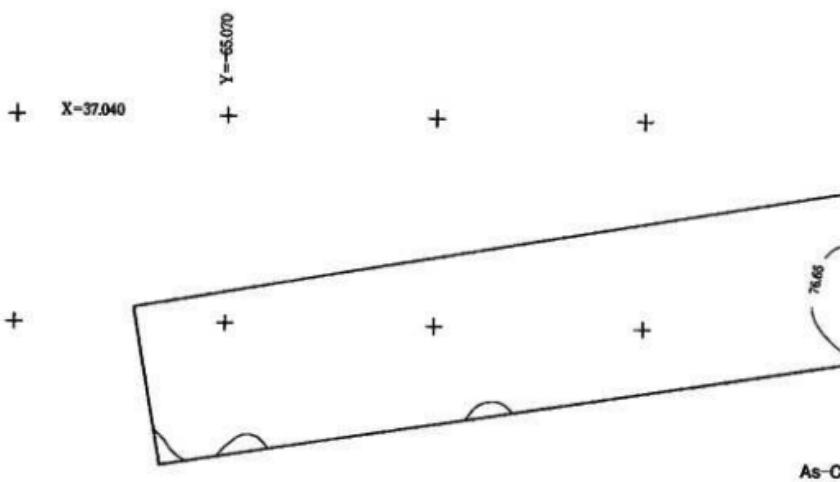
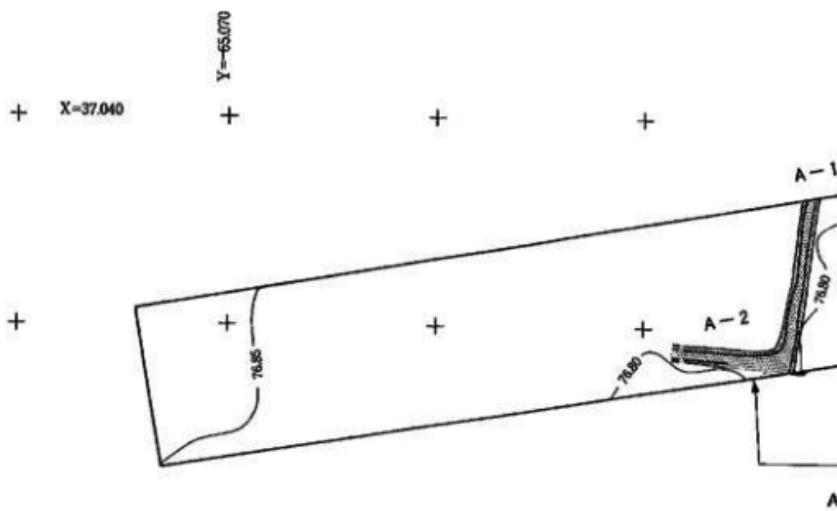


中世圖

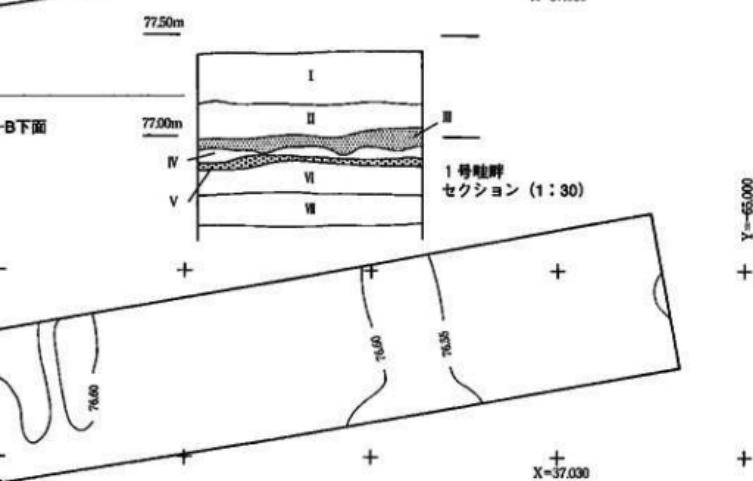
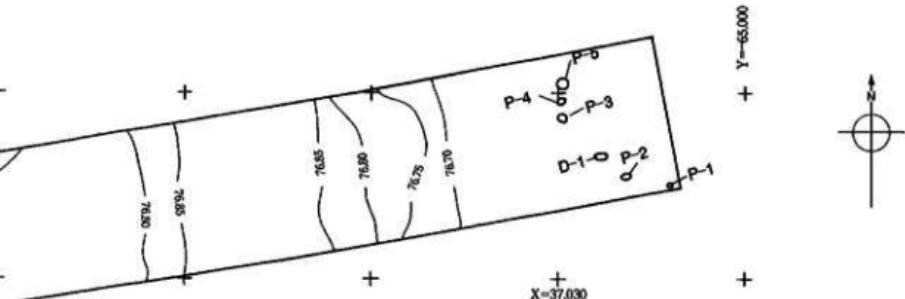


古生時代以前面

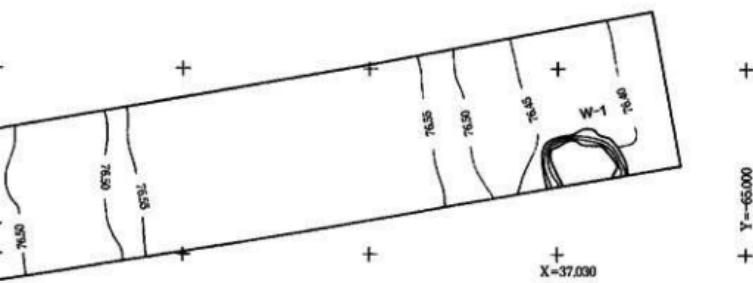
(1 : 300)



第13図 C区北



泥土層下面



代以前面

(1 : 300)

第4章 遺構と遺物

第1節 B区北側道

第1項 概要

本調査区は小字「高塚」に位置する。小字「高塚」が示すように、西方200mに端気川が南流し、橋越塚が設けられ、本区は微高地に立地する。調査区西側には天台宗に属する宝乗寺が位置し、本線部分の発掘調査により方形に巡らされた環濠を持つ寺院であることが明らかになっている。同寺は開基・開山および創建年代は不明であるが、江戸時代元禄期には既に存在し、文政期には無住の寺となっていたといわれ、跡地には北関東自動車道の工事直前まで住僧墓碑が6~7基、不動堂が現存し、北関東自動車道工事の際に、不動堂の解体を行い、住僧墓碑を徳丸町芸乗殿（小字「高塚」）に移転している。墓碑には「（梵字） 大徳口譽□□□」、「（梵字） / 権大僧都法印辯海 / 行年 六十 / 施主」「享保四 / 天眞大阿闍梨法印起慶 / 二月朔日」「宝曆 / 権大僧都法印昌昌 十月廿三日」「（宝筐印塔）」の銘がみられ（移転前の状況で判読できる限りをここに示した）、不動堂には「徳丸村」「正徳五年」などの銘がある額口が掲げられていた。

本調査区において確認された文化層は2面である。第1面は中世鉢跡検出面、第2面は弥生時代以前面である。1面は堀2条、溝3条、土坑12基、2面は溝2条、土坑1基、ピット15基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

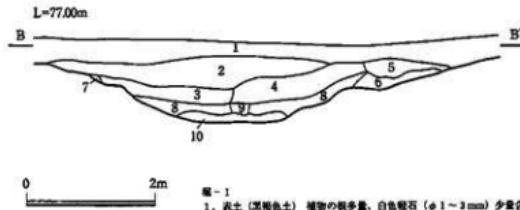
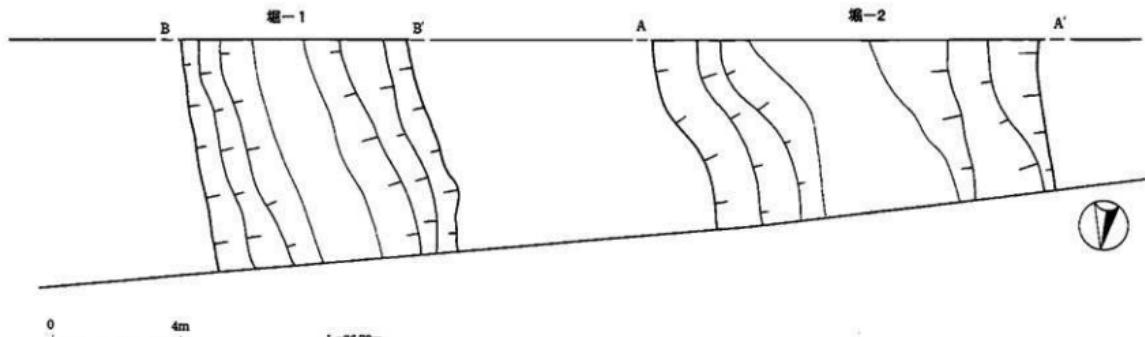
第2項 中世面

中世面は微高地上に立地する。本区は既存の家屋や畠地により、東側の大部分は擾乱を受けているため、浅間B・C輕石の残存は、著しく不良であった。本検出面東側より、近代~現代の家屋に伴う掘り込み多数と、土坑12基、溝3条がみられたが、いずれも近代以降の擾乱を多く受けているため、本区東側の弥生時代以前面より上層では、遺構の明確な時期およびその性格をとらえることはできなかった。しかし、西側は、浅間B輕石、浅間C輕石の残存は不良であったものの、中世鉢跡の堀が2条検出されている。

1号堀・2号堀 X=37,010、Y=-65,140で検出されている。1号堀は、調査区を南北（N26°W）に継断し、検出長7.30m、上端幅6.94~7.34m、下端幅1.50~2.00m、深さ1.05~1.65mを計測し、断面形状は逆台形を呈する。覆土中より中世（14~15世紀代）の羽口および火舎が出土している。2号堀は、調査区を南北（N26°W）に継断し、検出長5.50m、上端幅10.40~11.90m、下端幅5.40~6.00m、深さ1.07~1.44mを計測し、断面形状は逆台形を呈する。土層断面により埋没後に上端幅3.60m、下端幅1.50~2.00m、深さ0.50~0.60mの溝が再掘削（若しくは改修）された跡がみられ、本遺跡付近一帯に確認されている環濠屋敷との関係が指摘される。出土遺物は埋没後の再掘削を受けない堀底部より、角閃石安山岩を材質とする五輪塔火輪部（梵字などの刻なし）が1点出土している。出土した五輪塔火輪から推定する空・風輪の規模は、輪（幅21cm）の空・風輪接続孔（径7cm）からほぼ幅14~15cmに推定復元される。以上のことより、少なくとも空・風輪が小さい古い段階のものではなく、鎌倉時代中期に成立し、鎌倉末~室町時代にかけて盛行する正形五輪塔以降のものと考えられる。1号堀・2号堀（再掘削）は、同一の走向（N26°W）、同規格（上端幅、深さなど）を示し、ほぼ同時期に機能した遺構と推測され、これらはいわゆる二重堀であったと考えられる。さらに本遺跡1号堀および2号堀は、南隣接地である本線部分へ続くことが確認され、本遺跡B区西隣に位置する方形に巡らされた環濠を持つ宝乗寺（天台宗）との関連が注目される。

第14図 B区北側縦1・2号坑

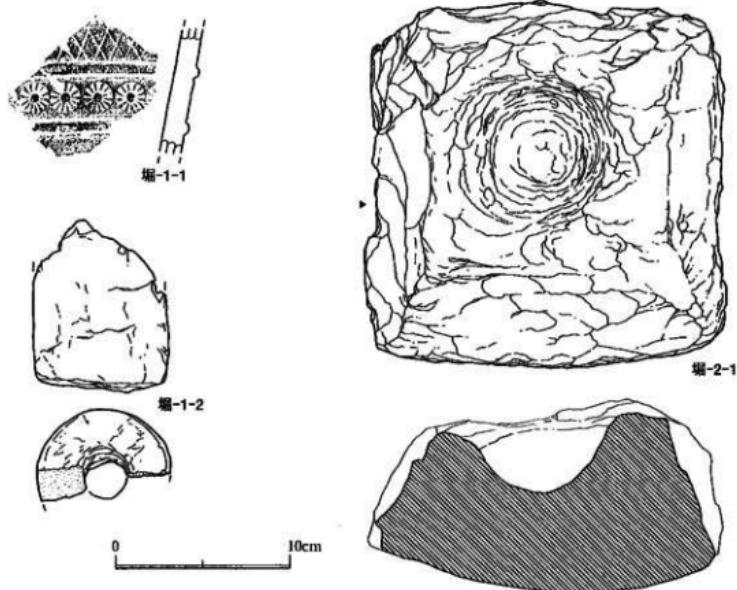
- 14 -



- 図-1
1. 灰土 (灰褐色土) 植物の根多量、白色粗石 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 少量含む。(構造致しい)
粘性弱くしまり弱い。
 2. 灰褐色土
白色粗石 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
 3. 明灰褐色土
白色粗石 ($\phi 1\text{mm}\text{以下}$) 少量含む。粘性ありしまり弱い。
 4. 明灰褐色土
礫 ($\phi 2 \sim 5\text{cm}\text{大}$) 多量、黑色土塊 ($\phi 1\text{cm}$) 多量に含む。(構造
致しい) 粘性あり。しまり弱い。
 5. 灰褐色土
礫 ($\phi 1 \sim 2\text{cm}\text{大}$) 少量含む。(構造致しい) 粘性弱くしまり弱い。
シルト土を含む。粘性あり。しまりある。
 6. 浅灰褐色土
礫 ($\phi 5 \sim 7\text{cm}\text{大}$) 多量に含む。粘性あり。しまりあり。
 7. 灰褐色褐質土
砂或粉分量、漂化鉄成岩多量に含む。粘性ややあり。しまりあり。
 8. 黒灰褐色土
黒色土塊 ($\phi 1\text{cm}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
 9. 灰褐色土
砂成分多量に含む。粘性強くしまりあり。
 10. 黑灰褐色土
砂成分多量に含む。粘性弱くしまりあり。

- 図-2
1. 灰土 (黑褐色土) 砂 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 多量 ($\phi 1\text{cm}\text{以下}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
礫 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 多量、シルト土少量、炭化物 ($\phi 1\text{cm}\text{以下}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
 2. 灰白色土
礫 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 多量、砂成分多量、炭化物 ($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
 3. 灰白色土
白粗石 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 少量、炭化物 ($\phi 1\text{cm}\text{以下}$) 少量、黑色土塊 (灰褐色土) 含む。粘性弱くしまり弱い。
 4. 灰褐色土
白粗石 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 少量、炭化物 ($\phi 1\text{cm}\text{以下}$) 少量、黑色土塊 (灰褐色土) 含む。粘性弱くしまり弱い。
 5. 黑褐色土
砂成分多量、炭化物 ($\phi 1\text{cm}\text{以下}$) 少量含む。粘性弱くしまり弱い。
 6. 灰褐色土
砂 ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$) 少量、砂成分多量に含む。粘性あり。しまりあり。
 7. 灰褐色褐色土
白粗石 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 多量、礫 ($\phi 3\text{mm} \sim 1\text{cm}$) 多量、砂成分少含む。粘性弱くしまり弱い。
 8. 灰褐色土
礫 ($\phi 5 \text{mm} \sim 7\text{cm}$) 多量、砂成分多量、炭化物多量、赤色褐少量、
黒褐色の粘合土、土塊漂出。粘性弱くしまり弱い。
 9. 地灰褐色土
シルト土含む。粘性弱くしまりあり。
 10. 黑灰褐色土
砂成分少量含む。粘性弱くしまりあり。

II 徳丸高塚 II 遺跡



第15図 B区北側道出土遺物

表3 1・2号堀計測表

	走向	上端幅	下端幅	深さ	断面形	出土遺物	備考
1号堀	N26°W	6.94~7.34m	1.50~2.00m	1.05~1.65m	逆台形	羽口・火舍	
2号堀	N26°W	10.40~11.90m	5.40~6.00m	1.07~1.44m	逆台形	五輪塔火輪	埋没後再掘削有

第3項 弥生時代以前面

本遺構面からは、溝3条、土坑1基、ピット15基が検出された。B区北側道より検出された1号溝、2号溝は、堆積状況より調査区北側で分岐した可能性があり、ともに南流していたことが判明した。土坑1基、ピット15基の性格は不明である。

表4 遺物観察表

遺物	遺物番号	器種	計測値	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
1号溝	1	土師質火	-----	破片	刷毛部は半載竹脛状の工具で突起部に凹凸される。上位はハラ状工具による斜椅子、下位は菊花状スタンプを連続に施文される。	①細かな石英、長石、褐色鉱 ②にぶい赤褐色 ③未焼元	埋没土
	2	土師質羽口	外径:7.5 内径:2.5	基部1/2	径2.5cmの棒状工具に粘土を巻きつけ、それを引き抜いた痕跡が観察される。大形の羽口。	①角閃石、褐色鉱、褐色鉄 ②明赤灰色 ③酸化	埋没土
2号溝	1	五輪塔火輪	長さ:21.4 幅:21.0 厚さ:12.0 重さ:3.7kg	火輪部完存	火輪部のみの出土である。側面は棒状工具で面取りし、部分的にその跡跡が観察される。空・風輪部の接続に上部に深さ3cmの孔を穿ち、火輪部の四隅はわずかに反る。	④角閃石安山岩	埋没土

第2節 C区北側道

第1項 概要

本区は小字「高塚」に位置し、B区北側道の東隣にあたる。本区は東に隣接する徳丸仲田Ⅲ遺跡と同様、

低地上に立地する。

本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は畦畔2条、土坑1基、ピット5基、3面は溝1条、2面は確認面は存在していたものの遺構は確認されなかった。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

第2項 浅間B軽石下面

本文化層では、畦畔2条、土坑1基、ピット5基が検出された。畦畔は、南北(N10°E)に走る1号畦畔および東西(N90°E)に走る2号畦畔がほぼ直交し、南北方向畦畔の走向は、東隣の徳丸仲田Ⅲ遺跡A区北側道の畦畔5条・溝2条の走向(N9~16°W)に近く、徳丸仲田Ⅲ遺跡とほぼ同規格の条里水田が広がっていたものと推測される。しかし、畦畔残存部分より1区画面積の算出に至るまでの情報は得らなかった。また土坑1基、ピット5基についての性格は不明である。

第3項 浅間C軽石混土層下面

浅間C軽石混土層の堆積については、明瞭に確認されたものの同層直下における遺構は検出されなかった。

第4項 弥生時代以前面

本区より検出された1号溝は内径2.5mの弧状に巡る。性格について不明であるが、東隣する徳丸仲田Ⅲ遺跡A区北側道検出の不明遺構と同様、溜井などの機能を担う可能性が考えられる。

第5章まとめ

本遺跡からは、中世面、浅間B軽石下面、浅間C軽石混土層下面、弥生時代以前面の計4面の遺構確認面が検出された。中世面からは堀2条、土坑12基、溝3条、浅間B軽石下面からは畦畔2条、土坑1基、ピット5基、弥生時代以前面からは溝3条、土坑1基、ピット15基がそれぞれ検出されている。また、浅間C軽石混土層下面からは遺構の検出はみられなかった。

本遺跡では、中世館跡と環濠を巡らせた寺院が近接している特徴がみられ、また中世面の堀からは環濠屋敷の溝へと改修が指摘されるなどの成果があった。本遺跡中世面よりは、平行する同規格の堀が2条検出されており、これらは同時期の構築と推定され、中世館の二重堀であったと考えられる。堀の形状は浅く、防護としての機能は劣るものであるが、端気川等の地形や、生産域の掌握、さらに幹道の想定路等の諸条件を考慮した立地であると想定される。本遺跡の所在する徳丸町および付近の力丸町、房丸町(通称『三丸地区』)、西善町、鶴光路町付近に営まれた環濠屋敷は、力丸城や宿阿内城、新堀城、極楽寺や善光寺を中心にしており、その多くは室町時代以降の力丸氏の力丸城移住、和田氏の新堀城移住等の時期に環濠屋敷の前身が築造されたと考えられている。また、本遺跡のような屋敷と寺社を環濠で囲む配置は、県道前橋玉村線(本遺跡西方0.8km)沿線の極楽寺・善光寺付近の環濠屋敷、寺社配置との類似性がみられる。県道前橋玉村線【六供一龟里-鶴光路-新堀】は、鎌倉期以降の古道に沿っているといわれ、付近の微高地上には、源頼朝・義経などの伝説がみられる。中でも、極楽寺・善光寺は徳丸高堰Ⅱ遺跡に近く、建久年間に、源頼朝が母(伝承では『常盤御前』)。通説では熱川大宮司一族『山良御前』のために建立・再興した伝説が存在し、極楽寺には『常盤御前』墓所が伝えられている。建久年間後には、山良御前ゆかりの人物が上野介・上野国守護に任命されている点は、この地域の開発に重要な意味を持つもので、特に寺社建立には、付近の整備、経済基盤の確保が伴ったと考えられ、隣接する玉村御厨(現在の佐波郡玉村町付近)の成立(長寛年間)後の建久年間には既に現在の鶴光路・徳丸付近の再整備がなされたものと想像される。今回の調査は部分的なものであったが、これら文献史料を断片的であるが、補足する資料が得られている。

徳丸高堀Ⅱ遺跡

図版1



1 B区北側道全景



2 同 中世面1号堀



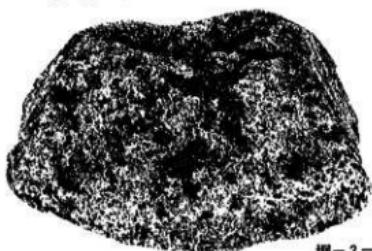
3 同 中世面2号堀



堀-1-1



堀-1-2



堀-2-1

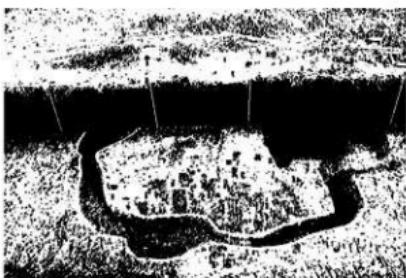
4 出土遺物

徳丸高塚Ⅱ遺跡

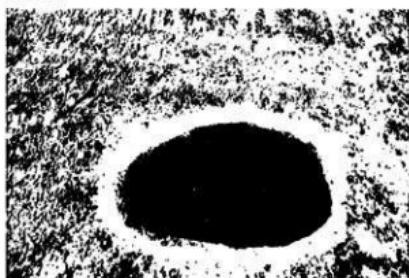
図版
2



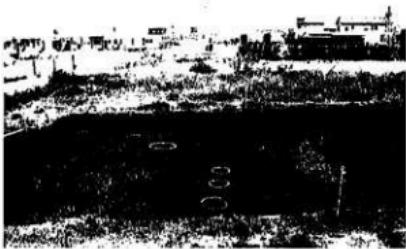
1 C区北側道全景



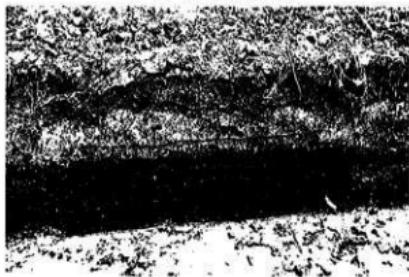
2 同 弥生時代以前面1号溝



3 同 As-B下面土坑



4 同 As-B下面ピット群

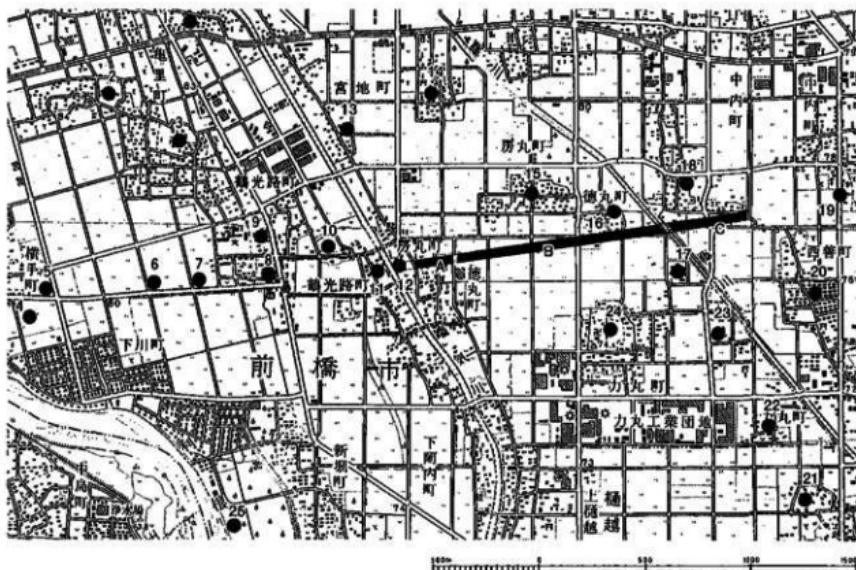


5 基本堆積土層

III 德丸仲田Ⅲ遺跡

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

徳丸仲田Ⅲ遺跡の所在する徳丸町は前橋市の南部にあたり、JR前橋駅の南東約6.5kmに位置している。遺跡地の北1.0kmに県道高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西吾力九線が調査区を南北に縱断する。また、西1.1kmに鎌倉期以降の古道に沿っているといわれる県道前橋玉村線が南北に走る。本遺跡の所在する徳丸町および周辺の下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・西善町・中内町は、低地上に水田・畑が広がり、微高地には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の群馬郡徳丸村地味の項には「黒埴ニシテ緋色ヲ蒂ヒ膏脂アリ水利便ニシテ諸種ニ適ス但東西河畔ノ地砂壤ニシテ桑柘ニ宜シ」と記され、旧状を伝えている。

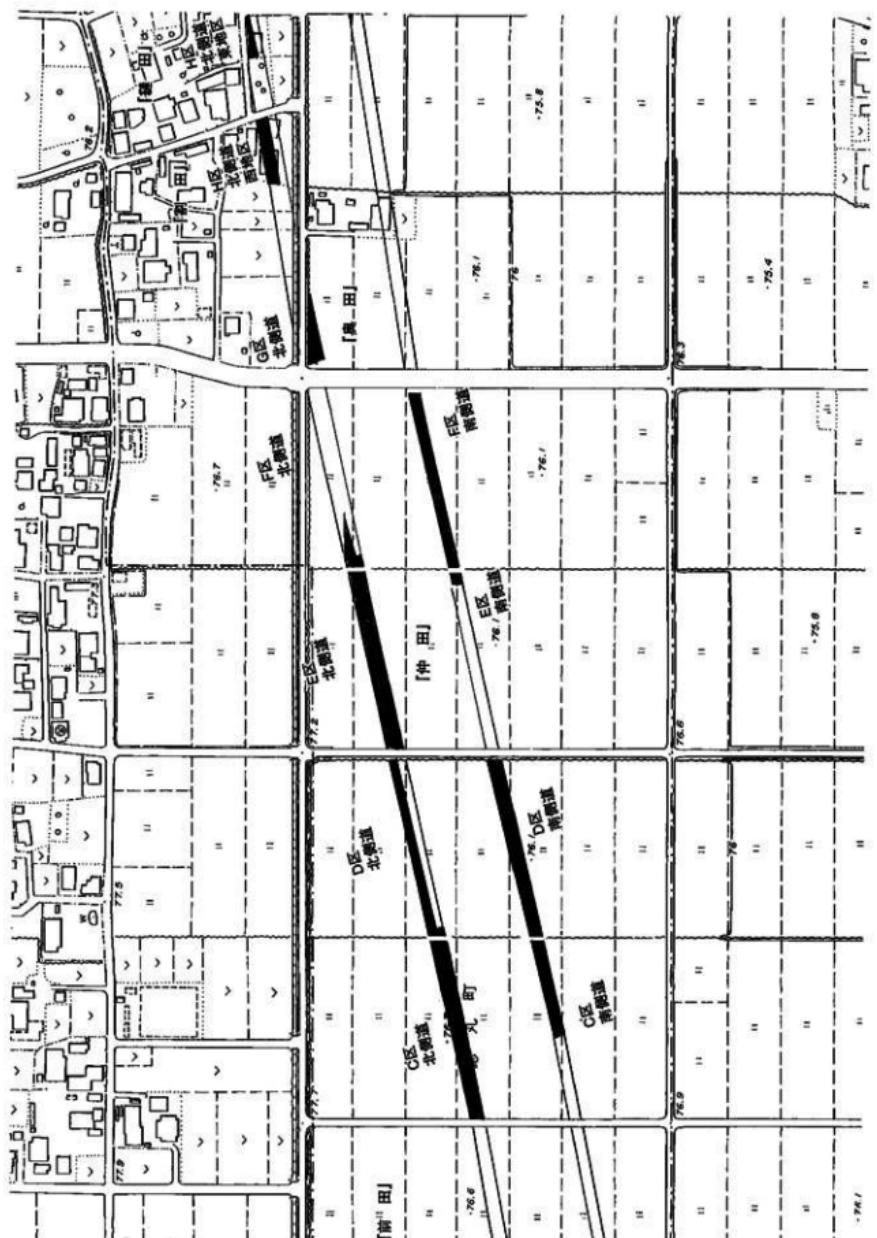


(国土地理院2万5千分の1「前橋」「大胡」「高崎」「伊勢崎」)

A 徳丸高塙遺跡 B 徳丸仲田遺跡 C 西吾尺司遺跡

1. 宿阿内城（龟里阿内城）跡 2. 龟里（天神）矢島百石崖敷跡 3. 成菩提山光明院極楽寺 4. 井戸南遺跡 5. 横手宮川遺跡 6. 横手湯川遺跡 7. 鶴光路練引遺跡 8. 鶴光路（村中）環塁遺構群 9. 嵩上山善光寺 10. 西田遺跡 11. 鶴光路板橋遺跡 12. 宝乘寺跡 13. 宮地中田遺跡 14. 東宮地環塁遺構群 15. 房丸東環塁遺構群 16. 徳丸東（綾川）環塁遺構群 17. 徳丸東（後）環塁遺構群 18. 旧西善環塁遺構群（須田屋敷） 19. 中内村前遺跡 20. 横堀環塁遺構群 21. 中越環塁遺構群 22. 東力丸（宮川）環塁遺構群 23. 東力丸（綾川）環塁遺構群 24. 力丸城跡・降龍山善昌寺 25. 新堀城跡

第16図 周辺の遺跡



第17図 調査区位置図 (1 : 3,000)

III 徳丸仲田Ⅲ遺跡

本遺跡の周辺を概観すると、西3.0kmに利根川が南流し、周辺に端気川・藤川などの小河川が南東へ流下する。現在では河川改良事業・圃場整備事業により旧地形の改良が行われ、一面に重畠たる穀倉地帯が広がりをみせ、Ⅲ地形を読み取ることは難しい。これまで実施された調査からは、低地上に浅間山噴火の影響のみられる古墳時代前期および平安時代後期の水田が營まれており、現在に至るまで生産行為がなされたことが明らかにされている。さらに端気川および藤川沿いの微高地上では同時期の集落、中世館跡および環濠居敷跡が展開する。特に本遺跡の位置する三丸地区（徳丸・力丸・房丸地区的通称）や鶴光路、西善地域周辺は、中世以降の城館跡（宿阿内城・力丸城・新堀城など）、環濠居敷跡および寺社（成菩提山光明院極楽寺・雲上山善光寺・降龍山普呂寺など）が数多く確認される地域である。三丸地区（徳丸・力丸・房丸）は、すべて地区名に「丸」が使用されている。この「丸」は中世館等を示すもの、あるいは莊園制の単位などの諸説があり、詳細は不明であるものの、中世期において一つのまとまりを示すものであると推測される。

本遺跡は、西側より前橋市徳丸町小字「前田」（A区・C区）、「仲田」（D区・E区・F区）、「奥田」（G区）、「削田」（H区西地区）、「縫田」（H区東地区）に位置する。

第2章 調査の経過

5月 中旬 平成10年度徳丸仲田Ⅲ遺跡の発掘調査を開始する。

E区北側道、As-B下面調査を行う。

下旬 E区・F区北側道、As-B下面・As-C混土層下面調査を行う。

6月 上旬 E区・F区北側道、As-C混土層下面調査を行う。

中旬 E区・F区北側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。

下旬 E区・F区北側道冠水。E区南側道、As-B下面調査を行う。

F区南側道、As-C混土層下面調査を行う。

7月 上旬 E区南側道、As-B下面調査を行う。

F区南側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。

中旬 D区・G区北側道、As-B下面調査を行う。D区南側道西側、As-B下面調査を行う。

E区南側道、As-C混土層下面調査を行う。F区南側道、弥生時代以前面調査を行う。

下旬 H区北側道東地区からC区北側道へプレハブを移設する。

D区・G区・H区西地区北側道およびC区・D区南側道西側、As-B下面調査を行う。

E区南側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。

F区南側道、弥生時代以前面調査を行う。H区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。

E区・F区北側道およびF区南側道の発掘調査を終了する。

8月 上旬 D区・G区・H区西地区北側道およびC区・D区南側道西側、As-B下面調査を行う。

D区・G区・H区西地区北側道およびC区・D区南側道西側、As-C混土層下面調査を行う。

E区南側道、弥生時代以前面調査を行う。

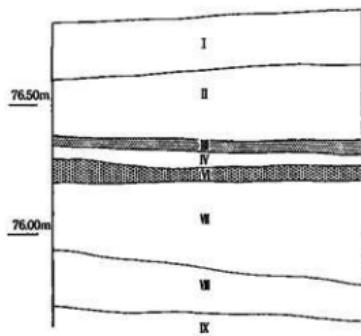
H区北側道東地区、中世館跡検出面・旧石器時代調査を行う。E区南側道の発掘調査を終了する。

中旬 C区南側道、As-C混土層下面調査を行う。

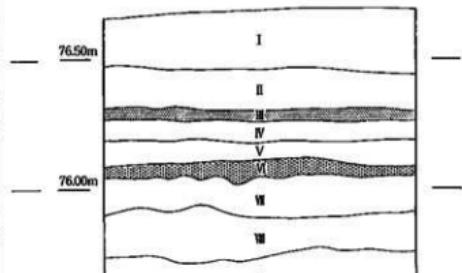
D区・G区北側道およびD区南側道西側、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。

下旬 C区南側道、D区北側道、G区北側道およびC区南側道西側、弥生時代以前面調査を行う。

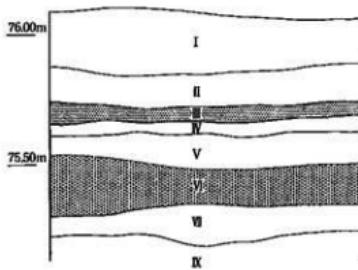
H区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。台風4号により調査区が冠水する。



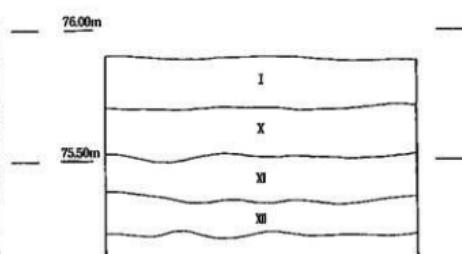
A 区北侧道北壁



D 区南侧道北壁



H 区北侧道西地区北壁



H 区北侧道东地区北壁

第18図 標準堆積土層

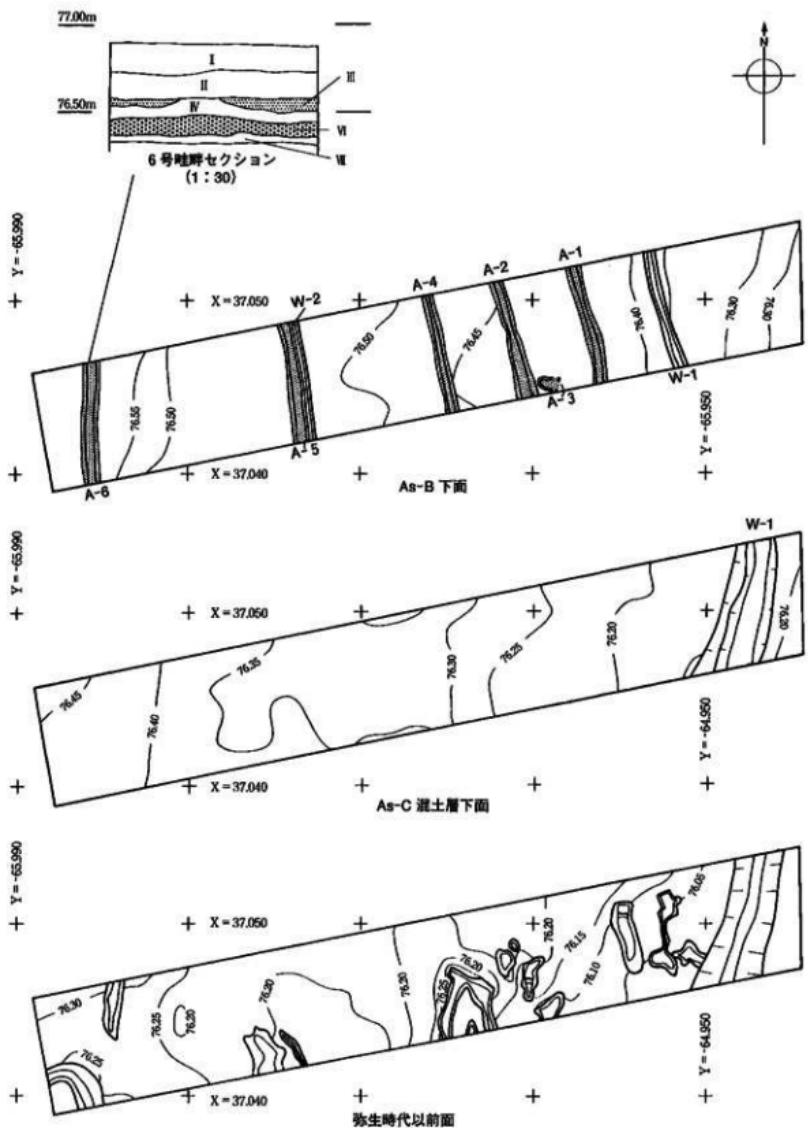


- 9月 上旬 C区北側道、As-B下面調査を行う。G区北側道、弥生時代以前面調査を行う。
 II区北側道西地区 As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 II区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。
 D区・G区北側道およびC区・D区南側道西側の発掘調査を終了する。
- 中旬 C区北側道、As-B下面・As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 II区北側道西地区・東地区的発掘調査を終了する。
 台風5号が群馬県を直撃し、調査区が冠水する。
- 下旬 A区北側道、As-B下面・As-C混土層下面調査を行う。
 C区北側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
- 10月 上旬 A区北側道、As-B下面・As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 中旬 A区北側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 C区北側道、As-B下面調査を行う。A区北側道の発掘調査を終了する。
 C区北側道上のプレハブ撤去する。
- 下旬 C区北側道、As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 C区北側道の発掘調査を終了する。
- 11月 上旬 調査を一時中断する。
- 12月 上旬 D区南側道東側発掘調査再開、As-B下面・As-C混土層下面調査を行う。
 中旬 D区南側道東側 As-B下面・As-C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
 D区南側道東側発掘調査終了をもって平成10年度徳九仲田Ⅲ遺跡の発掘調査を終了する。

第3章 標準堆積土層

本遺跡調査によって検出された文化層は、中世館跡検出面の第1面、浅間B軽石下面の第2面、FA堆積面の第3面、浅間C軽石混土層下面の第4面、弥生時代以前面の第5面に分けられる。本遺跡で確認された鍵層は浅間B軽石層、FA堆積面、浅間C軽石混土層の3層であった。以下はA区北側道、D区南側道、II区北側道西地区、II区北側道東地区で観察したもので、本遺跡の層序を示すものである。

- I 暗褐色土層 現耕作土。しまり、粘性ともに弱い。
- II 黒褐色土層 旧耕作土。しまりはあるが、粘性は弱い。
- III As-B堆積層 天仁元年(1108年)降下浅間B軽石堆積層。(下面が第2面浅間B軽石下面)
- IV 黒色土層 しまり、粘性ともにあり。
- V 灰褐色土層 しまり、粘性ともにあり。白色軽石(浅間C軽石)を少量含む。
(下面が第3面 浅間C軽石混土層下面)
- VI 暗褐色土層 しまり、粘性ともにあり。白色軽石(浅間C軽石)多量混入。
- VII 黑灰色土層 しまり、粘性ともにあり。
- VIII 深灰色土層 しまり、粘性ともにあり。(下面が第4面 弥生時代以前面)
- IX 灰白色土層 しまり、粘性ともにあり。シルト質。
- X 黄灰色土層 しまりはあるが粘性弱。(下面が第1面 中世館跡検出面)
- XI 暗褐色土層 しまりはあるが粘性弱。砂層質。
- XII 明る褐色土層 しまりはあるが粘性弱。白色砂を含む。



第19図 A区北側道全体図 (1:300)

第4章 遺構と遺物

第1節 A区北側道

第1項 概要

本区は小字「前田」に位置する。徳丸仲田Ⅲ遺跡の最西部にあたり、徳丸高塚Ⅱ遺跡と隣接する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝2条、畦畔6条、2面は溝1条、3面は溝1条、不明遺構14基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

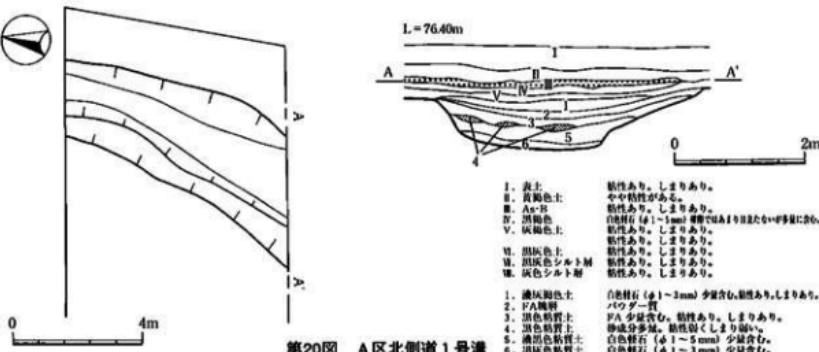
第2項 浅間B軽石下面

本区より、溝2条（南北方向）、畦畔6条が検出された。畦畔は南北方向に5条、東西方向に1条検出され、南北方向の畦畔・溝のうち、畦畔4条、溝2条はN9°～16°Wを指し示すとともに、約4.3m間隔に畦畔・溝が配置されていた。南北方向の畦畔の残存は比較的良好ではあったが、東西方向の残存は不良であった。また、南北方向の畦畔・溝の走向は、西隣の徳丸高塚Ⅱ遺跡1号畦畔（N10°E）とは異なる。以上のことを模式図化すると以下の通りである。

A区北側道 畦畔配置 模式図	5 号 号	2 号 号	消 滅 カ	8.6m	4 号 号	2 号 号	1 号 号	1 号 号	備考 畦畔中央部で計測。 畦畔下端幅平均50～60cm 5号畦畔、4号畦間に消失 畦畔ありカ。
走向(N°W)	10	9			13	16	10	15	(N9°～16°W) 範囲

第3項 浅間C軽石混土層下面

本区より溝1条が検出された。1号溝は、堆積土中層にFA泥流層の堆積がみられ、FA泥流以前には既に存在し、FA泥流堆積以降も、浅いながらも溝が存続し、その後、浅間B軽石降下以前には埋没していたことが土層断面より判明した。



第20図 A区北側道1号溝

第4項 弥生時代以前面

本区より不明遺構14基が検出されている。不明遺構の形状は不整形で黒色粘質土の厚い堆積が確認されることより、本遺構の多くは粘土成分の長時間沈澱要素が想像され、溜井としての役割を帯びていた可能性が考えられる。本遺構は、同確認面で検出されたD区南側道土坑41基および徳丸高塙II遺跡C区北側道1号溝等の関連性が指摘される。

第2節 C区北側道

第1項 概要

本区は小字「前田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝9条、畦畔9条、水田遺構、土坑1基、ピット11基、2面は土坑1基、3面は溝2条、土坑1基が検出されている。

第2項 浅間B軽石下面

本区より検出された1・4・9号畦畔、3～8号溝の走向(N0°～7°W)に同一性がみられた。また、1号畦畔には、平行する2号畦畔・3号畦畔(N75°W)が交わる。2・3号畦畔は、4号畦畔と交わる想定地まで検出されなかったものの、これらの畦畔は同時期と推察され、閉まれた水田面は約3m(南北距離)×7m(東西距離)を計測し、平面形は平行四辺形を呈している。また、5・6号畦畔との境目には水口が検出されている。調査区西側では平面形「くの字」を描くような水田遺構が検出された。本遺構の畦畔は調査区北西隅より3.5m進み(N52°W)、110°折れ、9.0m進み(N58°E)、108°折れ(N50°W)10.0m進み、水田の平面形状は不明である。また、前述の1～4号畦畔とは異なる性格を持った畦畔と考えられる。

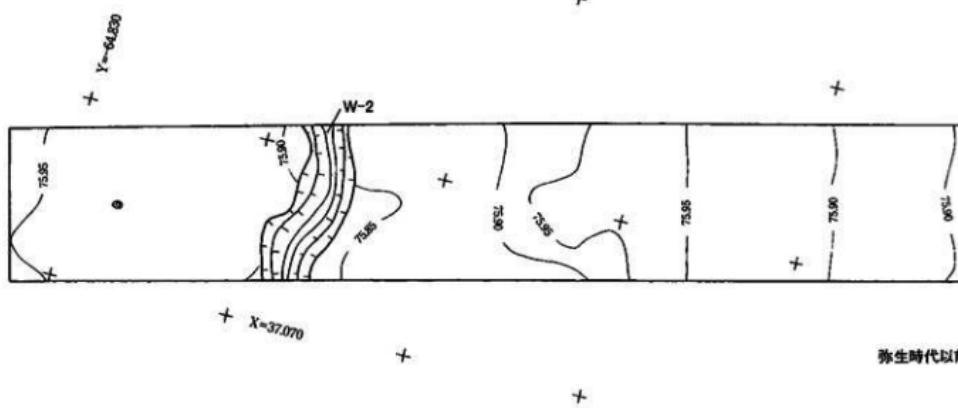
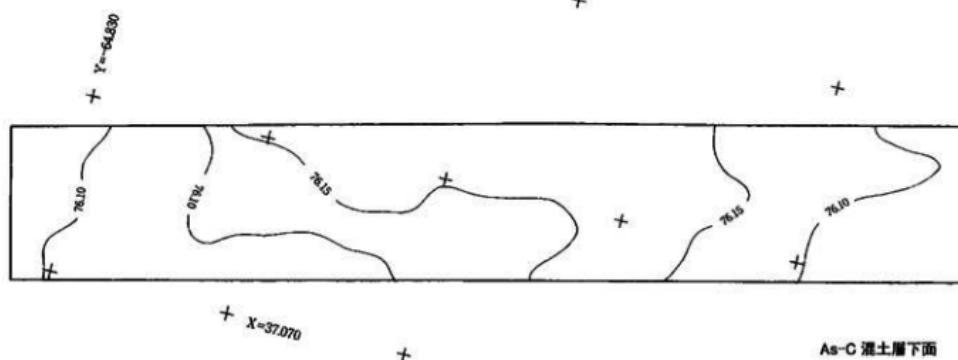
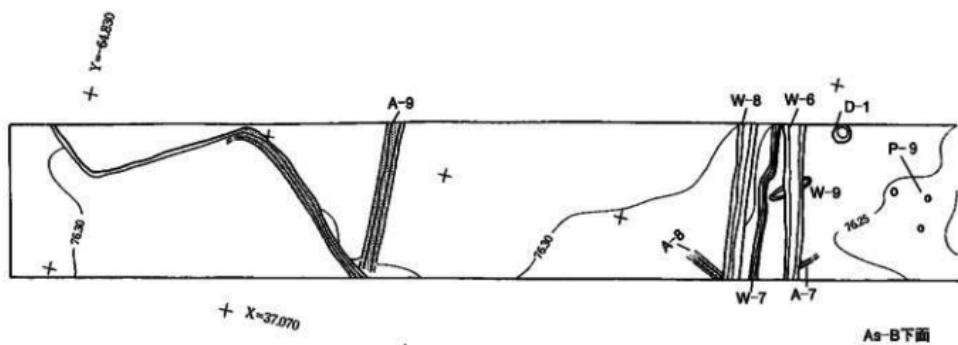
第3節 C区南側道

第1項 概要

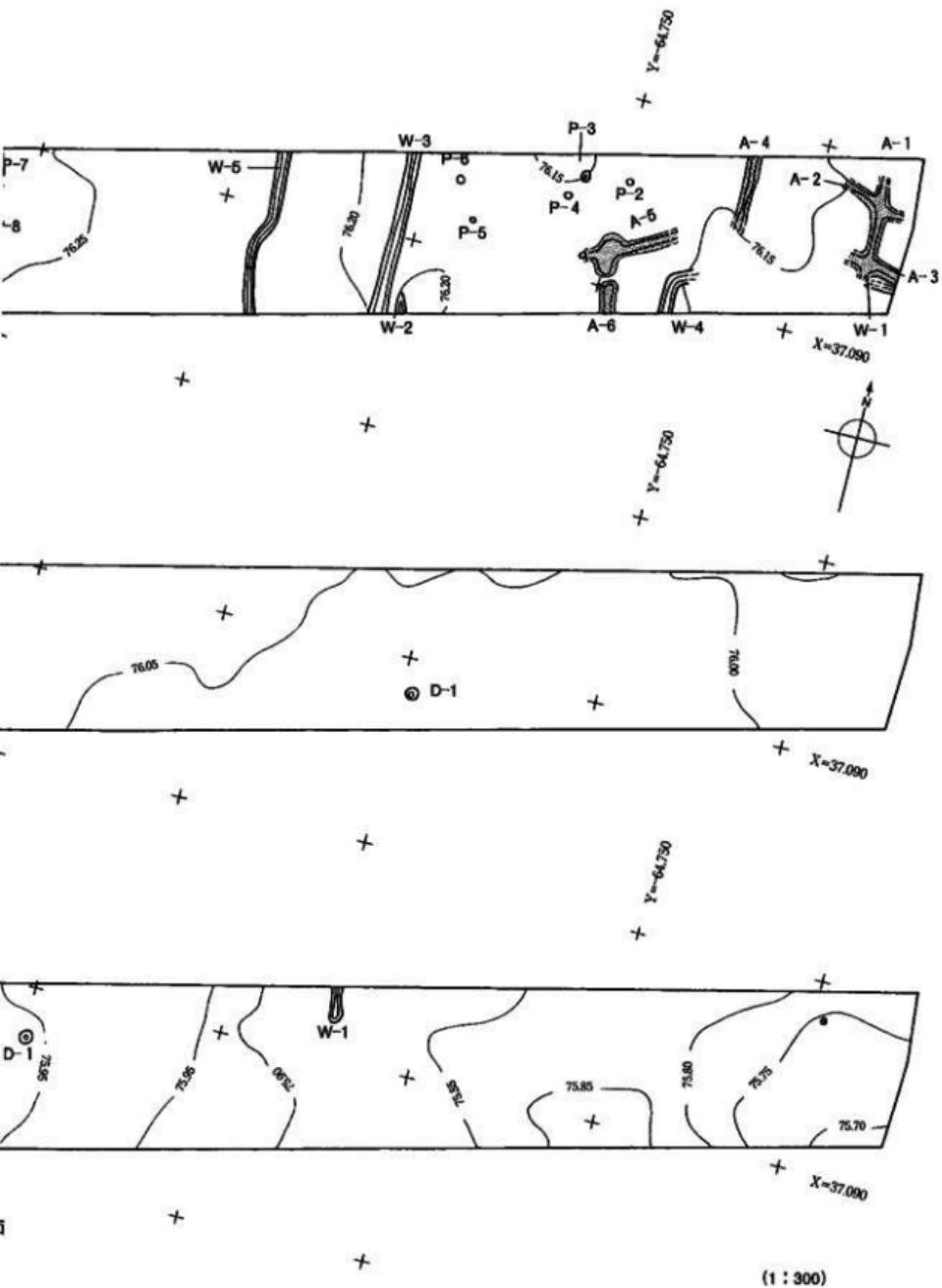
本区は小字「前田」に位置し、本遺跡平成10年度南側道調査区最西端にあたる。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝2条、畦畔3条、ピット17基、2面は溝2条、ピット4基、3面は土坑1基が検出されている。

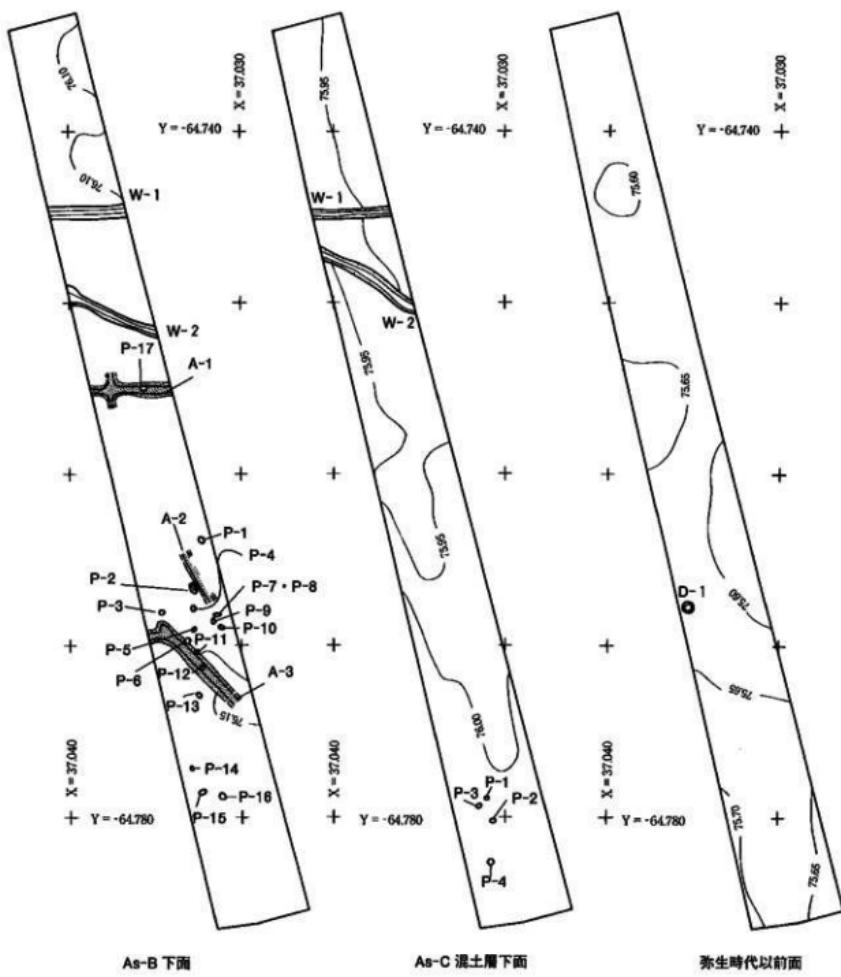
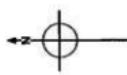
第2項 浅間B軽石下面

本区より検出された南北に走る1号溝(N0°E)と1号畦畔(N0°E)の走向は、ほぼ同一であった。一方で、2・3号畦畔の残存は良好であったものの、走向に一定基準がみられなかつことにより、畦畔の時期の違い、あるいは水田耕作面の平面形状が不定形であった可能性が指摘される。



第21図 C区北側道全





(1 : 300)

第22図 C区南側道全体図

第4節 D区北側道

第1項 概要

本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は4面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面はFA堆積面、第3面は浅間C軽石混土層下面、第4面は弥生時代以前面である。第1面は畦畔6条、第2面はFAに被覆された帶状遺構（畦畔カ）、第3面は溝1条、畦畔2条、ピット2基、第4面は溝4条が検出されている。なお第2面は第3面調査を行った際にFA堆積が一部残存（東西18m×南北3mの範囲）していた範囲である。第2面遺構平面図（第23図中段）掲載にあたり、確認面を一にする第3面との分化をせずに、第3面にFAの堆積分布をスクリーントーンをもって示した。

第2項 浅間B軽石下面

本面は耕地整理時等についたと思われるキャタピラの痕跡が一面にみられ、遺構の遺存状態は不良と予想されたものの、南北方向に走る畦畔6条が検出された。畦畔走向は、1号畦畔（N8°W）、2号畦畔（N8°W）、3号畦畔（N12°W）、4号畦畔（N14°W）、5号畦畔（N0°W）、6号畦畔（N0°W）を示しており、畦畔方向より1～4号畦畔（N8°～14°W）、5・6号畦畔（N0°W）の2種に大別されると考えられる。また、畦畔間距離は、〈1号畦畔〉—5.0m—〈2号畦畔〉—15.0m—〈3号畦畔〉—10.0m—〈4号畦畔〉—17.0m—〈5号畦畔〉—16.0m—〈6号畦畔〉を計測する。しかし、東西方向に走る畦畔は確認されておらず、1区画面積の算出に至るまでの情報は得られなかった。

第3項 FA堆積面

本確認面は第3面調査を行った際に、X=37,110、Y=-64,690付近の東西18m×南北3mの範囲（スクリーントーン範囲）においてFAの堆積がみられた。また中央部にはFA堆積がみられない部分が南北（N10°W）に走ることが確認され、該期の畦畔であった可能性が考えられる。

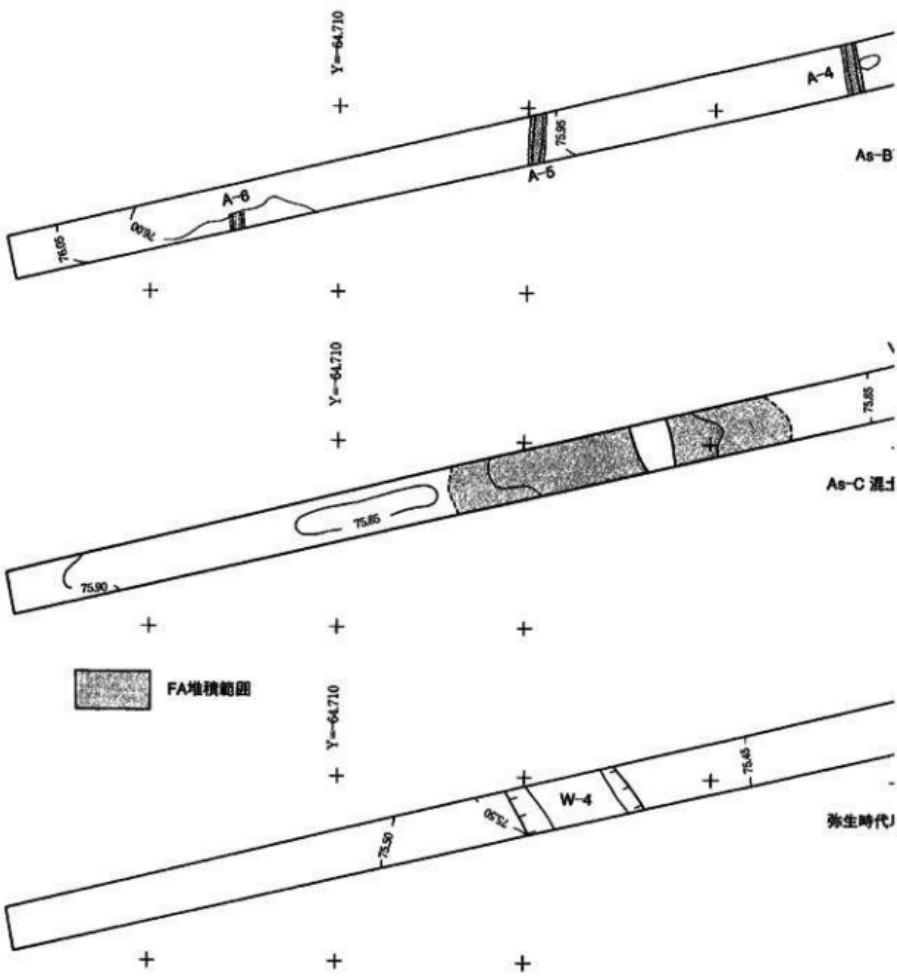
第5節 D区南側道

第1項 概要

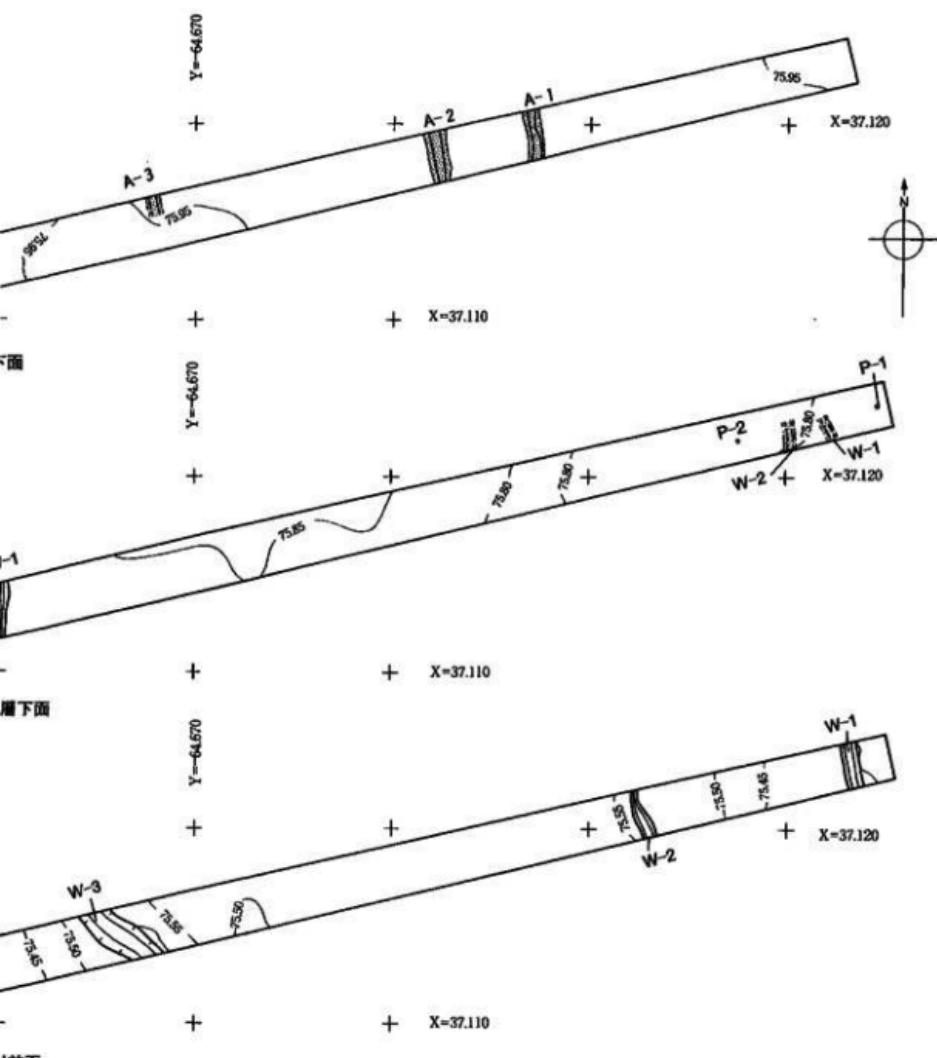
本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝2条、畦畔4条、2面は溝3条、3面は溝4条、土坑41基が検出されている。

第2項 浅間B軽石下面

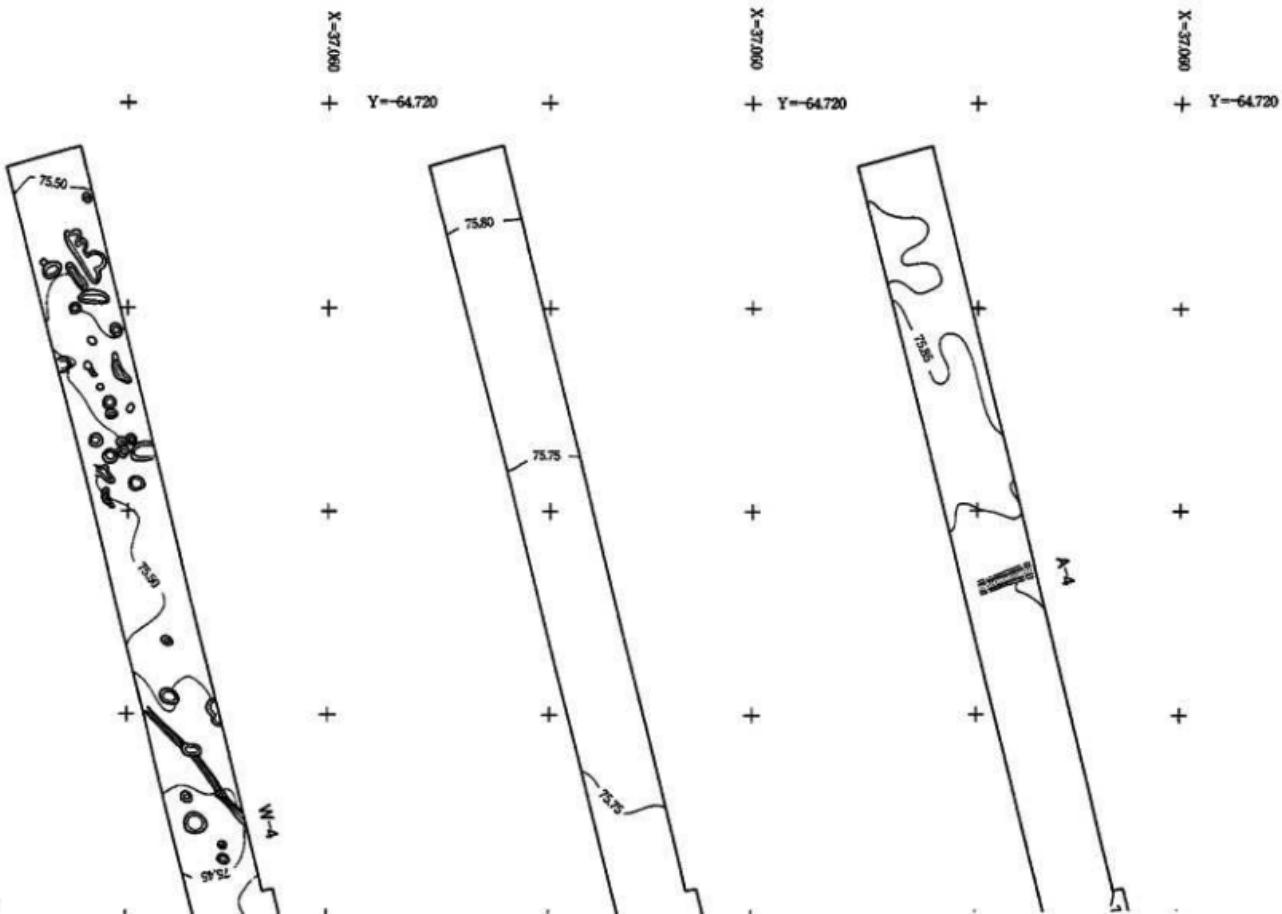
本区より、溝2条、畦畔4条が検出され、1号畦畔と2号畦畔はほぼ直交、2号畦畔・3号畦畔は同走向（N90°W）を示している。

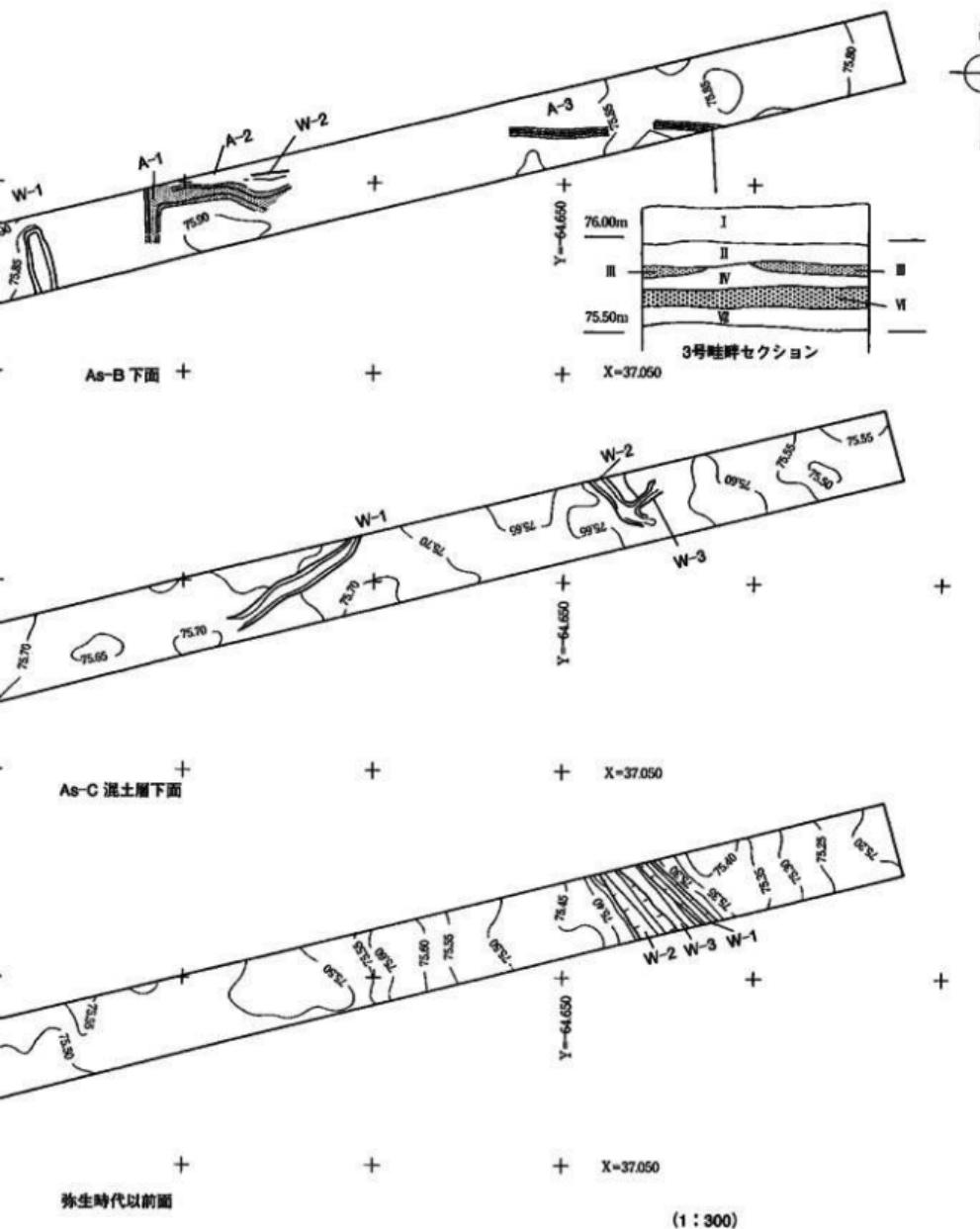


第23図 D区北側道

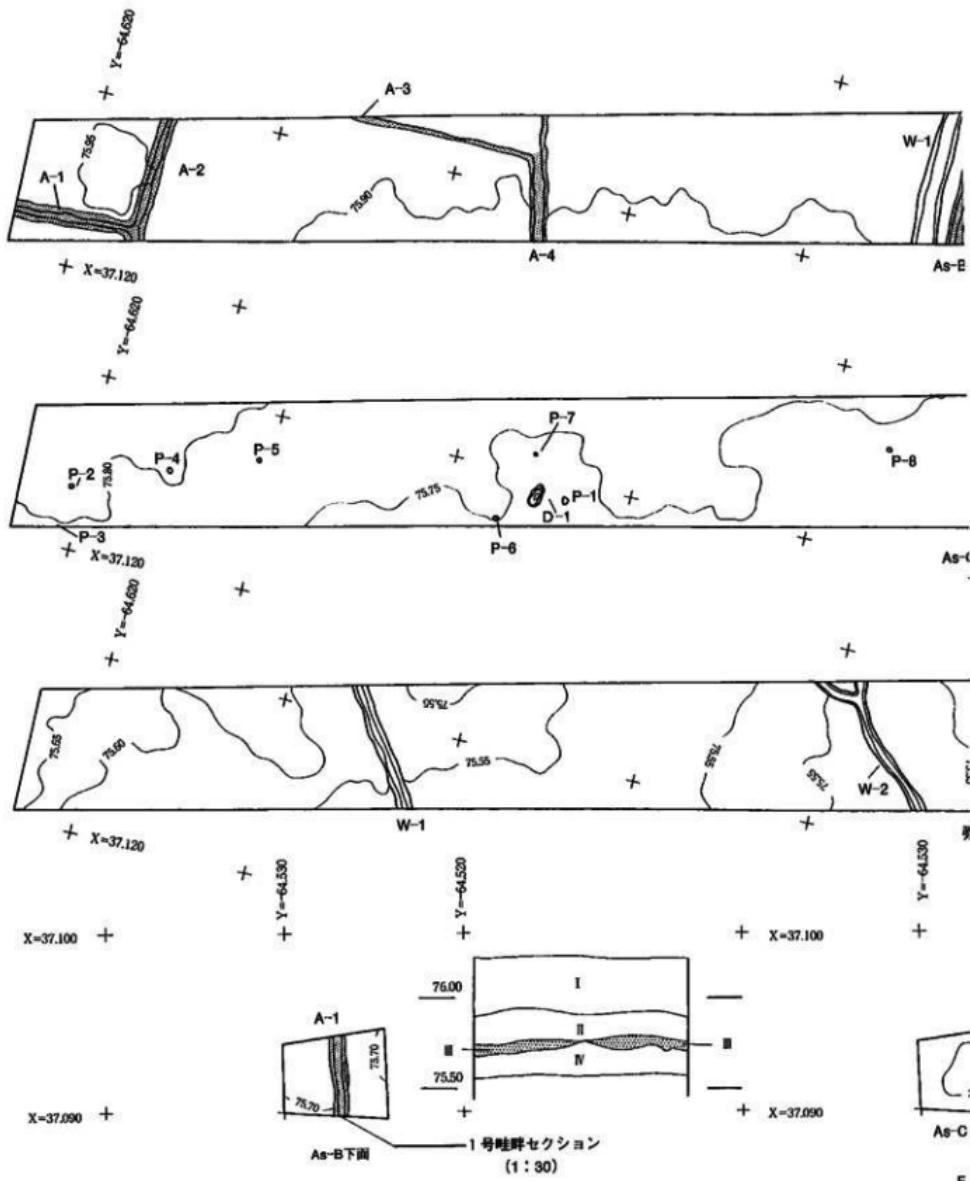


(1 : 300)

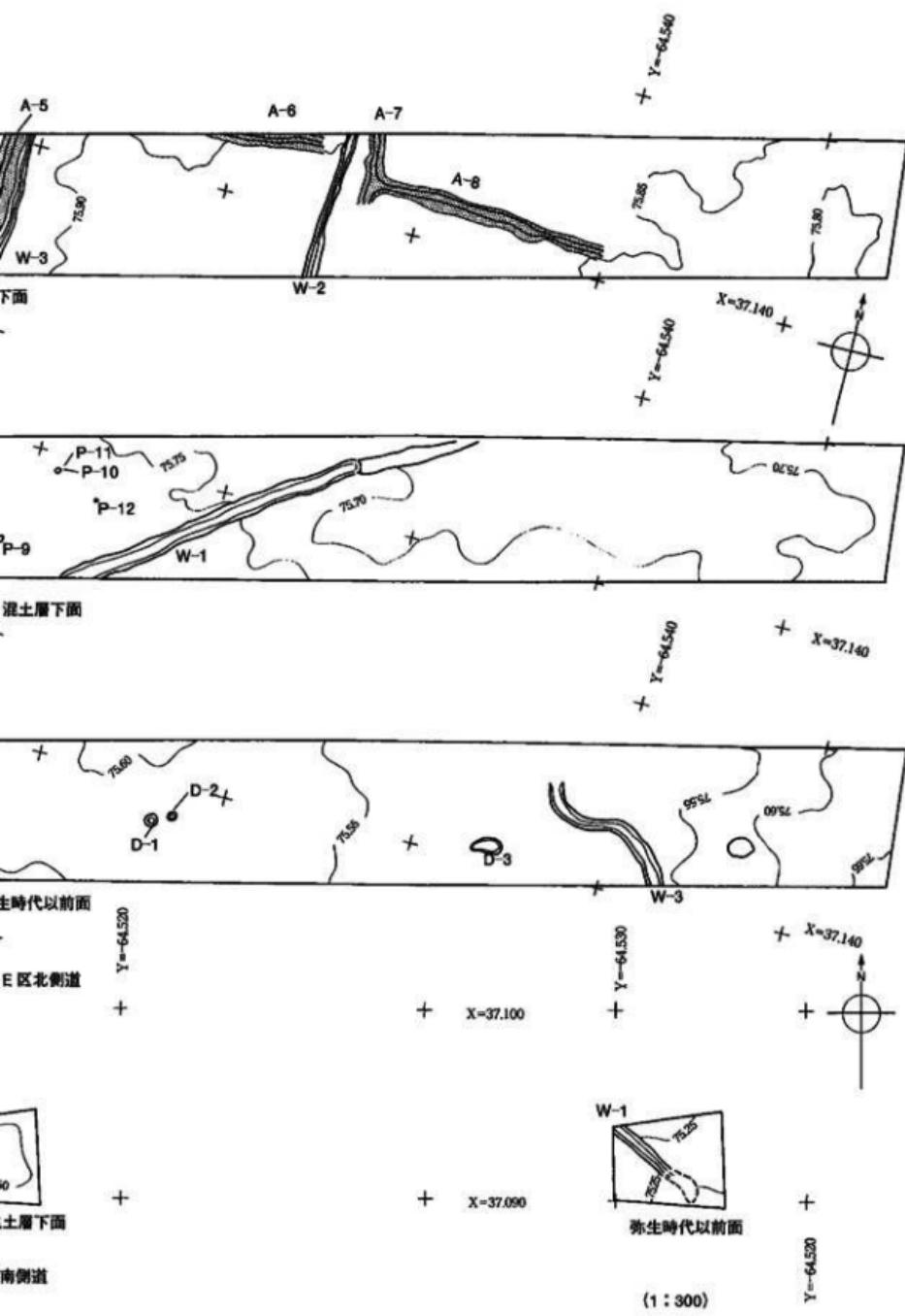


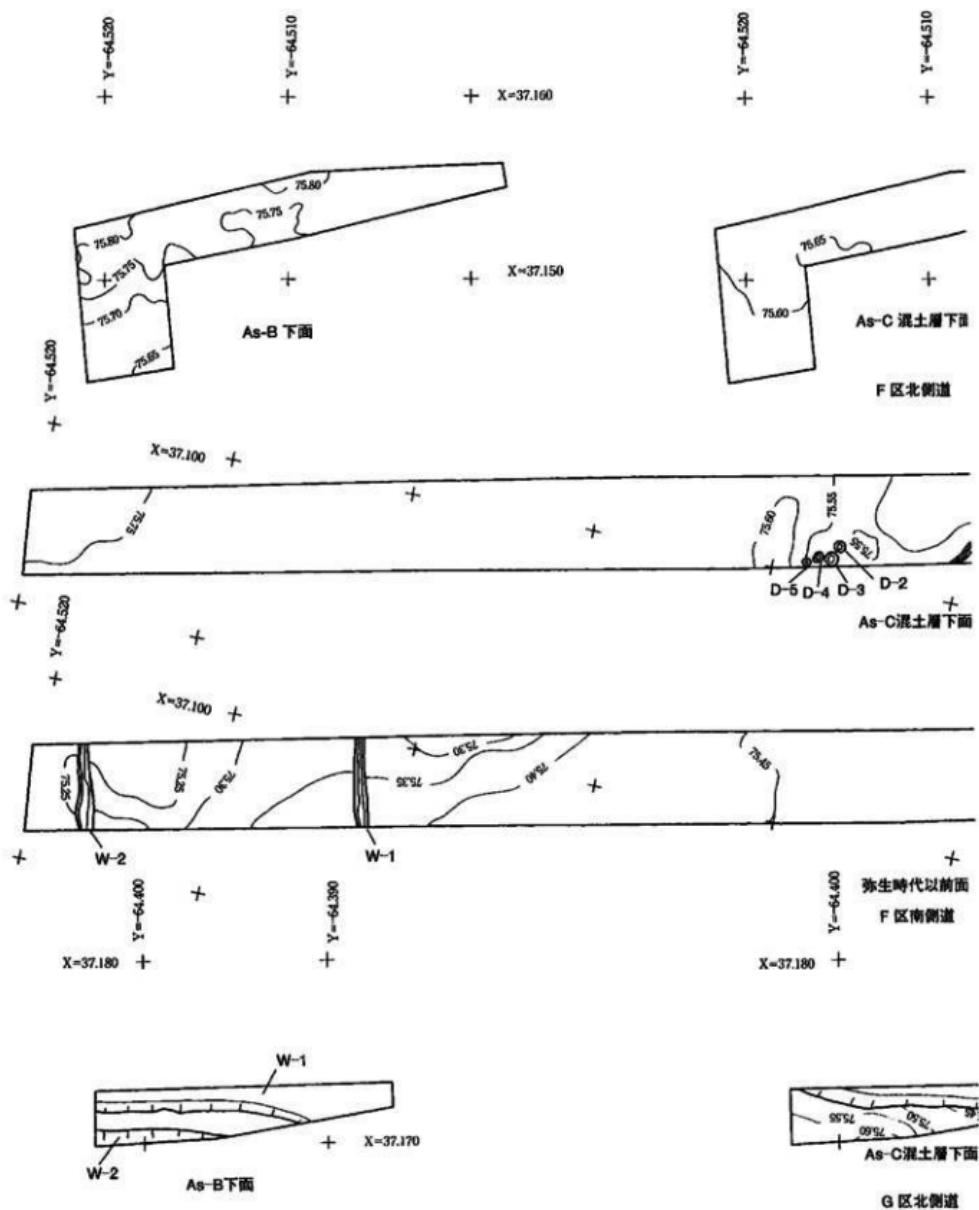


44図 D区南側道全体図 折図7

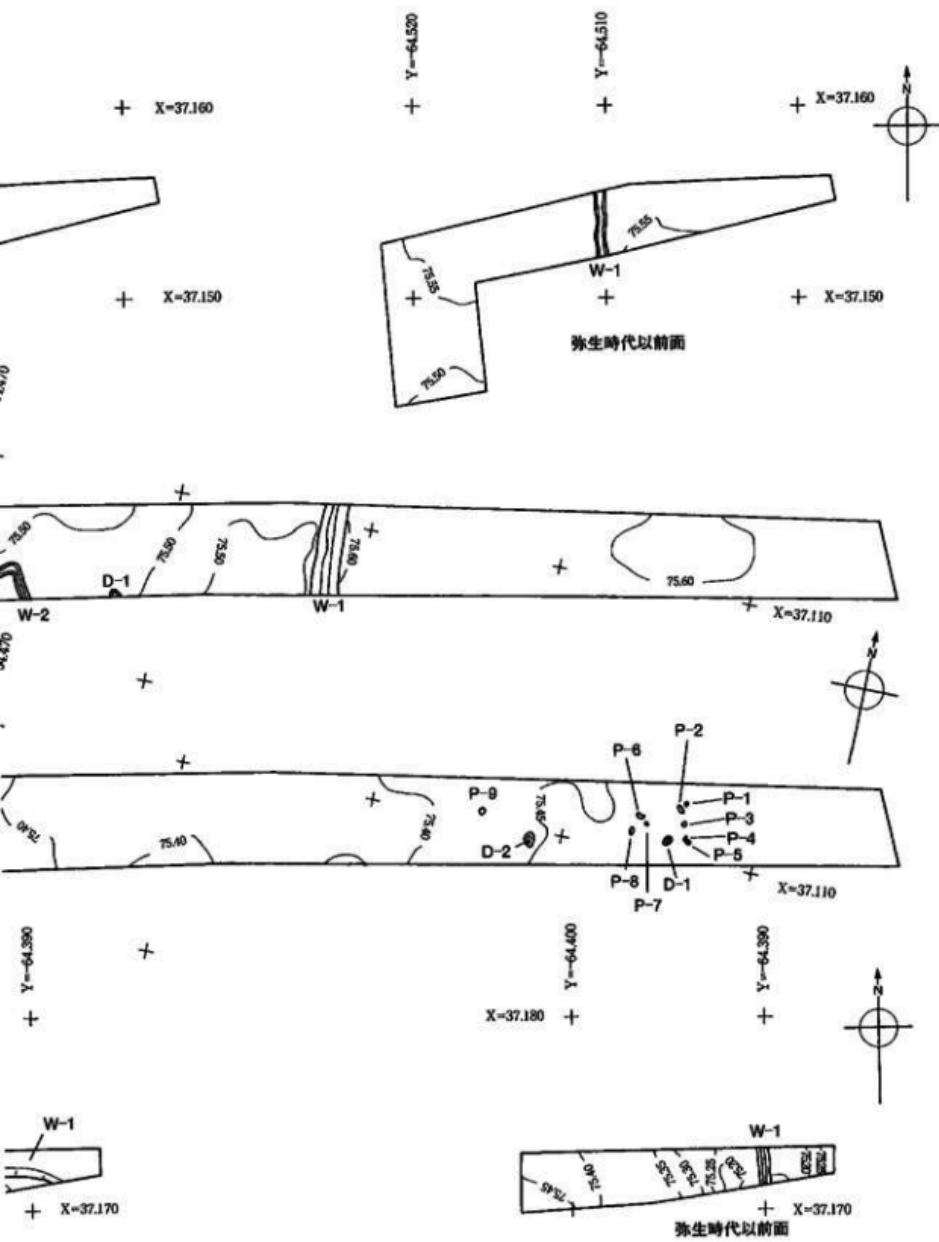


第25図 E区北側道・E区南側





第26図 F区北側道・F区南側道・G区



(1 : 300)

第3項 浅間C軽石混土層下面

本区より検出された1号溝、3号溝の(N51°E)走向は同一である。

第4項 弥生時代以前面

本区より、溝4条、土坑41基が検出された。1号溝、2号溝、3号溝は、ほぼ同位置より検出され、土層断面より、3号溝の旧流路埋没後に1号溝、2号溝が平行に南流していたことが確認された。土坑41基のうち大部分の形状は不整形である。土坑の多くは他の土坑と結合し、本遺跡A区北側道にみられるような不明遺構の前段階を形成した可能性が考えられる。いずれの遺構からも出土遺物はなく、遺構の構築された時期については不明である。

第6節 E区北側道**第1項 概要**

本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝3条、畦畔8条、2面は溝1条、土坑1基、ピット10基、3面は溝3条、土坑3基が検出されている。

第2項 浅間B軽石下面

本区より、溝3条、畦畔8条が検出された。南北方向の畦畔、溝(西より2号畦畔、1号溝、5号畦畔、3号溝、2号溝)は、同走向(N2°E)であった。上部より掘り込まれている2号溝は、中世の所産である瀬戸香炉(15世紀代)が出土した。胎土より瀬戸焼であることが判明し、内部は無釉であった。

第3項 浅間C軽石混土層下面

本区1号土坑より貝岩製の石器(縄文時代)が出土したが、おそらくは後世の流入によるものと考えられる。

第7節 E区南側道**第1項 概要**

本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は畦畔1条、3面は溝1条が検出されている。2面は確認面は存在したものの遺構検出はされなかった。

第8節 F区北側道**第1項 概要**

本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。本地区は耕地整理の影響を受けており、第1面、第2面は部分的な残存であった。そのため、遺構が明瞭に確認されたのは第3面のみであった。同文化層では溝1条が検出されている。

第9節 F区南側道

第1項 概要

本区は小字「仲田」に位置する。本調査区において確認された文化層は2面である。第1面は浅間C軽石混土層下面、第2面は弥生時代以前面である。本地区は耕地整理の影響を受けており、浅間B軽石下面は確認されず、第1面も部分的な残存であった。そのため、遺構が明瞭に確認されたのは第2面のみであった。1面は溝2条、土坑5基、2面は溝2条、土坑2基、ピット9基が検出されている。

第10節 G区北側道

第1項 概要

本区は小字「奥田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝2条、2面は溝1条、3面は溝1条が検出されている。しかし本地区は現代の搅乱を多く受けており、良好な四方壁面の土層観察は不可能であり、1面、2面、3面の残存は部分的であり、著しく不良であった。浅間B軽石下面1号溝、浅間C軽石混土層下面1号溝は、昭和40年代まで存在していた通称「あえぼり」と位置が重なるため、遺構確認面とは時期が異なる可能性が高いと思われる。「あえぼり」と考えられる溝からは、壙の用途として使用されたと思われる杭が出土した。

第11節 H区北側道西地区

第1項 概要

本区は小字「割田」に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は畦畔2条、竪穴状遺構1基、2面は畦畔1条、第3面は土坑1基が検出されている。本地区は、旧宅地であったため、建築基礎等の搅乱を受けており、搅乱の受けていない部分のみ、遺構確認を行うことができた。

第2項 浅間B軽石下面

本区より検出された1号竪穴状遺構から出土した遺物は、すべて破片であった。体部中位までヘラ削りが施されている7～8世紀の非ロクロ坏、底部が回転糸切りを施す須恵器坏（9世紀以降の所産）等が出土している。

第12節 H区北側道東地区

第1項 概要

本区は小字「綾田」に位置し、平成10年度徳丸仲田Ⅲ遺跡発掘調査の最東端にあたる。本区は微高地に立地し、低地上に立地する本遺跡A区北側道-H区北側道西地区とは異なった土層堆積を示している。本調査区において確認された文化層は中世館跡検出面の1面である。溝4条、ピット23基が検出されている。本地区西側は旧宅地であったため、建築基礎等の搅乱を受けており、搅乱の受けていない部分のみ、遺構確認を行うことができた。

本区は徳丸東環濠遺構群に属しており、付近の力丸城跡、房丸東環濠遺構群、東力丸環濠遺構群、旧西善

環濠遺構群等との関連性が注目される。

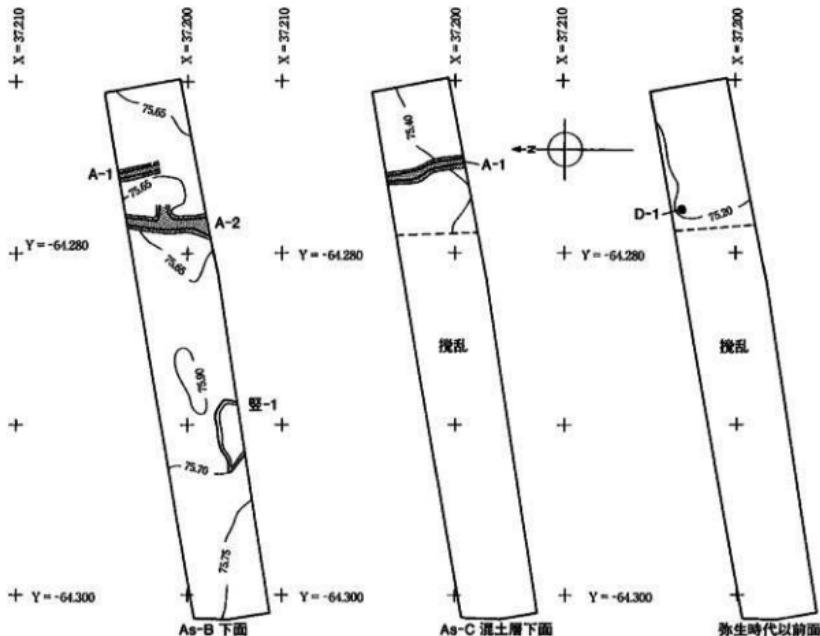
第2項 中世館跡検出面

本区より、溝4条、ピット23基が検出された。本区は微高地上に立地し、中世館跡の堀および館内部にあたり、徳丸東環濠遺構群の一部を調査した。本区西端より西端堀（4号溝）、南隣接地にあたる本線部分の環濠南端堀、東隣接地にあたる平成9年度徳丸仲田Ⅱ遺跡の東端堀が検出されており、方形をなす中世館跡の形状が確認された。

4号溝 本区から検出された4号溝は搅乱により、正確な堀の規模は不明であるが、平成9年度徳丸仲田Ⅱ遺跡発掘調査で検出された中世館跡の堀西端と考えられる。今年度調査、前年度調査結果より、中世館跡の南辺は約76m程の規模があったと推測される。

3号溝 3号溝は、地山のローム層を削り、走向は凡そN30°Eで上端幅3.0m、下端幅0.2~0.3m、検出面からの深さ0.39~0.69mを計測する。本遺構は、本線部分検出の中世館跡（前述）の堀に切られている。3号溝中には、灰色土（しまり弱・粘性弱）が堆積し、堆積土中には黄色土塊ブロックの混入がみられた（上層に行くほどブロックは大になる）。本遺構からは、常滑系大甕が出土したが、頸部片であるため詳細な年代は不明である。本区遺構外出土遺物として、古墳時代前期の台付甕（石田川式土器など）が出土している。

本調査区を南へ500m下ると、力丸城跡（前橋市力丸町。現在の降龍山善昌寺付近一帯）にあたる。力丸城は、方眼状に幾重もの堀や溝が巡らされ、北端は本区に程近いところまで及んでいたとされている。



第27図 H区北側道西地区全体図

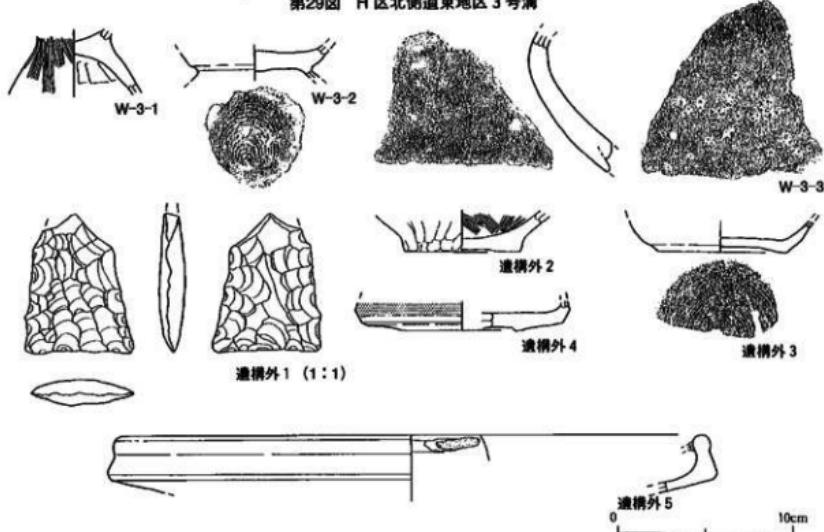
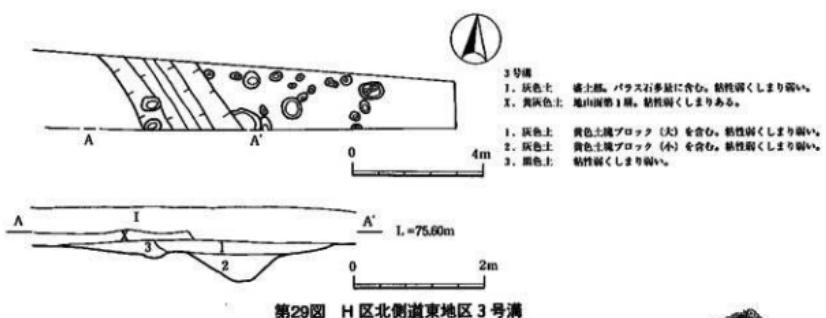
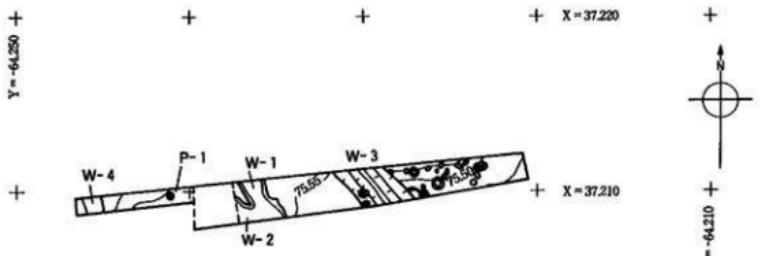


表5 遺物観察表

遺構	遺物番号	器種	口径・器高・底径(cm)	遺存状	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
溝	1	土師器台付甕	(3.7)	脚部片	脚部はわずかに膨らみながら開き、底盤は欠損している。石川式の台付甕。内：ヘラナデ、外：刷毛目(煤化部)。	①石英・白色粒 ②黄褐色 ③酸化	日区東地区 中世Ⅲ号溝 埋没
	2	須恵器坏	(1.9)	底部片	切り離しは回転系切りで高台を貼り付ける。	①白色粒・チャート大粒 ②青灰色 ③還元窯業	日区東地区 中世Ⅲ号溝 埋没
	3	常滑焼	-----	脚部片	脚部は上段で強く外反する。側れ口に粘土の接合部がわずかに観察される。	①灰岩 ②茶褐色、自然釉はオーリーブ灰色 ③還元	日区東地区 中世Ⅲ号溝 埋没
遺構外遺物	1	石 瓢	全長(2.6)幅2.2深さ3.3cm	先端部欠損	面に剝離調整が行なわれ、各剥離は使用により磨耗している。	①灰岩	E区北As-C 埋没
	2	土師器台付甕	(2.3)6.6	底部	上部は気味の底盤より、球形の胴部に連続する。内：刷毛目、外：脚部はヘラ削ぎ、底盤はヘラ削り。	①白色・雲母・褐色粒 ②黄褐色 ③酸化	H区東 As-B下
	3	須恵器坏	(1.8)7.1	底部1/2	ロクロ底形、底部回転系切り	①角閃石・片岩粒 ②灰色 ③還元	J号窯穴 埋没
	4	瀬戸焼香炉	(1.7)	底部片	底盤は回転ヘラ削りにより、前り出し高台となる。外：脚部に跳動がかかるが底盤までは及ばない。内：無釉となる。	①白色(マットとした質感) ②白青色 ③堅硬	E区2号 溝跡 埋没
	5	土師器台付甕	(34.0)(3.4) (35.0)-----	口縁部片	口縁部は内側し内耳を付ける。底盤は繊やかな丸底で、放熱による剥落が観察される。	①角閃石・褐色粒 ②白青色 ③酸化	C区北As-B 埋没

第5章まとめ

本遺跡からは、中世館跡検出面、浅間B軽石下面、FA堆積面、浅間C軽石混土層下面、弥生時代以前面の計5面が検出された。ここでは、主な検出された遺構の概観を述べることとする。

浅間B軽石下面 本遺構からは、溝19条、畦畔39条、

土坑2基、ピット28基、水田遺構、竪穴状遺構1基が検出された。本遺跡周辺は、現在に至るまで水田として土地活用が図られているが、今回の調査においては多くの畦畔が検出され、古代よりの生産域であったことをうかがわせる。このうち検出された畦畔を走向方向により分類を行うと①

・②グループ、③グループ、④グループ、⑤グループの4つに大別される。①・②は、N 9°～16°Wに包括され、①・②ともに同時期の構造と推測される。しかし100mほど東側に位置する③のC区では真北走向に近い畦畔が検出されており、時期差がうかがわれる。また、④のD区では東西両端は③に近く、中央部は①・②に近い走向を示している。⑤は他のグループとは異なる方向性を持つがその用途は不明である。西側に位置する①・②は、端気川の影響を東側より多く受けたと想像され、条里制が緩和された時期の要素を示している。また方向性および形状から、③は条里制水田に近い畦畔の可能性が考えられる。①・②と③の要素をあわせ持つ④は、条里制施行期、条里制緩和期の水田耕作と推測される。

弥生時代以前面 本確認面より溝19条、土坑48基、ピット10基、不明遺構14が検出され、溝19条は下表の通りすべて北から南へ流れ、西に傾く17条、東に傾く2条に大別できる。このことにより、本遺跡周辺は、弥生時代以前より一定の規則性をもって治水が行われた可能性が指摘される。

表7 溝走向一覧

西に傾く溝2条

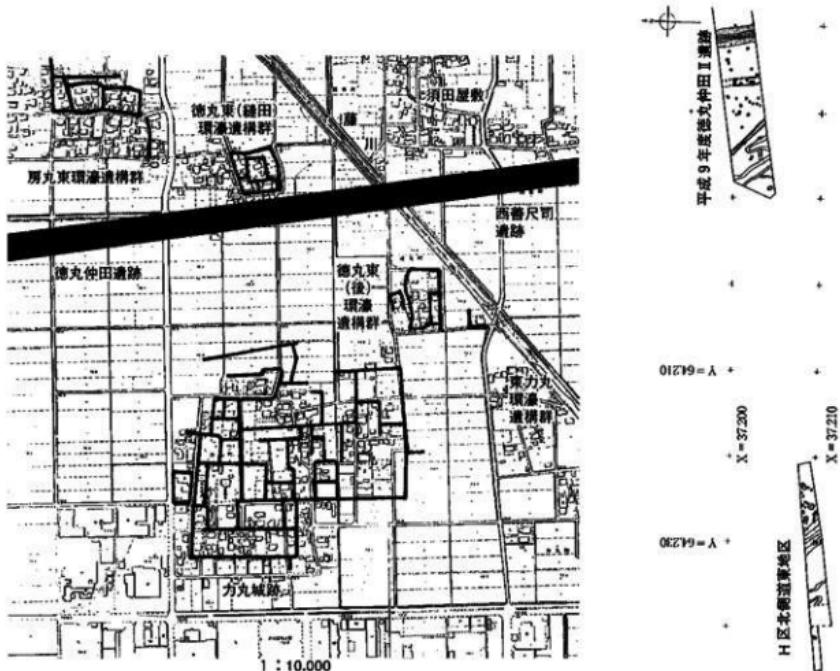
N (0°±角度±4°) W	小字
C区北側道2号溝	N 0°W
F区北側道1号溝	N 0°W
G区北側道1号溝	N 4°W
C区北側道1号溝	N 8°W
D区北側道1号溝	N 8°W

N (13°±角度±4°) W	小字
F区南側道2号溝	N 13°W
F区南側道1号溝	N 15°W
D区北側道2号溝	N 16°W

N (30°±角度±4°) W	小字
D区北側道1号溝	N 30°W
F区北側道1号溝	N 32°W
E区北側道1号溝	N 36°W
D区北側道1号溝	N 40°W
D区北側道2号溝	N 40°W
D区北側道3号溝	N 40°W

東に傾く溝2条	走向	小字
A区北側道1号溝	N 14°E	前田
D区南側道4号溝	N 40°E	仲田

中世館跡検出面 本遺跡は微高地上に立地する本遺跡II区北側道東地区（小字「緒田」）より確認されている。周辺の調査事例をみると、南隣接地にあたる本線部分の環濠南端堀、東隣接地にあたる平成9年度徳丸仲田II遺跡で環濠東端堀が検出されており、これらのことより方形の環濠を持つ中世館跡の存在が明らかとなり、今回の調査はこの堀の一部と館内部に実施されている。周辺の中世史を見ると、本調査区を南へ500m下ると、力丸城址（前橋市力丸町。現在の降龍山善昌寺付近一帯）が存在する。力丸城は、方眼状に幾重もの堀や溝を巡らし、環濠屋敷および寺院（善昌寺・法楽寺）等を惣堀で大きく囲んだ城で、環濠北端は本区に程近いところまで及んでいたとされている。力丸城は、伝説によると、大江姓那波氏一族の日向守広宗が貞治六年（1367年）二月一日に初めて力丸付近に居住し、姓を力丸に改めたとされている。そして、永和三年（1377年）に没し、善昌寺殿と号したといわれ、その後、天正十八年（1590年）、伊賀守某の時に滅亡する。徳丸・力丸・房丸付近、通称「三丸地区」は、微高地上に中世館跡、環濠屋敷が多くみられる地域である。「丸」の意味の詳細は不明であるが、この「丸」の意味するものは、力丸城およびやや微高地上にある環濠屋敷が、水田という見通しの利く場所にあって、あたかも館や城郭の「丸」、もしくはその形態をなすように水田に浮かび上がった様子によって付いたと想像される。那波一族の出城として力丸城が設置され、付近を力丸氏が治めるようになる前後に、有力な家臣等により小さな屋敷が構築され、それら環濠屋敷を惣堀で囲み、力丸城が構築されたと考えられる。今回の調査事例は力丸氏没後、機能を失い分立した結果を示すものと推測され、在地社会における中世から近世への変化をおぼろげながら示すものと捉えられる。



第31図 本遺跡と力丸城の位置

第32図 本遺跡検出の中世館跡配置図



1 A～F 区全景



2 A 区北側道 As-B 下面全景



3 同 As-C 混下面全景



4 同 As-C 混下面 1号溝



5 同 弥生時代以前面全景

徳丸仲田Ⅲ遺跡

図版
4



1 C区北側道 As-B下面全景



2 同 As-B下面畦群



3 同 As-B下面水田



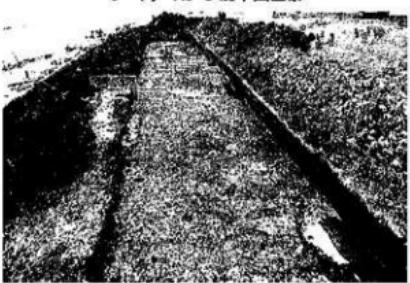
4 同 As-B下面ピット群



5 同 As-C混下面全景



6 同 As-C混下面1号土坑



7 同 弥生時代以前面全景



8 同 弥生時代以前面2号溝

徳丸仲田Ⅲ遺跡

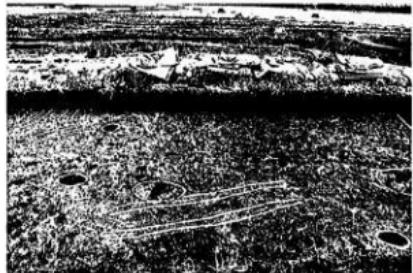
図版
5



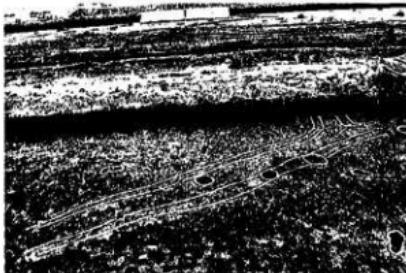
1 C区南側道 As-B下面全景



2 同 As-B下面 1号畦畔



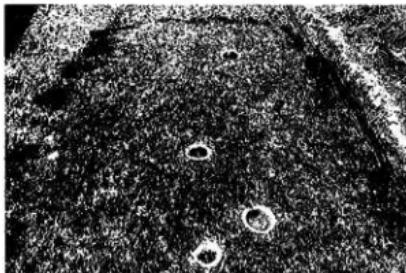
3 同 2号畦畔



4 同 3号畦畔



5 同 As-C混下面全景



6 同 As-C混下面 ピット



7 同 As-C混下面 2号溝



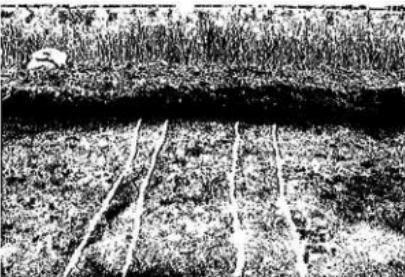
8 同 弥生時代以前面全景

徳丸仲田Ⅲ遺跡

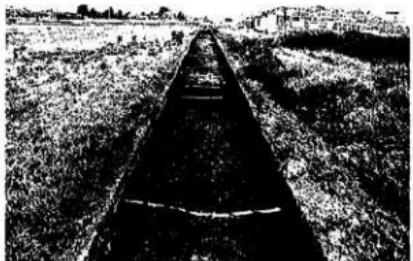
図版 6



1 D区北側道As-B下面全景



2 同 As-B下面2号畦畔



3 同 FAに被覆された帯状遺構



4 同 FA土層断面



5 同 As-C層下面全景



6 同 As-C層下面1号畦畔



7 同 弥生時代以前面全景



8 同 弥生時代以前面3号溝



1 D区南側道 As-B下面全景



2 同 As-B下面 2号畦畔



3 同 As-C混下面全景



4 同 As-C混下面 1号溝



5 同 As-C混下面 2号溝



6 同 弥生時代以前面全景



7 同 弥生時代以前面溝



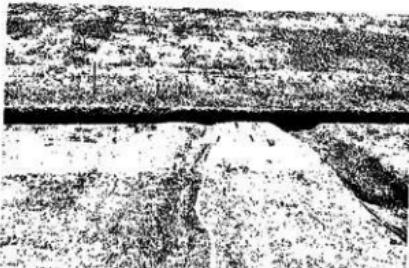
8 同 弥生時代以前面溝土層

徳丸仲田Ⅲ遺跡

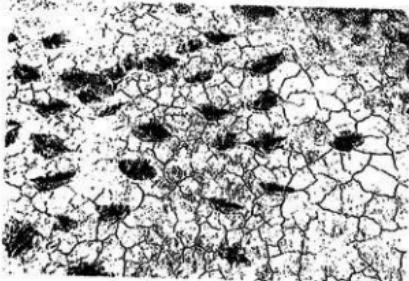
図版
8



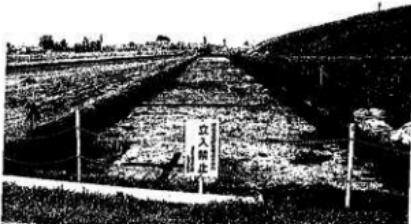
1 E区北側道 As-B 下面全景



2 同 As-B 下面 2号畦畔



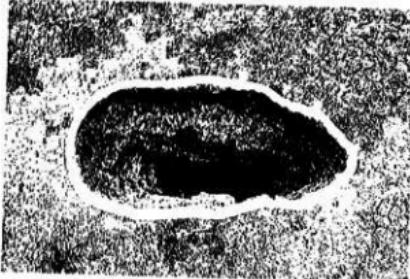
3 同 As-B 下面工具痕



4 同 As-C 混下面全景



5 同 As-C 混下面 1号溝



6 同 As-C 混下面 1号土坑



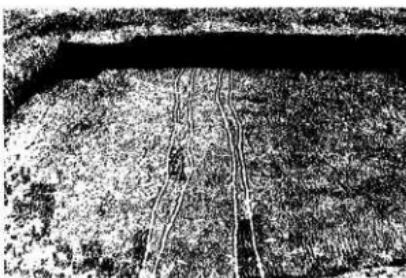
7 同 弥生時代以前面全景

徳丸仲田Ⅲ遺跡

図版
9



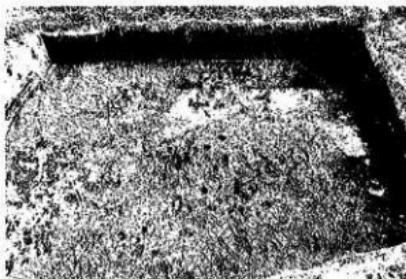
1 作業風景



2 E区南側道 As-B 下面全景



3 同 As-B 下面 1号畦畔断面



4 同 As-C 混下面全景



5 同 弥生時代以前面全景



6 F区北側道 As-B 下面全景



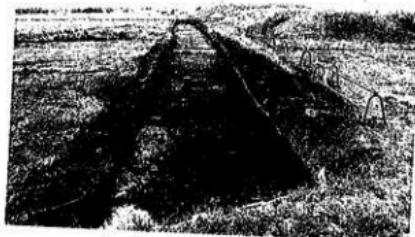
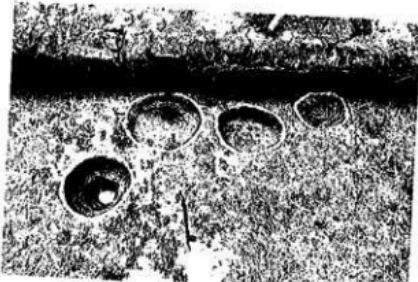
7 同 弥生時代以前面全景



8 同 弥生時代以前面 1号溝

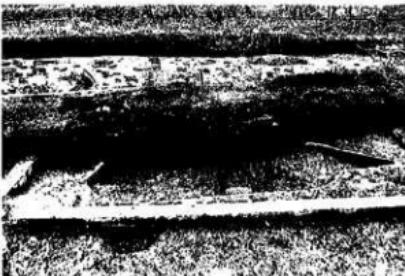
徳丸仲田Ⅲ遺跡

図版
10





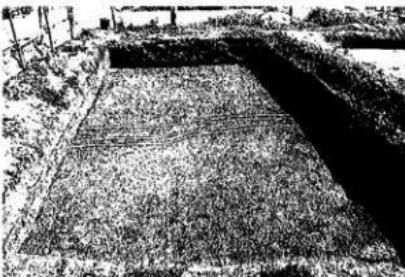
1 H区北側道西地区 As-B下面全景



2 同 As-B下面1号竪穴状遺構



3 同 As-B下面1号畦畔・2号畦畔



4 同 As-C混下面1号畦畔



5 H区北側道東地区中世館跡検出面全景

徳丸仲田Ⅲ遺跡

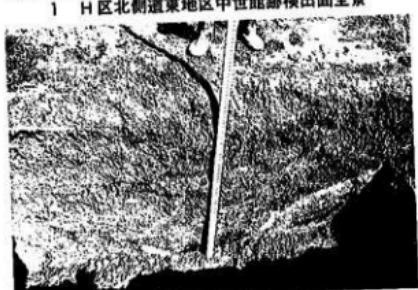
図版
12



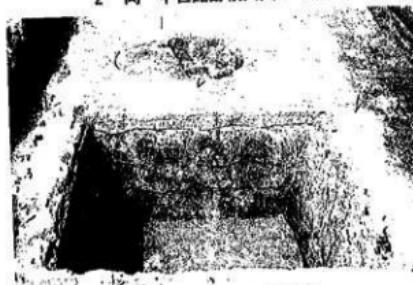
1 H区北側道東地区中世館跡検出面全景



2 同 中世館跡検出面 3号溝



3 同 中世館跡検出面 4号溝



4 同 旧石器時代試掘坑



5 作業風景



6 実測風景



W-3-1



W-3-3



W-3-4



W-3-5



W-3-2



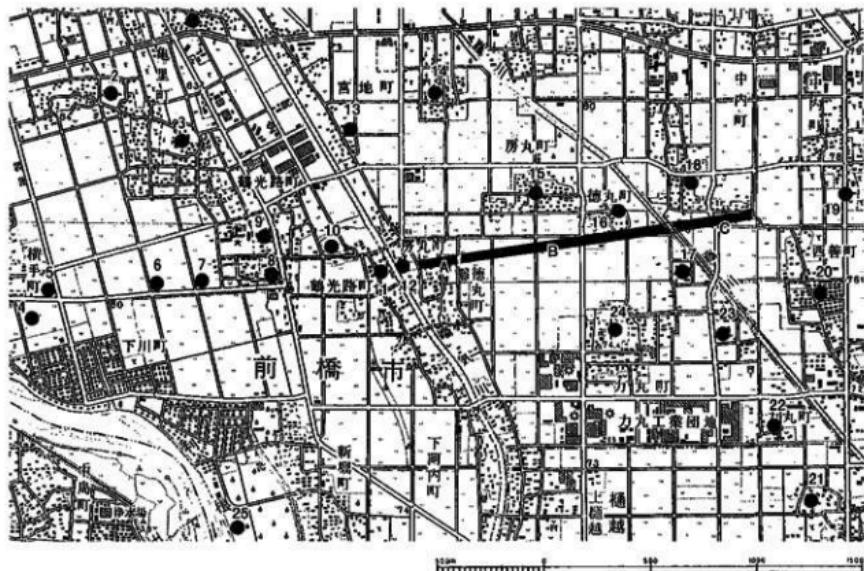
W-3-6

7 出土遺物

IV 西 善 尺 司 Ⅲ 遺 跡

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

西善尺司Ⅲ遺跡の所在する西善町は前橋市の南部にあたり、JR前橋駅の南東約6.3kmに位置している。遺跡地の北0.7kmには県道高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西善玉村線が調査区を南北に縦断する。また、同県道により調査区は二分されており、このうち調査区西側を西地区、東側を東地区と呼称した。本遺跡の所在する西善町および周辺の徳丸町・下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・中内町は、低地に水川・畑が広がり、微高地上には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の佐波郡西善村地味の項には「其色緋駕交工福榮ニ適ス、但シ桑及ヒ麥ニ利アラス、水利便ナレトモ往々旱ニ苦シム」と記され、旧状を伝える。また、同書佐波郡東善養寺村（前橋市東善町付近）の記述より、長寛二年の善養寺東西分割伝承、さらに『建久三年伊勢大神宮神主請文写』にみえる長寛元年（1163年～1165年）の玉村御厨（佐波郡玉村町付近）成立が一致するなど、この時期に本遺跡付近は再整備が行われた可能性がうかがわれる。

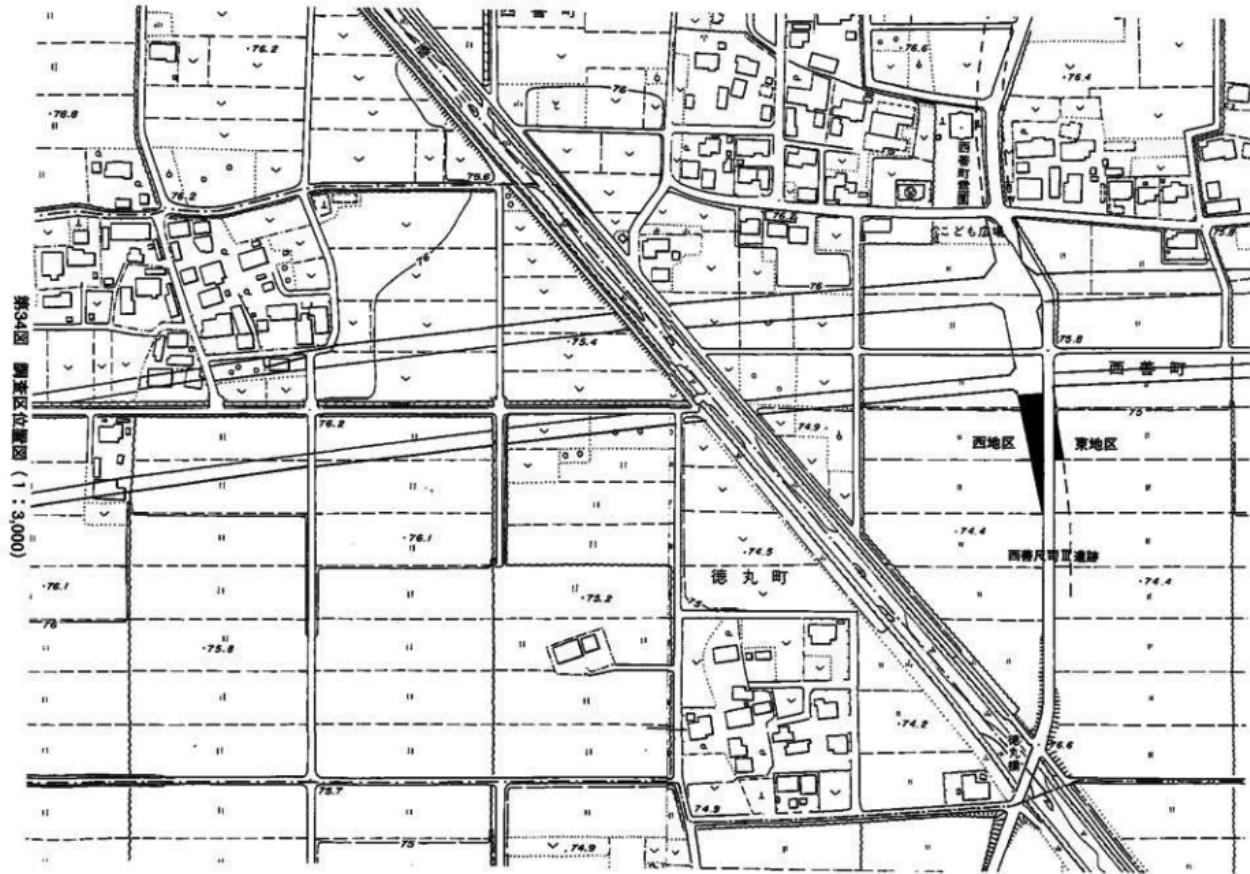


国土地理院2万5千分の1「前橋」「大胡」「高崎」「伊勢崎」

A 徳丸高塚遺跡 B 徳丸仲田遺跡 C 西善尺司遺跡

1. 猿内城（鬼里阿内城）跡 2. 亀里（天神）矢島百石屋敷跡 3. 成菩提山光明院極楽寺 4. 井戸南遺跡 5. 横手官田遺跡 6. 横手湯田遺跡 7. 鶴光路練引遺跡 8. 鶴光路（村中）環塙遺構群 9. 云上山普光寺 10. 西田遺跡 11. 鶴光路櫻橋遺跡 12. 宝乗寺跡 13. 宮地中川遺跡 14. 東宮地環塙遺構群 15. 房丸東環塙遺構群 16. 徳丸東（綾川）環塙遺構群 17. 徳丸東（後）環塙遺構群 18. 旧西善環塙遺構群（須川屋敷） 19. 中内村前遺跡 20. 横手環塙遺構群 21. 中越環塙遺構群 22. 東力丸（宮川）環塙遺構群 23. 東力丸（藤川）環塙遺構群 24. 力丸城跡・降龍山普昌寺 25. 新堀城跡

第33図 周辺の遺跡



第2章 調査の経過

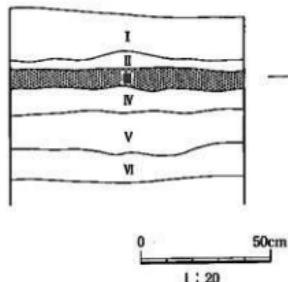
- 6月 上旬 平成10年度西善尺司Ⅲ遺跡の発掘調査を開始する。
 東地区・西地区的調査区設定、表土除去、浅間C軽石混土層下面調査を行う。
- 中旬 東地区・西地区的全体測量、表土除去を行う。
 東地区・西地区弥生時代以前面調査・旧石器試掘坑を設定し、調査を行う。
- 東地区・西地区全体測量を行う。
- 下旬 東地区・西地区埋め戻しを終了する。
 東地区・西地区調査終了をもって平成10年度西善尺司Ⅲ遺跡の発掘調査を終了する。

第3章 標準堆積土層

本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、浅間C軽石混土層下面の第1面、弥生時代以前面の第2面に分けられる。本地区で確認された鍵層は浅間C軽石混土層の1層であった。

以下は東地区東壁面で観察したもので本遺跡の層序を示すものである。

- I 暗褐色土層 現耕作土。しまりなく、粘性なし。
- II 灰色土層 旧耕作土。白色軽石を少量含み、
しまり、粘性ともにあり。
- III 明茶色土層 白色軽石（浅間C軽石）を少量
含み、しまり、粘性ともにあり。
炭化粒、黒色土塊がわずかにみられる。
(下面が第1面 浅間C軽石混土層下面)
- IV 暗茶色土層 橙色粒、暗茶色粒を少量含み、
白色軽石（浅間C軽石）をまばらに含む。
しまり、粘性ともにあり。
- V 肌色土層 暗茶色粒を少量含み、橙色粒をまばらに
含む。しまり、粘性ともにやや強い。
(下面が第2面 弥生時代以前面)
- VI 明白黄色土層 暗茶色粒を少量含む。
しまり、粘性ともに強い。

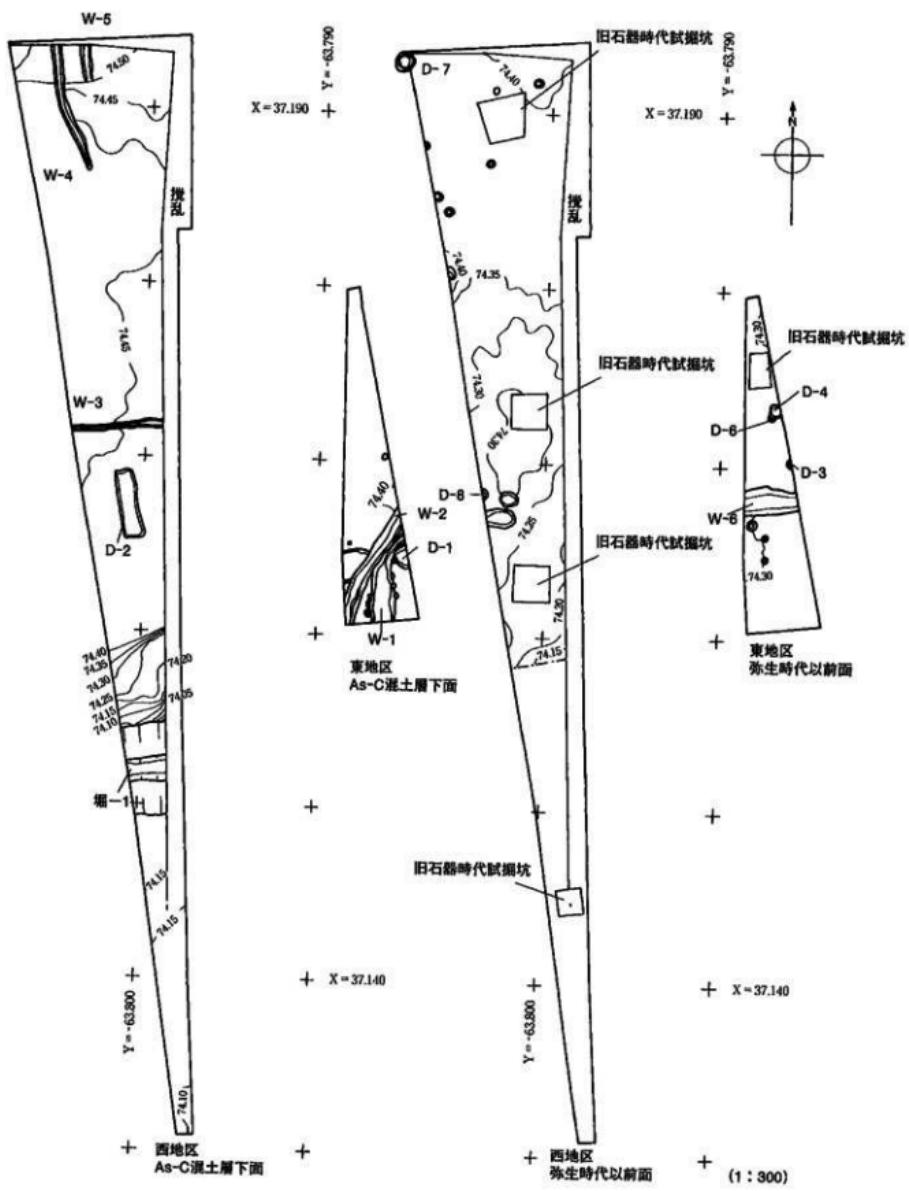


第35図 標準堆積土層

第4章 遺構と遺物

第1項 概要

本調査区において確認された文化層は2面であり、第1面は浅間C混土層下、第2面は弥生時代以前面である。第1面からは溝5条、堀1条、土坑2基、ピット9基、第2面からは溝1条、土坑5基、ピット12基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。



第36図 西地区・東地区全体図

第2項 浅間C軽石混土層下面

溝5条、堀1条、土坑2基、ピット9基が検出された。本遺構確認面より上層は廻場整備のため搅乱を受けしており、浅間B軽石堆積層の検出は明確ではなかった。

1号堀 X=37,150、Y=-63,800で検出されている。本遺構は薬研状の形態を呈し、検出長2.5m、上端幅4.8m、下端幅1.2m、深さ1.3mを計測する。浅間C軽石混土層下面にて遺構確認されているが、前述の搅乱により本面以降に構築されたとみられ、形状および埋没土層から、中世館の堀の一部と考えられる。さらに1号堀と3号溝は同一走向（N94°W）を示し、本遺跡の北350mに位置する須田屋敷北側環濠の走向、南西1.0kmに位置する力丸城南側環濠の走向（N94°W）と一致し、同じ目的をもった遺構の可能性が高い。

1号溝 X=37,160、Y=-63,780で検出されている。上部が搅乱されていたため、本面で検出され、掲載したが、近世の溝である。北から南に流下、走向方向（N°5 W）を示し、検出長5.0m、上端幅1.5m、下端幅1.0m、深さ0.2mを計測する。本遺構より肥前伊万里焼の碗が出土している。見込み文様は伊万里焼の碗・萬葉猪口に用いられるもので、18世紀末～19世紀初頭に限られる。また、筑前能古焼の碗にも類似品があり、能古焼の生産自体、伊万里焼の見込み文様の存続期間と大差なく、双方の関連が想定される。

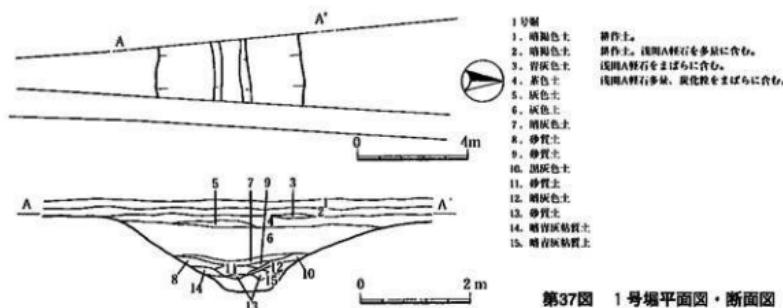
第3項 弥生時代以前面

本検出面からは、溝1条、土坑5基、ピット12基が検出されている。

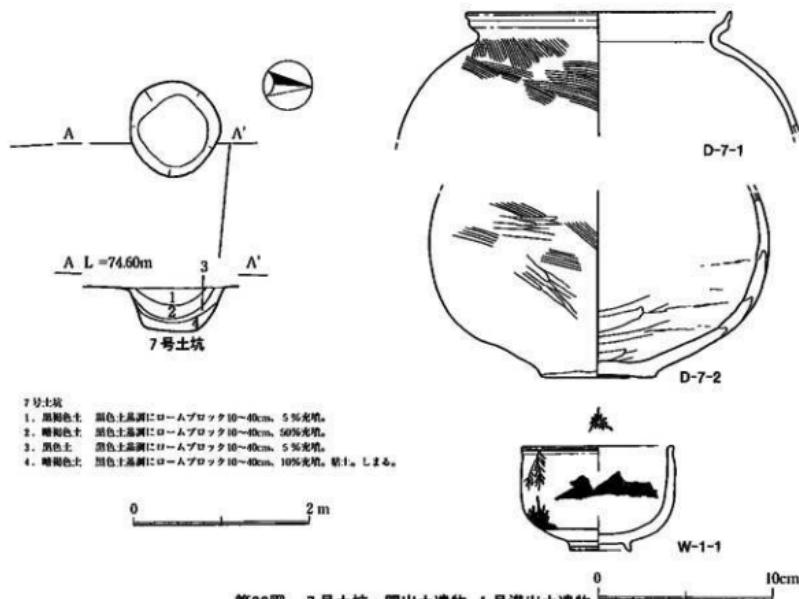
7号土坑 X=37,190、Y=-63,800で検出されている。上部が搅乱されていたため、本面で検出された遺構である。本遺構は、平面形は円形で、直径55cm、深さ30cmを計測し、形状は逆台形を呈している。本遺構よりS字状口縁台付壺の口縁部および壺の胴部～底部が埋没土層より出土し、後者は逆位の状態であった。両者は共伴遺物で、ともに古墳時代前期の所産である。

第5章まとめ

本遺跡からは、浅間C軽石混土層下面、弥生時代以前面の計2面の遺構確認面が検出された。浅間C軽石混土層下面からは溝5条、堀1条、土坑2基、ピット9基、弥生時代以前面からは溝1条、土坑5基、ピット12基が検出されているが、確認面である浅間C軽石混土層下面より上層は、廻場整備等により搅乱を受けしており、同層以降に構築された遺構が複合しているものと思われる。特筆される遺構は、西地区浅間C軽石混土層下面より検出された1号堀である。形状は薬研状を呈し、形状および埋没土層から判断して、中世館の堀の一部と考えられる。西地区から確認されている3号溝、本遺跡の北350mに位置する須田屋敷北側環濠の走向、南西1.0kmに位置する力丸城南側環濠（N94°W）と走向方向は一致し、これらは同一の性格を持った遺構と考えられる。この地域で確認されている須田屋敷をはじめとした環濠を伴う遺構は、旧西善光寺遺構群と呼ばれ、特に須田屋敷は武藏国鉢形城主として知られる北条氏邦の陣屋が営まれたとの伝承があり、北東には禪義寺が位置していたと伝えられる。本遺跡検出の1号堀の構築時期については、須田屋敷の北条氏邦陣屋伝承、力丸城伝承などから、北条氏邦の上野国支配が終焉を迎える天正十八年（1590年）前後と考えられる。本遺跡の調査成果を踏まえて旧西善光寺遺構群をみると、その成立については、中世において城郭的要素を持つ拠点であったものが、小山原の役後の後北条氏上野支配の終焉、さらに徳川家康家臣平岩親吉の脇橋（前橋）入部による力丸氏・那波氏等の衰退、在地武士の帰農化などの諸要因から、近世へ至る時代の中でそれらが徐々に解体した結果と捉えられる。西善光寺付近の環濠屋敷は在地社会における中世から近世への変化を示す好資料といえよう。しかしながら、今回の調査は道路部分という限られた範囲で実施されたものであり、不明な点が多く、それらについては周辺部の調査を待って検討を加えたい。



第37図 1号坑平面図・断面図



第38図 7号土坑・同出土遺物、1号溝出土遺物

表8 遺物観察表

遺物	遺物番号	器種	口径・器高・底径(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土・②色調・③模成	出土位置
7号土坑	1	土師器	(15.2) · -----	1/1縁部 1/2	縁部は「S字」状を呈する右田川式土器。 外: 刷毛削平。	①石英・長石・砂粒 ②棕褐色 ③模化	埋没土
	2	土師器	----- · 盖	6.6	脇部は偏球形を呈し、底部は突出して上げ成となる。内: ヘラナゲ、外: 刷毛日後へ テ飛き。	①石英・長石・褐色 ②明赤褐色 ③模化	埋没土
1号溝	1	近畿陶器 茶碗	(8.7) · 6.0 3.5	1/2	見込み文様は伊万里焼(18C後半~19C前半)・筑前焼(19C前半)に類似する肥前・筑前系と見られる。外部には山水草木を描く。	④磁點・⑤呉須は藍色	埋没土



1 遺跡全景（空撮）



2 遺跡全景（空撮）

西善尺司Ⅲ遺跡

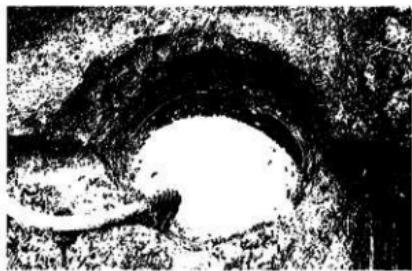
図版
14



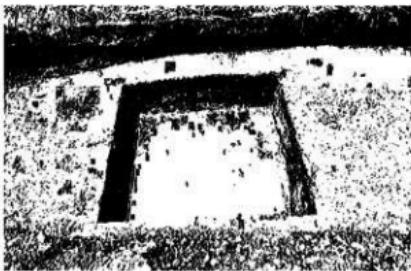
1 西地区 As-C 混下面 1号堀全景



2 同 As-C 混下面全景



3 同 弥生時代以前面 7号土坑



4 旧石器時代試掘坑



5 同 作業風景



6 同 調査前風景



D-7-1



D-7-2



W-1-1

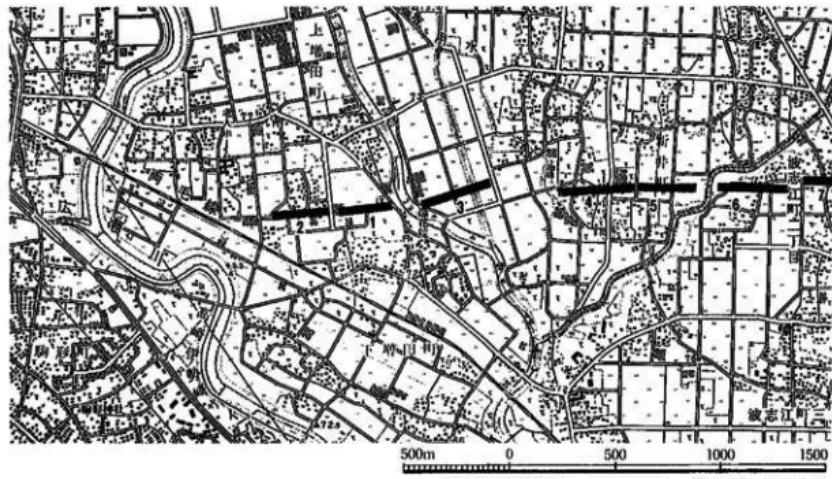
7 出土遺物

V 下増田常木Ⅱ遺跡

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

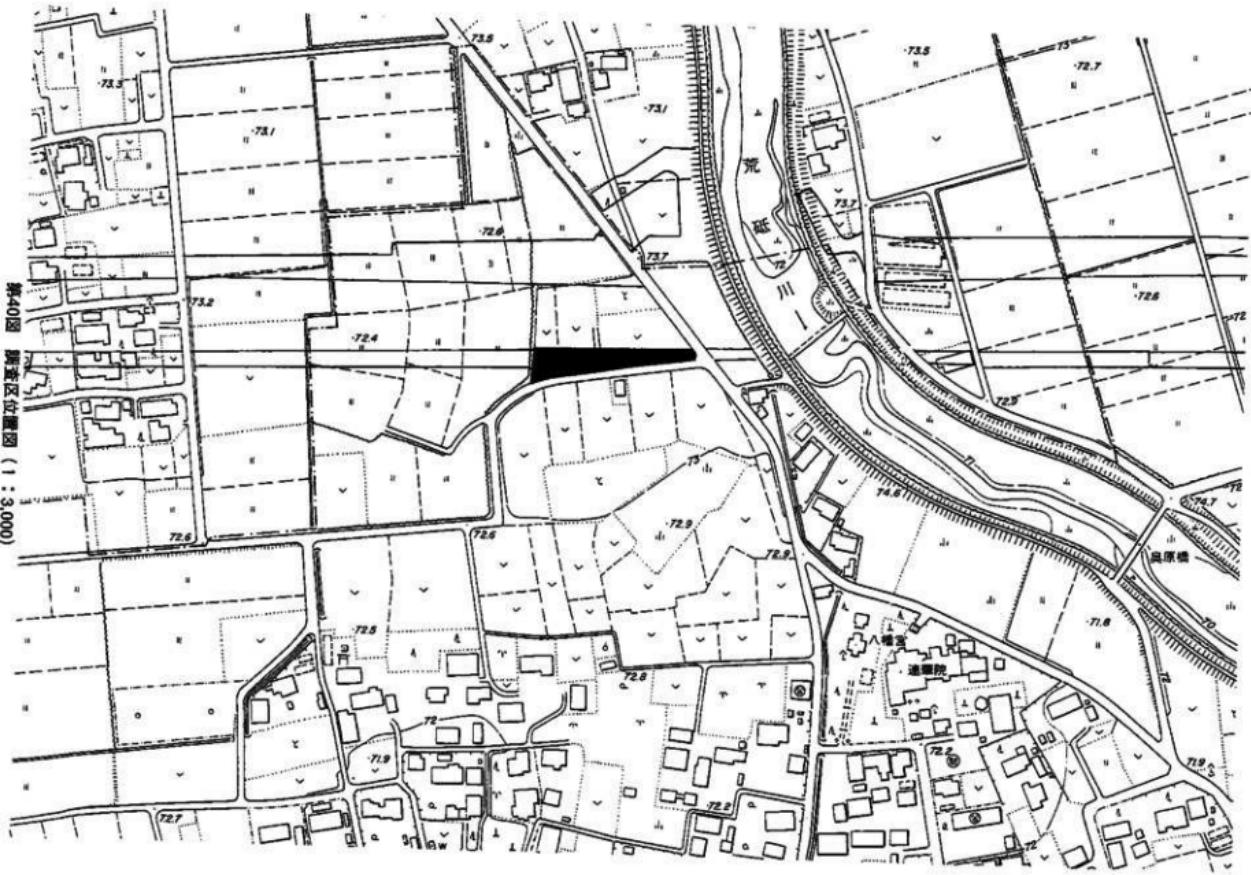
本遺跡が所在する地域は、三日利根川流路とされる広瀬川低地帯の西岸域にあって、大間々原状地の裾部に沿うように北西から南東方向に帶状に広がる河成段丘上にある。地理的な区分ではこの河成段丘部は、かつて完新世期に旧河川が作り出した流路部分の後背湿地と、中州部分の微高地に分けられる。本遺跡はこの中州部分に当たっている。従来、この地域においては、遺跡の存在はあまり知られていなかった。しかし、北関東自動車道路建設に伴う一連の発掘調査により、この旧中州部分および後背湿地にも人々が生活していた痕跡が数多く発見されている。

時代別に概観すれば、縄文時代では下増田越渡遺跡(3)において後期から晩期にかけての遺物が僅かながら発見されている。また、萩原遺跡(4)では早期～中期以降の遺物の報告がなされているが遺構の検出はない。大間々原状地寄りとなる波志江中野面遺跡(6)では中期の集落が検出され、まとまった資料が得られている。続く弥生時代では下増田越渡遺跡において後期の遺物が僅かながら出土している。また、下増田常木遺跡(1)では集落跡が確認されている。古墳時代になると遺跡の発見例が増加する。集落では下増田常木遺跡、萩原遺跡、幕城では波志江中野面遺跡、下増田越渡遺跡、生産遺跡では下増田越渡遺跡・下増田常木遺跡でAs-C混土層下の水田が検出されている。奈良・平安時代は9世紀前半の洪水層下とAs-B軽石層下の2面で遺跡の存在が確認されている。集落では下増田常木遺跡・下増田越渡遺跡・萩原遺跡・新井大田閑遺跡(5)・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡(7)、生産遺跡では下増田越渡遺跡・波志江中野面遺跡・萩原遺跡・新井大田閑遺跡・下増田常木遺跡の水田・畠跡がある。中世では下増田越渡遺跡・下増田島遺跡(2)・下増田常木遺跡・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡で造構・遺物の検出が報告されている。



第39図 周辺の遺跡

第40図 調査区位置図(1:3,000)



第2章 調査の経過

平成10年10月8日	本日より調査を開始する。ボックスハウス設置、および器材の準備を行う。
12・14日	表土除去作業を開始する。
14日	第1面の表土除去作業を行い、遺構の確認を行う。
15日	12号土坑、1～6号溝、道路状遺構の検出を行う。
16日	地上測量による全体図を作成する。
17日	第1面の調査を終了する。各遺構の写真撮影を行う。
19～23日	第2面（洪水層まで）の表土除去を行う。
26～28日	洪水層下水田跡の検出作業を進める。
28日	洪水層下の調査を終了し、本地区での現地調査を終了する。

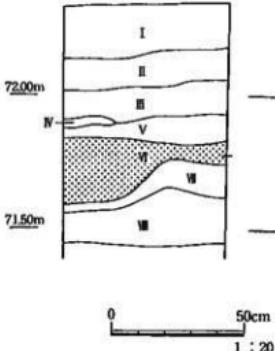
第3章 標準堆積土層

本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、表土層直下の中・近世の第1面、並びに9世紀前半に発生したとされる洪水層直下の第2面に分けられる。本地区で確認された鍵層はこの洪水層1層のみであった。荒砥川の左岸に位置する下増田越渡Ⅲ・IV遺跡では浅間B軽石（As-B）、や様名ニッケルFA（Hr-FA）の堆積が確認されているが、小河川（荒砥川）を隔てた対岸に位置する本遺跡の堆積状況と異なっている。

以下は各土層の観察結果である。

《土層観察結果》

I層 黄褐色土層	良くしまっている。粘性なし。 (下面が第1面近世確認面)
II層 略黄褐色土層	良くしまっている。粘性なし。
III層 略褐色土層	良くしまっている。粘性ややあり。 灰色の粘質土をブロック状に含む。
IV層 略褐色土層	良くしまっている。粘性あり。褐色土を ブロック状に含む。
V層 略褐色砂質土層	良くしまっている。粘性あり。
VI層 暗青灰色砂質土層	V層よりしまり弱い。粒子粗く粘性なし。 Hr-FPと思われる軽石を混入する。 (9世紀前半の洪水層と判断される。)
VII層 暗灰褐色砂質土層	良くしまる。白色の粒子を含み鉄分の沈 着が見られる。(上面が第2面)
VIII層 灰褐色砂質土層	V層よりも明るい。しまり、粘性ある。



第41図 標準堆積土層

第4章 遺構

第1項 概要

今回の調査における調査区の文化層は2面である。第1面の近世以前の遺構確認面では土坑3基・溝7条・道路状遺構1条が検出されている。第2面の9世紀前半とされる洪水層下面では、水田跡が検出されている。

第2項 近世以前面

土坑は北西のX=38,800、Y=-63,400において3基偏在して検出されている。平面形状はほぼ円形もしくは稍円形を呈する。規模は長径が約60cm~90cm、確認面下の深さは約40cm~55cmを測る。埋没状況は堆積状況から判断すると、人為埋没の可能性が考えられる。出土遺物はなく機能および細かな時期共に不明である。

溝はX=38,800、Y=-63,380付近で7条が集中して検出されている。東西方向へ走向するもの(1・7号)、「く」の字状に蛇行するもの(2・3・4号)、南北に走向するもの(5・6号)に分けられる。断面形状はいずれも浅い皿状を呈し、上端幅は約30cm~55cm、確認面よりの深さは、10cm~30cmを測る。全体として掘り込みが浅く小規模な溝である。

遺物の出土は見られず、機能および時期共に不明である。

道路状遺構はX=38,800、Y=-63,400付近で検出されている。走向は調査区南西端より北東へむかって北側の調査区域の外へ延びている。走向方向は北東から東方向に緩やかに弧を描くもので、N40°Eである。道の幅約1.0m~2.1mを測り、その幅は一定ではない。また、路面は全面にわたり硬くしまっており、断ち割り調査によって2枚の硬化面が確認されている。

本遺構に伴う遺物は検出されていないが、硬化面中に認められた白色の軽石は榛名山二ヶ所を給源とするものと判断され、浅間A軽石は確認されていない。したがって、18世紀後半以前の所産と判断される。

第3項 9世紀前半面

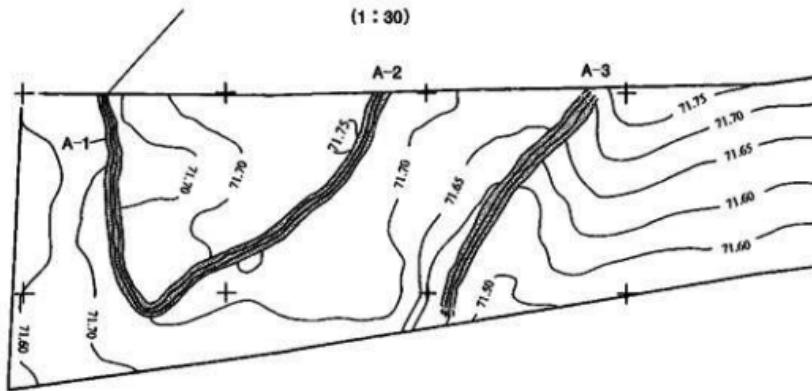
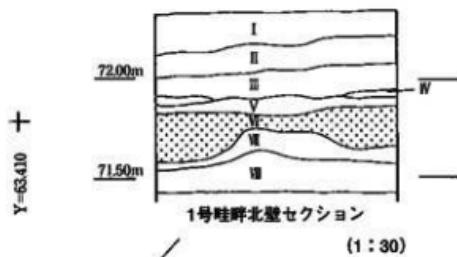
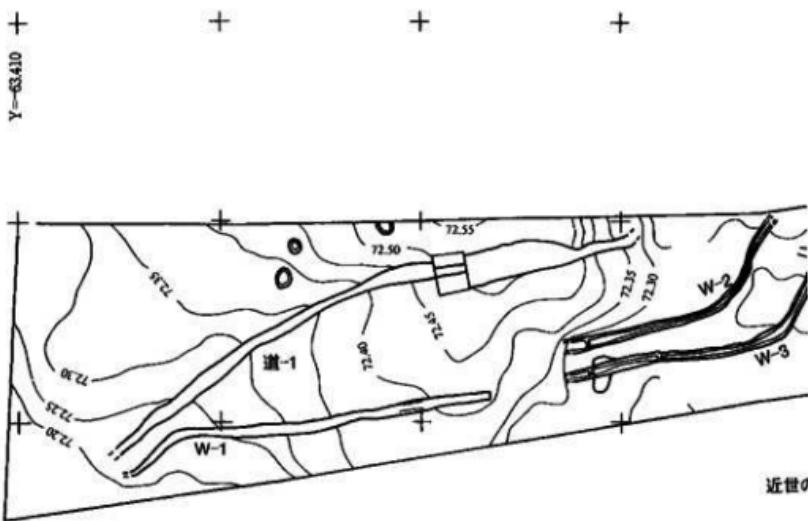
第2面では、9世紀前半に発生したとされる洪水層下より水田跡を検出した。水田跡はX=38,800、Y=-63,400周辺で検出されている。調査区西側部分では比較的遺存状況は良好であったが、中央部より東側にかけては広範囲にわたって削平を受けており、水田面はおろか水田土壤たる粘質土さえも残存していないかった。

畦畔は調査区西側において3条検出している。1・2号畦畔は緩やかに蛇行しながらX=38,780、Y=-63,410付近でL字に接続する。3号畦畔は1・2号の東側に位置し、2号と走向方向がほぼ一致する。区画された内部が水田面になるものか、規格性は看取できない。畦畔の高さは10~14cm、幅55~75cmを測る。断面形は台形状を呈し、全体的にしっかりとつくりで遺存状態は良好といえる。

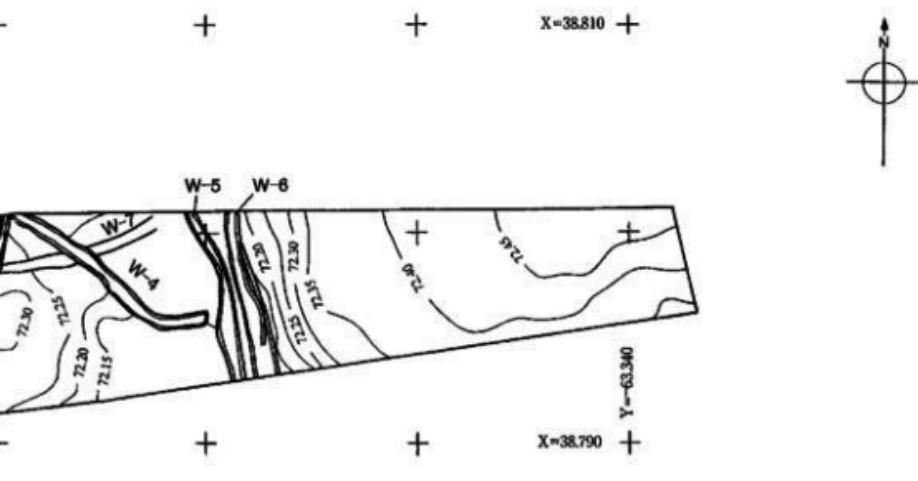
遺物の出土はみられなかった。

第5章 まとめ

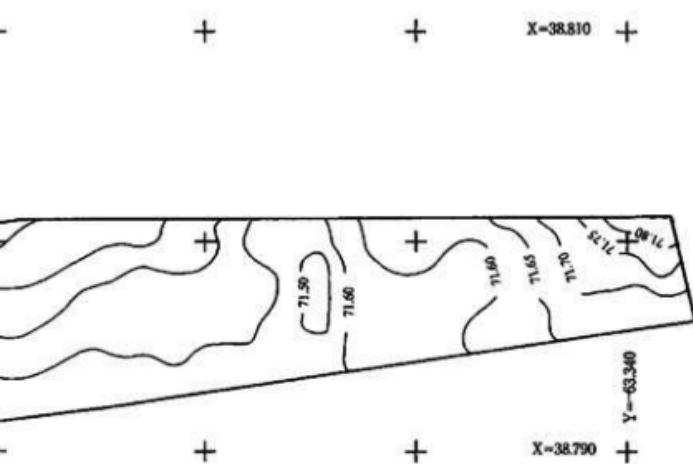
本遺跡において検出された遺構は2面の文化層から、近世の土坑・道路状遺構・溝、9世紀前半以前の水田面1面・畦畔3条であった。調査範囲の制約もあって内容については不明な点が多い。周辺の調査結果を待ちたい。



9世紀前半



構造面



(1 : 300)

洪水層下水田跡

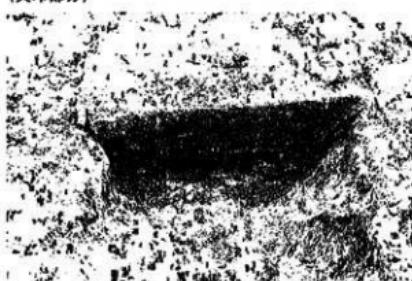
体図 折図10



1 遺跡遠景（矢印部分）



2 近世面2号溝全景



3 同 土層堆積状況



4 同 3号溝土層堆積状況



5 同 5・6号溝全景

下増田常木Ⅱ遺跡

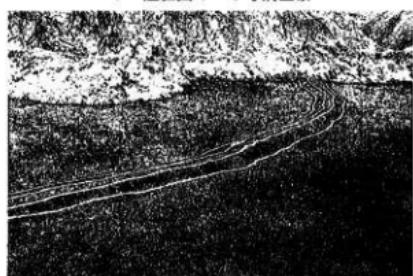
図版
16



1 近世面4~6号溝全景



2 同 1号道路状溝



3 9世紀前半洪水層下面1号畦畔



4 同 1号畦畔土層堆積状況



5 同 1・2号畦畔



6 同 1・2号畦畔



7 同 3号畦畔



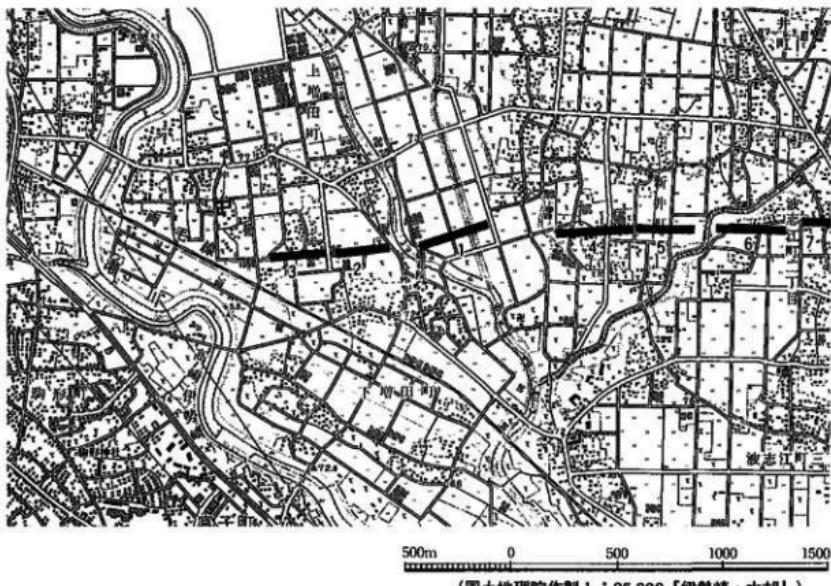
8 同 1・2・3号畦畔

VI 下増田越渡Ⅳ遺跡

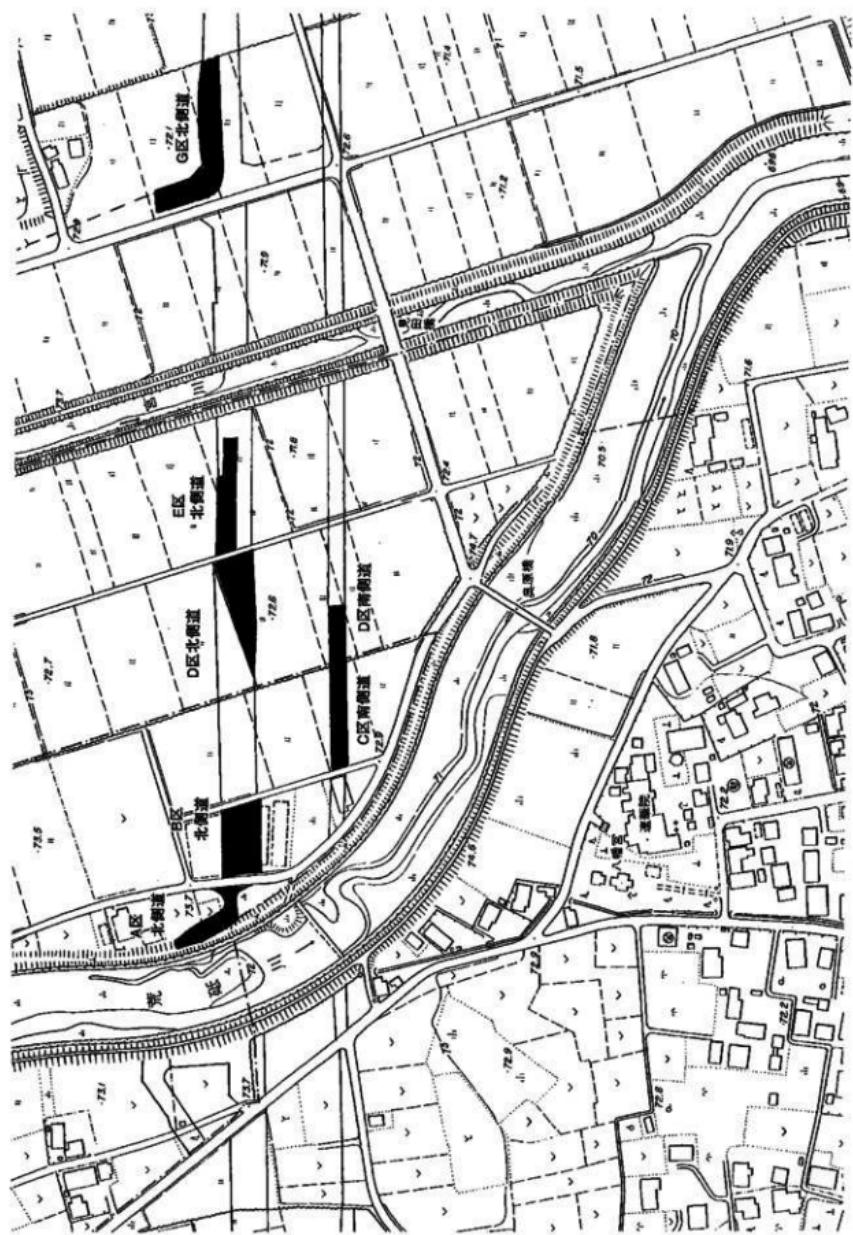
第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡が所在する地域は、旧利根川流路とされる広瀬川低地帯の西岸域にあって、大間々扇状地の裾部に沿うように北西から南東方向に帶状に広がる河成段丘上にある。地理的な区分ではこの河成段丘部は、かつて完新世期に旧河川が作り出した流路部分の後背湿地と、中州部分の微高地に分けられる。従来、この地域に於ては、遺跡の存在はあまり知られていなかった。しかし、北関東自動車道路建設に伴う一連の発掘調査により、この旧中州部分および後背湿地にも人々が生活していた痕跡が数多く発見されている。

時代別に概観すれば、縄文時代では下増田越渡遺跡(1)において後期から晩期にかけての遺物が僅かながら発見されている。また、萩原遺跡(4)では早期～中期以降の遺物の報告がなされているが遺構の検出はない。大間々扇状地寄りとなる波志江中野面遺跡(6)では中期の集落が検出され、まとまった資料が得られている。続く弥生時代では下増田越渡遺跡において後期の遺物が僅かながら出土している。また、下増田常木遺跡(2)では集落跡が確認されている。古墳時代になると遺跡の発見例が増加する。集落では下増田常木遺跡・萩原遺跡・墓域では波志江中野面遺跡・下増田越渡遺跡・生産遺跡では下増田越渡遺跡・下増田常木遺跡でAs-C混土層下の水田が検出されている。平安時代になると集落では下増田常木遺跡・下増田越渡遺跡・萩原遺跡・新井大田閑遺跡(5)、波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡(7)、生産遺跡では下増田越渡遺跡・波志江中野面遺跡・萩原遺跡・新井大田閑遺跡・下増田常木遺跡の水田・墓跡がある。中世では下増田越渡遺跡・下増田島遺跡(3)・下増田常木遺跡・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡で遺構・遺物の検出が報告されている。



第43図 周辺の遺跡



第44図 調査区位置図 (1 : 3,000)

第2章 調査の経過

平成10年

5月21日 本日より調査を開始する。重機搬入。調査区への搬入路を確保する。27日 E区B軽石下水田までの表土除去を終了。D区1~3号溝の検出作業を行う。30日 D区B軽石下水田調査終了。

6月2日 A区B軽石下水田まで表土除去を行う。E区B軽石下水田の検出作業を行う。4日 D区1~3号溝の実測を行う。5日 D区畦畔の実測を行う。E区4号溝の検出作業を行う。9日 A区B軽石下水田の検出作業を開始する。11日 B区平安時代の包含層まで表土除去を行う。C区C混土層まで表土除去を行う。15日 A、B、E区B軽石下水田跡の航空測量を行う。16日 B区遺構確認を行う。17日 B区1号住居跡、土坑の検出作業を始める。18日 B区土坑と1号住居跡の検出作業を行う。北東部分にトレンチを設定する。C区遺構確認の写真撮影を行う。19日 B区1号住居跡と土坑の検出作業を行う。23日 各調査区の排水作業を行う。25日 B区土坑の実測、写真撮影を行う。26日 B区1号住居跡と土坑の検出作業を行い、完掘する。29日 D区洪水層下水田まで表土除去を行う。30日 B区2号住居跡と土坑の検出作業を行う。E区洪水層下水田までの表土除去を終了する。

7月1~8日 B区2号住居跡と土坑の検出作業を行う。大溝の検出作業を始める。B区東側部分の遺構確認。C区ピットの検出作業。D区南側部分にトレンチ設定。C軽石混土層下水田跡を確認する。B区中央部分の遺構確認を行う。9日 D区洪水層下水田の検出を行う。13日 A区航空測量を行う。D区洪水層下水田跡の航空測量、実測を行う。E区洪水層下水田の検出を行う。14日 C区方形周溝墓を確認したあと検出作業に取りかかる。D区C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。E区洪水層下水田跡の精査、清掃を行う。15日 C区土坑と方形周溝墓の検出作業を行う。土坑を完掘する。D区噴砂の検出作業とC軽石混土層下水田跡の表土除去。E区洪水層下水田跡の実測と写真撮影を行う。16日 E区C軽石混土層下水田跡まで表土除去を行う。21日 D区噴砂の検出作業を終了し、写真撮影を行う。C軽石混土層下水田跡の検出作業に取りかかる。E区排水作業。22日 C区方形周溝墓の検出作業を行う。23~29日 C区方形周溝墓の調査を行う。D区C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。C区3・4号住居跡の検出作業を行う。C区4号住居跡の検出作業を行う。C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。29日 C区方形周溝墓を完掘、写真撮影を行う。D区C軽石混土層下水田跡の検出作業。30日 A区大溝の調査を終了し埋め戻しを行う。C区方形周溝墓の実測を行う。

8月3日 A区洪水層下の遺構確認を行う。E区C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。4日 C区36、37号土坑の実測を行う。E区C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。5日 C区4号住居跡の実測を行う。土坑の検出作業を行う。3号住居跡の写真撮影を行う。E区C軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。6日 D区C軽石混土層下水田跡の畦畔の確認を行う。10日 B区2号住居跡のカマドの検出作業を行う。E区C軽石混土層下水田跡の畦畔の実測と写真撮影する。D区10号溝とC軽石混土層下水田跡を完掘する。11日 B区洪水層面まで掘り下げて遺構確認を行う。1・7号住居跡の検出作業を行う。2号住居跡の完掘写真撮影する。D区C軽石混土層下水田跡の実測と写真撮影を行う。10号溝の写真撮影を行う。12日 B区1号住居跡の西壁とカマドの検出作業を行う。7号住居跡の検出作業を行う。C区36、37号土坑の検出作業を行う。17日 B区8・9号住居跡の検出作業を行う。1号住居跡のカマドの検出作業を行う。C区36、37号土坑の完掘写真撮影する。20日 B区大溝の検出作業を行う。21日 B区大溝断面の精査を行う。27~31日 B区大溝の実測を行う。D区南壁の断面を実測する。E区調査区の埋め戻しを開始。

9月1～5日 B区大溝の断面実測を行う。D区南壁断面の実測を行う。C区ピットの実測を行う。D区6号住居跡の検出作業。7日D区埋め戻しを開始し終了する。ポックスハウス2棟をA区に移設する。8日D区6号住居跡の検出作業を行う。9日A区への引っ越し作業を行う。11日B区大溝の断面実測を行う。14日B区1号住居跡の検出。C区埋め戻しを開始する。17日B区大溝の実測。C区埋め戻しを終了する。18日B区大溝の実測。1号住居跡、16号土坑の実測と写真撮影。25日B区7・8・10号住居跡を検出後、実測。1号住居跡完掘。29日B区1・8・9号住居跡と1号掘立、10・11号溝の実測と完掘。その後写真撮影を行い全体図を作成する。30日B区全体図を作成。11号溝の実測。B区は3/4調査終了。

10月1日 B区残り1/4の表土除去を行い、遺構確認を行う。6日B区46・47号土坑、10・13号溝を完掘し、すべての遺構の検出作業を終了する。その後、実測、写真撮影。7日B区の調査を終了し埋め戻しを開始する。8日B区埋め戻し作業。

平成11年

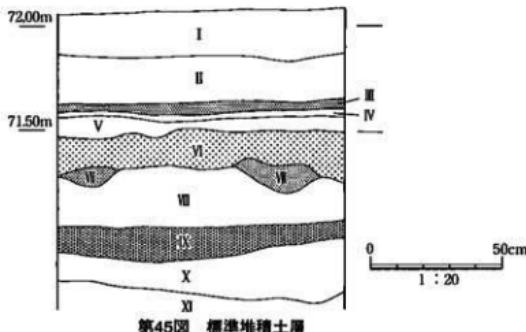
1月5日 G区発掘調査開始にあたり現場打ち合わせを行う。11日G区ポックスハウス、物置、トイレの設置。器材、資材の搬入。12～18日G区調査開始。1区C混土層下水田跡と4区B軽石混土層埋没の畠跡の表土除去。4区東西に走る大溝(W-15)を確認する。測量基準杭を設定する。19日G区1区C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。4区B軽石混土層埋没の畠跡の写真撮影と実測。20日G区4区B軽石混土層埋没の畠跡の写真撮影と実測。21日G区1区2号大溝を検出し完掘する。のち実測を行う。C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。4区B軽石混土層埋没の畠跡の実測。22日G区3区B軽石混土層埋没畠跡の表土除去作業。4区FA下水田跡の表土除去作業。25日G区1区C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。26日G区1区C混土層下水田跡の実測と写真撮影を行う。3区B軽石混土層埋没の畠跡を完掘後、実測、写真撮影。27日G区3区B軽石混土層埋没の畠跡の実測。FA下水田面まで表土除去を行う。28日G区1区調査を終了し、埋め戻し作業を行う。3区FA下水田跡の検出作業を行い、終了する。4区1号溝(各トレンチ)の実測と写真撮影を行う。29日G区3区FA下水田跡の実測。C混土層上面水田面まで表土除去。4区FA下水田跡の検出作業を行う。1号溝(各トレンチ)の実測と写真撮影を行う。

2月1日 G区3区C混土層上面水田跡の検出作業を行う。4区FA下水田跡完掘。1号溝(各トレンチ)の実測と写真撮影を行う。2日G区3区C混土層上面水田跡の検出作業。4区FA下水田跡の全景写真撮影。3日G区3区C混土層上面水田跡完掘。全景写真撮影を行う。1号溝(F、Gトレンチ)の実測と写真撮影を行う。4日G区現場作業中止。3区C混土層上面水田跡の平面測量を行う。4区FA下水田跡の平面測量を行う。5日G区3区、4区C混土層下水田跡の表土除去を行う。6日～9日G区3区C混土層下水田跡の検出作業と全景写真の撮影を行う。13日G区3区C混土層下水田跡平面測量を行う。14日G区2区C混土層下水田面まで表土除去を行う。15日G区2区C混土層下水田跡を完掘する。4区C混土層下水田跡の検出作業を行う。16～22日G区2区C混土層下水田跡の全景写真撮影。4区C混土層下水田跡の検出作業。24日ポックスハウス、物置、トイレの撤収を行う。26～28日全調査区の埋め戻しを行い全調査を終了する。

第3章 標準堆積土層

本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、中・近世、平安時代末期、平安時代前期、古墳時代、弥生時代、绳文時代に分けられる。これら資料は上位より浅間B軽石（As-B）の純層、9世紀前半の洪水層、榛名二ヶ岳FA（Hr-FA）層、浅間C軽石（As-C）混土層の4枚の鍵になる層によって区分されている。調査に於てはこれらの鍵層に従って掘り下げを進めたが、一部の区域においては層厚が薄くて明瞭に確認できなかったり、後世の搅乱により取り除かれた部分もあった。B区北側道ではAs-B軽石下面で遺構確認を開始したが、B軽石上面に中世の遺構が存在した事が確認できている。また、C区南側道では浅間B軽石層および9世紀前半の洪水層共に明瞭な堆積がなく、第1確認面で中世から古墳時代にわたる遺構が検出されている。

以下、本遺跡における標準堆積土層についてE区北側道南壁で観察された層順をもって概略する。

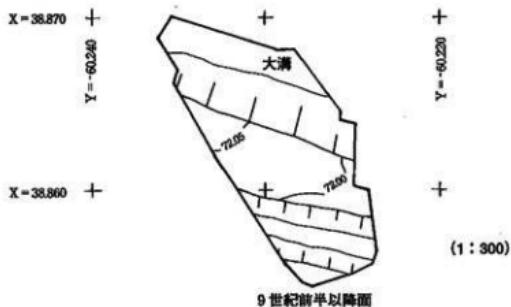


第45図 標準堆積土層

- | | |
|--------------|---------------------------|
| I層 黒褐色土層 | 耕作土。 |
| II層 黒褐色土層 | As-B 軽石混土層。 |
| III層 暗灰黄色軽石層 | As-B 軽石純層。 |
| IV層 黒褐色土層 | 鉄分を含む。粘性あり。 |
| V層 茶褐色土層 | 軽石を若干含む。粘性あり。 |
| VI層 明灰褐色砂質層 | 酸化鉄の沈殿がある。しまりあり。9世紀前半洪水層。 |
| VII層 黄色層 | Hr-FA 層。 |
| VIII層 黒褐色土層 | Hr-FA 下水田 粘性あり。 |
| IX層 黒色土層 | As-C 軽石混土層 As-C 軽石を多量に含む。 |
| X層 黒色土層 | As-C 軽石混土層下水田 粘性あり。 |
| XI層 灰褐色粘土質層 | |



+ X = 38.860 + + +
Y = -60.220



第46図 A区北側道全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 A区北側道

第1項 概要

本調査区は荒砥川の左岸に位置する。確認された文化層は2面であり、第1面は浅間B軽石層下面、第2面は9世紀前半に生じたとされる洪水層下面である。2面とも水田跡は検出されず、第1面においては北東へのびる溝3条が検出され、第2面では、比較的大規模な溝2条を検出した。走向は南東方向である。このうち1条については過去の周辺の調査において検出されていたものであるが、今回の調査地区においても連続する事が確認できた。なお、本地区においては、いずれの遺構からも出土遺物はなかった。

第2節 B区北側道

第1項 概要

本調査区において確認された文化層は3面である。

第1面は、浅間B軽石層下（第47図中）である。同層直下からは3条(14・15・16号)の溝が検出されている。なお、浅間B軽石層下の調査途中で、明確な文化層としては捉えられなかったものの、中世以降と考えられる土坑群を検出している（第47図上）。また、同様に水田跡の下面より、同層を掘り込む9～11世紀代の集落跡を検出した（第47図下）。さらに、この面を掘り下げて調査を進めたところ、新たな遺構を検出した。この結果をふまえた上で、最下層において検出された遺構の一部は弘仁九年（818）の地盤に伴うとされる噴砂にきられていたため、この面を「9世紀前半以前面」とし、その上層にあたる面を「9世紀前半以後 As-B 降下以前面」とする。（第54図）

As-C混層は一部において確認されたものの面的な広がりは見られない。さらに、シルト上面においても遺構は確認されていない。

第2項 中世面

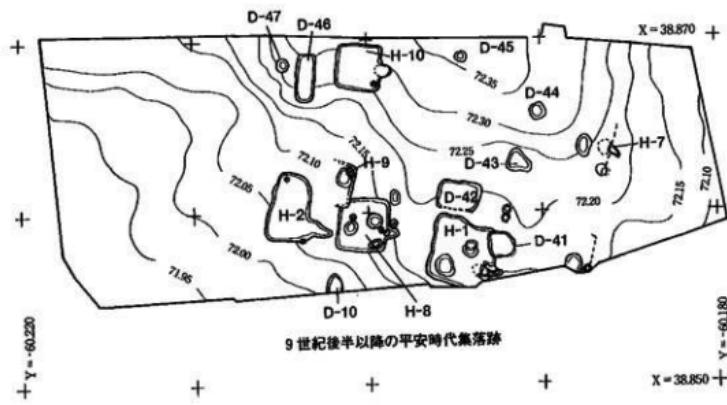
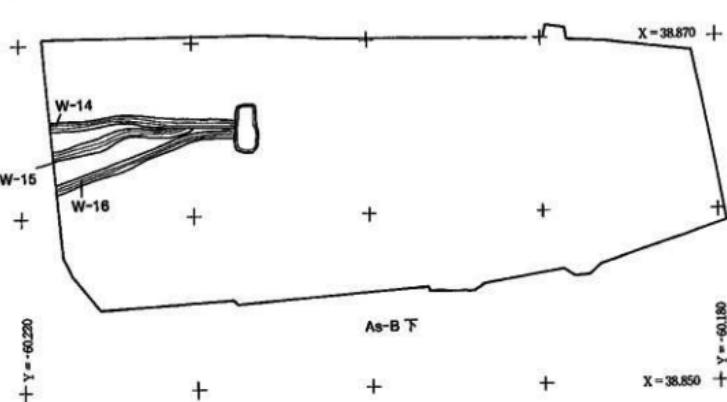
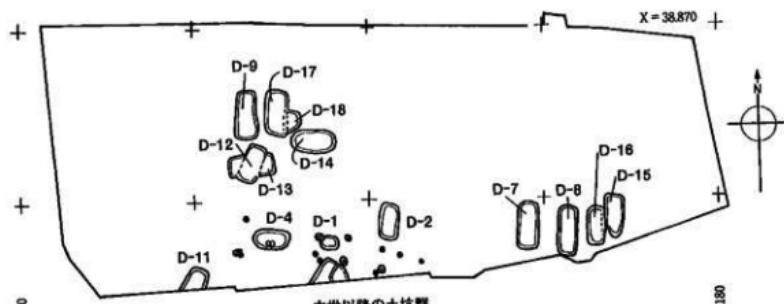
覆土および出土遺物より中世以降と判断された土坑は15基・小ピット15基を数える。そのうち土坑12基の形状はいずれも隅丸方形状を呈し、長径2～3m、短径1m前後であり、配置状況には一定の方向性が認められる。この事より、墓壙としての性格も想定されたが、骨片や副葬品等の出土遺物はなく、その機能面については明確にできなかった。

以下に、中世の土坑について特徴的な9号土坑を取り上げ、その形状を概略しておく。

検出されたのはX=38,860、Y=-60,200である。主軸はほぼ真北にとる。平面形は隅丸方形、断面形は箱形を呈する。規模は長軸2.8m、短軸1.2m、確認面下の掘り込みは58cmを測る。重複では14～16号溝を切る。遺物は検出されていないが、埋没土上層に浅間B軽石混土層が確認されたため、12世紀以降と考えられる。

第3項 浅間B軽石(As-B)下面

検出された遺構は溝3条で、9号土坑(中世)により切られる。またA区で2条の溝(1・2号)が検出されているが、走向方向から本遺構と同一遺構と判断される。2条の溝が本区で3条に分かれる点は現道路部分下での分岐が想定される。覆土中にはAs-Bのはば純層が堆積しており、降下時に存在したものであろう。出土遺物はない。



第47図 B区北側道全体図(1)

(1 : 300)

第4項 9世紀前半以降 As-B 降下以前面の集落

9～11世紀代の集落跡では堅穴住居跡6軒、土坑9基を検出している。層位的には浅間B軽石の除去後で確認されたもので、9世紀前半に発生した砂脈（噴砂痕）および浅間C軽石（As-C）を混入する灰黄褐色土刷を掘り込んで構築されている。

住居跡

堅穴住居跡は6軒検出した。時期は出土遺物より9世紀後半から11世紀にわたるものと判断され、形状は長方形、方形を呈する。カマドの構築の方角は未確認のものを除き、すべて東カマドである。なお、1号住居跡は11号溝を、8号住居跡は10号溝を切る形でカマドが構築されていることが調査によって確認されている。以下に住居跡の概要について一覧表にまとめる。

表9 B区北側道住居跡一覧

遺構番号	検出位置		規模(m)		主軸	カマド	重複	出土遺物	時期
	X軸	Y軸	長軸	短軸					
1号住居	38,850	-60,190	4.3	3.8	N110°E	東壁南寄り	11号溝跡より新 41号土坑より新	土師器皿・壺・甕、須恵器皿・壺・甕 灰釉陶器、転用硯(須恵器壺)	10世紀後半～11世紀代
2号住居	38,850	-60,200	4.0	3.8	N102°E	東壁南寄り	なし	土師器壺、須恵器羽釜、灰釉陶器塊	9世紀後半～10世紀前半
7号住居	38,860	-60,180	--	--	--	一	1・2号掘立より新	土師器及び須恵器羽釜・壺、灰釉陶器塊・皿	9世紀後半～10世紀前半
8号住居	38,850	-60,200	3.5	3.0	N92°E	東壁中央	10号溝より新	土師器壺、灰釉陶器塊・甕	9世紀後半～10世紀前半
9号住居	38,860	-60,200	--	--	--	一	なし	土師器甕・壺・羽釜	10世紀後半～11世紀代
10号住居	38,860	-60,200	3.0	2.5	N93°E	東壁中央	なし	土師器甕・須恵器壺片	9世紀後半～10世紀前半

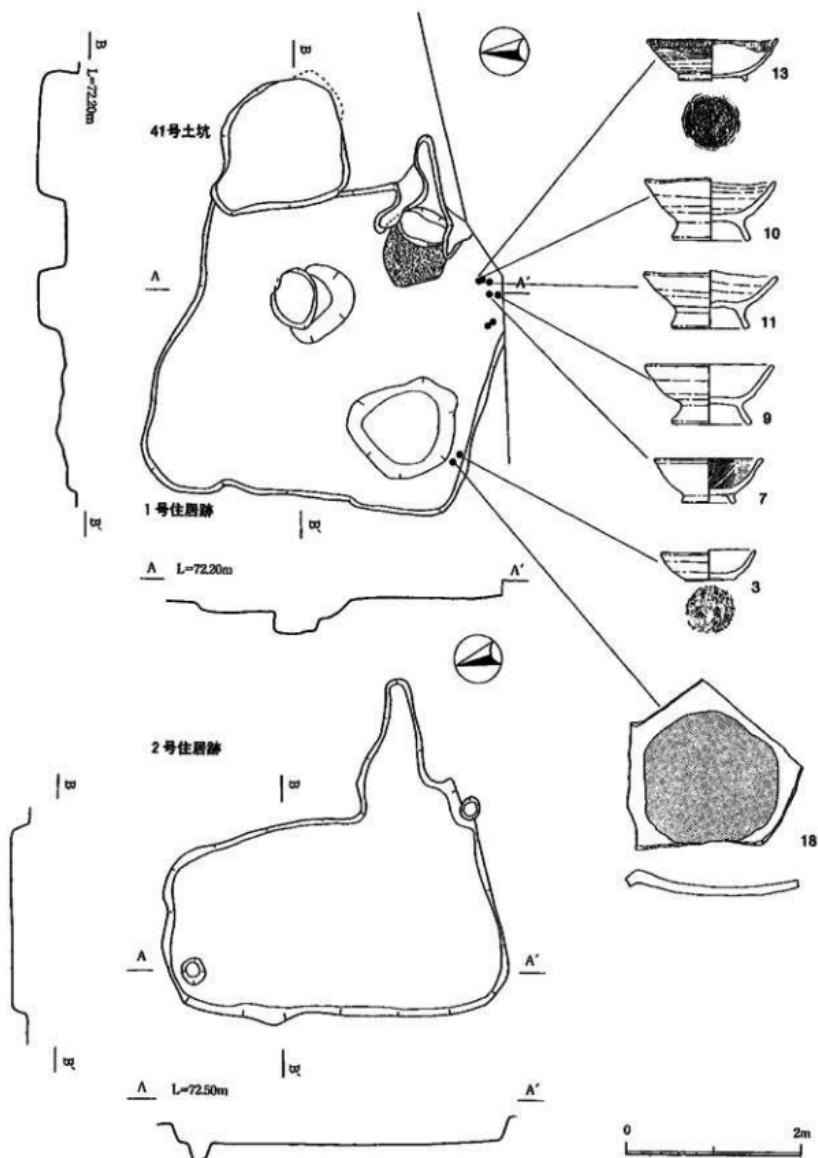
土坑

9基の土坑が検出されている。調査区の中央付近に集中する傾向がある。平面形状的には不整円形を呈する15・41・43・44号、方形を呈する42号、梢円形もしくは円形を呈する1・4・11・45・47号に分けられる。いずれにも覆土中に浅間C軽石の混入が認められるものの、同B軽石は含まれていない。規模および形狀的にも多様で性格は不明である。掲載遺物には41号土坑出土の須恵器壺1点がある。遺物より遺構の時期は9世紀後半～10世紀前半が想定される。

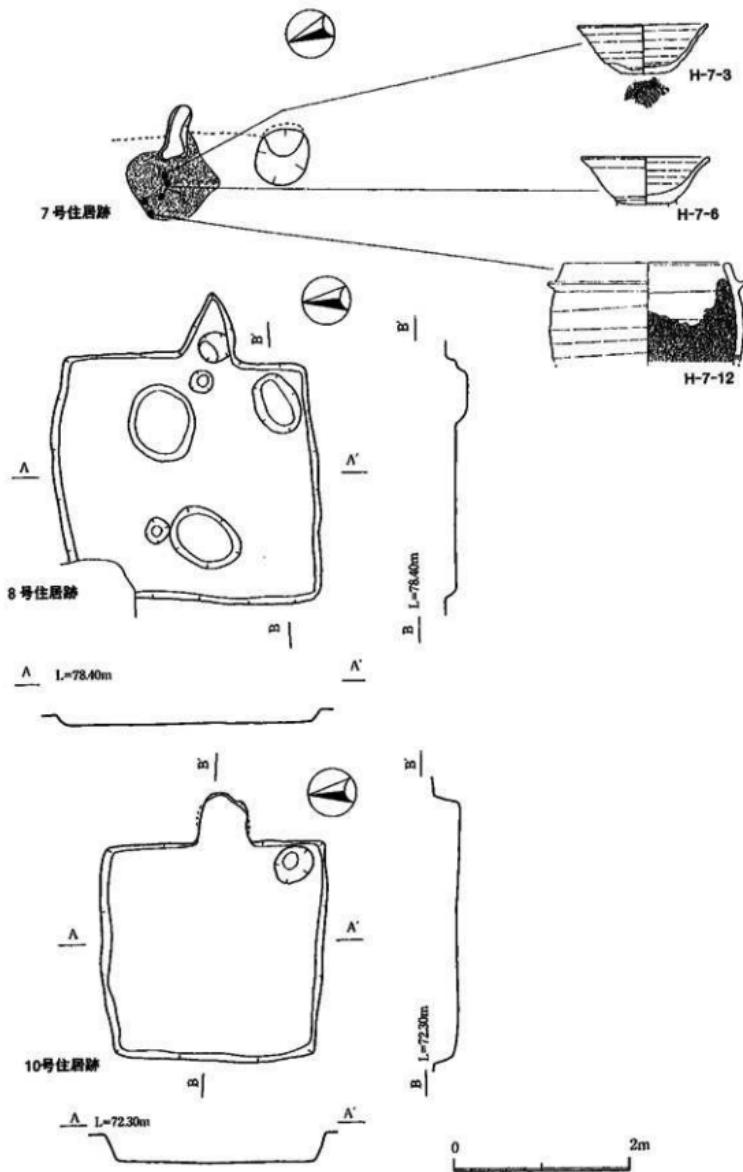
各土坑の詳細については割愛する。

第5項 9世紀前半以前面

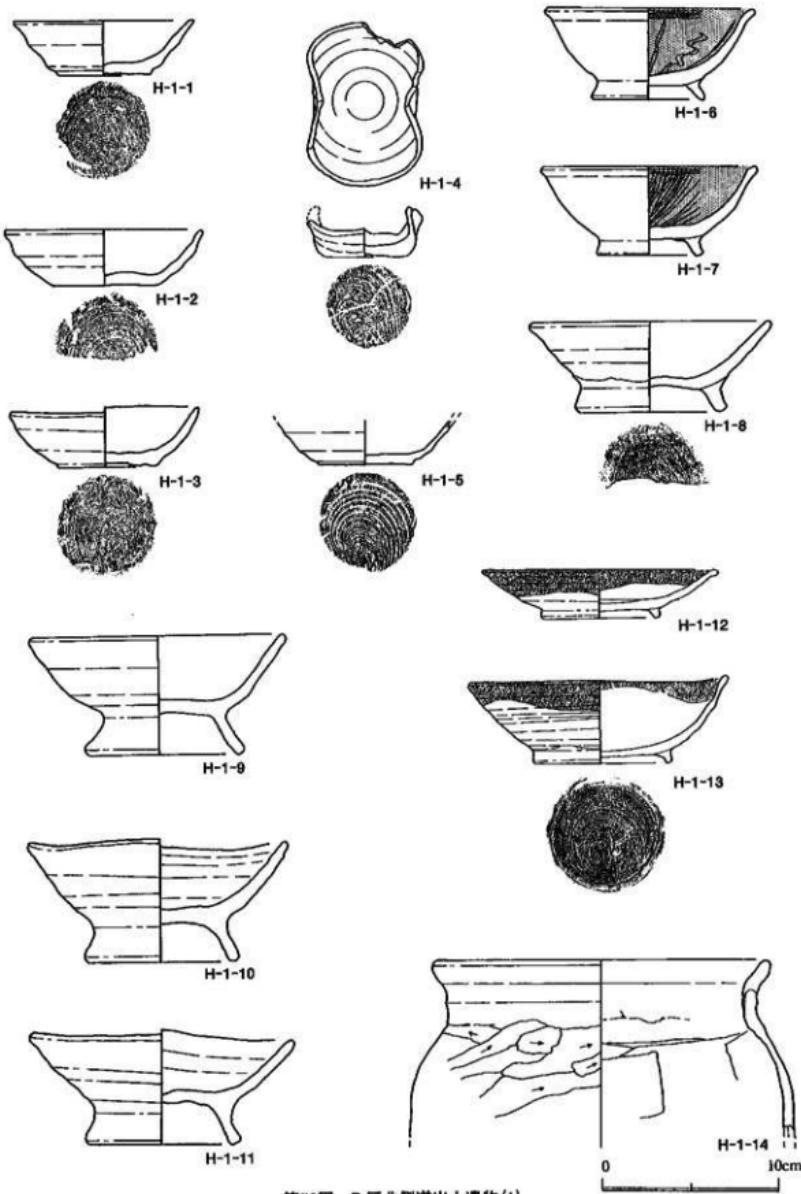
9世紀前半以前において掘立柱建物跡2棟、溝4条（道路状遺構1条を含む）を検出した。このうち、10号溝と11号溝にはさまれた部分は、道路状遺構と考えられる。走向はほぼ真北方向である。掘立柱建物跡は道路状遺構と平行する形で検出されており、二つの遺構は同時期に営まれ、かつ何らかの関連性をもって機能していたと考えられる。さらに、この建物跡の柱穴覆土には弘仁九年の地震に伴う砂脈（噴砂痕）が確認されており、9世紀前半以前の遺構と判断された。



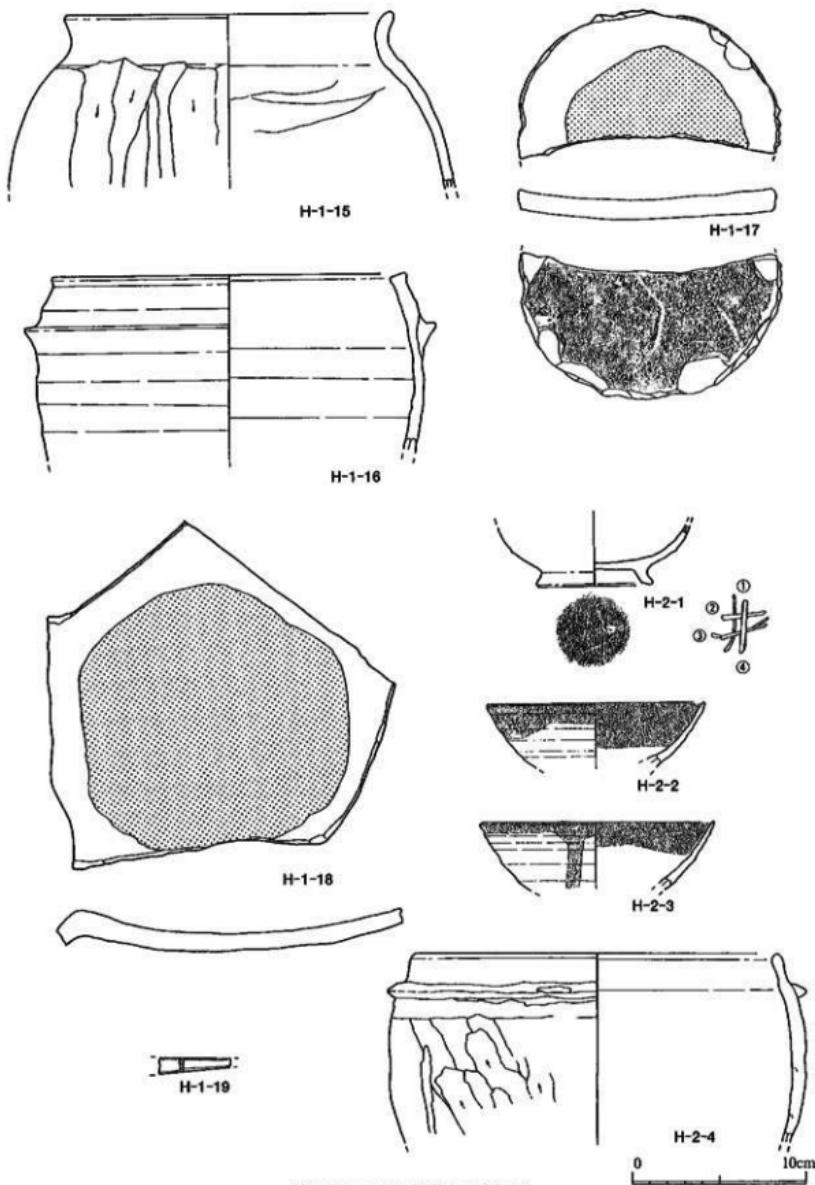
第48圖 B區北側道1・2號住居跡、41號土坑



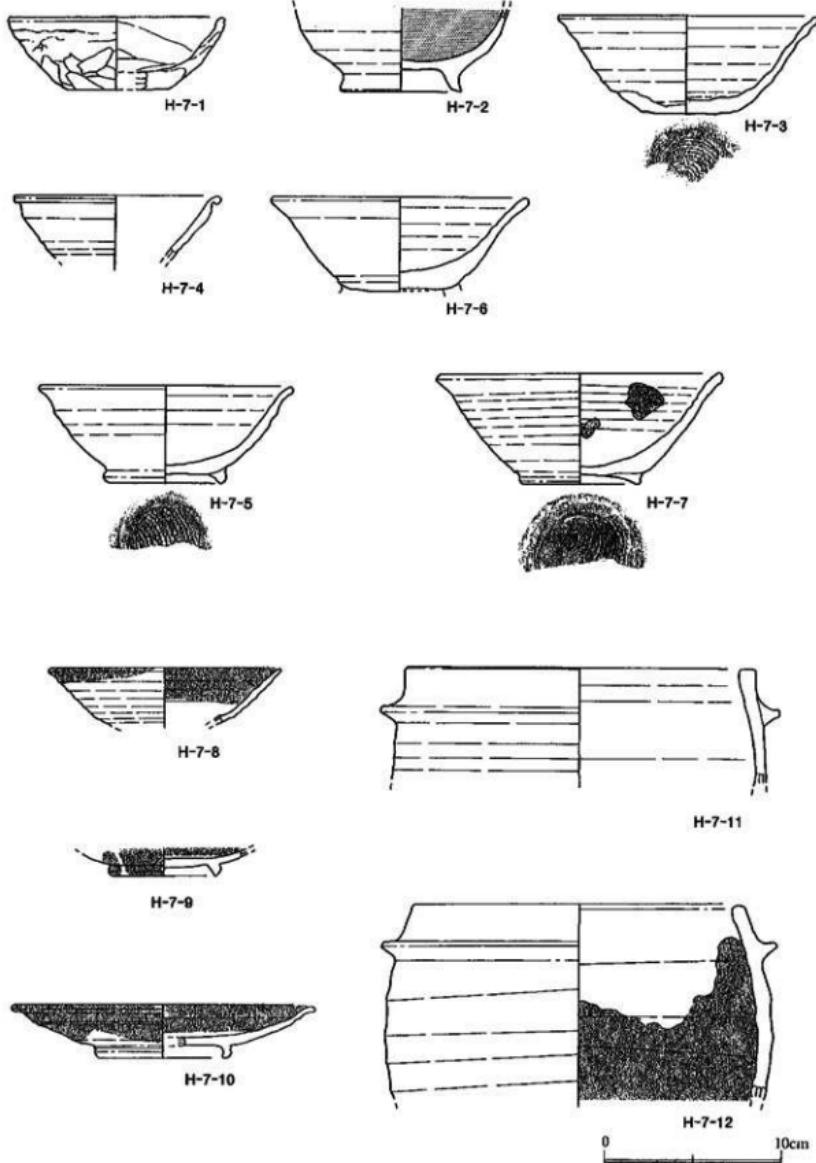
第49図 B区北側道7・8・10号住居跡



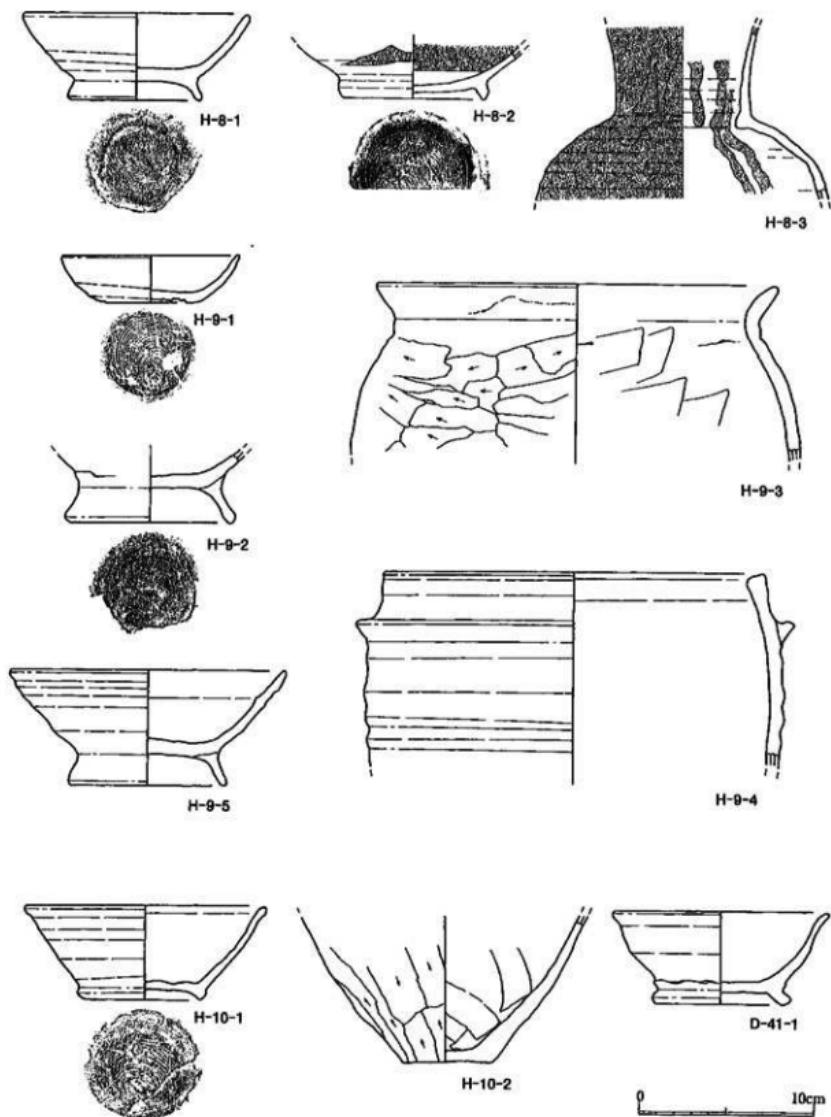
第50図 B区北側道出土遺物(1)



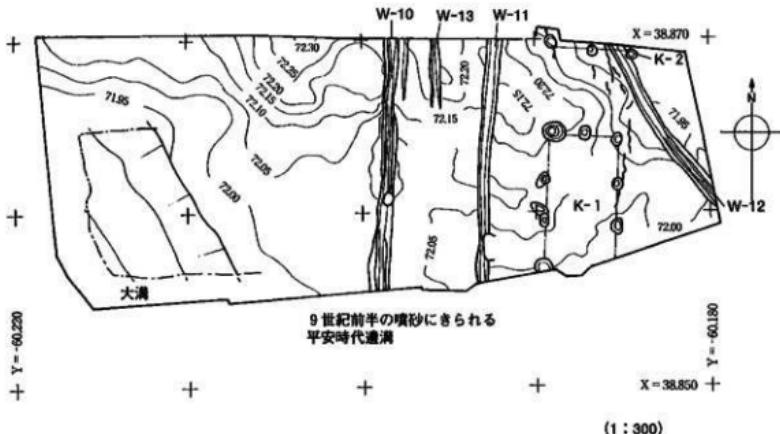
第51図 B区北側道出土遺物(2)



第52図 B区北側道出土遺物(3)



第53図 B区北側道出土遺物(4)



第54図 B区北側道全体図(2)

また、調査区西側においては大溝を検出した。

1号掘立柱建物跡

$X=38,860, Y=-60,190$ で検出されている。主軸はほぼ真北で、規模は3間×2間、桁行7.8m、梁行4.0mを測る。柱穴の距離は2.4~2.8m、柱穴の長径は約0.6~0.8mで、最大では1.2mを測る。柱痕は確認できなかった。確認面よりの深さ約0.5m~0.7mを測る。遺物は検出されていないが、弘仁九年(818年)の地震による砂脈との関係より、9世紀前半以前の所産と考えられる。

2号掘立柱建物跡

$X=38,860, Y=-60,180$ で検出されている。3基の柱穴の配列より想定したものであるが、その方向は1号掘立柱建物跡と一致している。規模は東西方向が2間幅で、2.0mの等間である。各柱穴の径は0.6~0.8m、確認面下の掘り込みの深さは0.4~0.5mを測る。

10号溝・11号溝(道路状遺構)

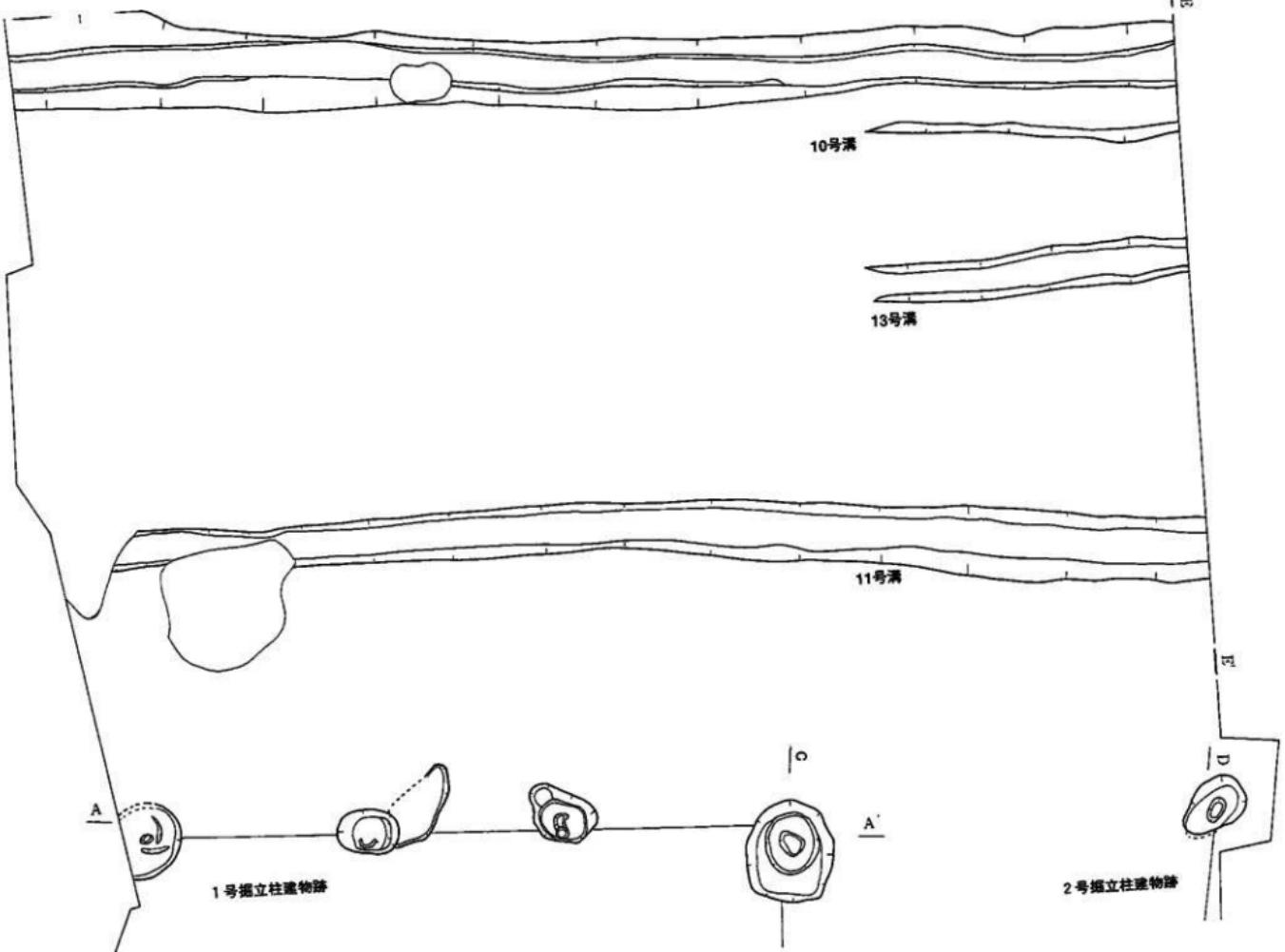
10・11号は共に $X=38,850 \sim 38,860, Y=-60,190$ において検出されている。2本の溝の走向は平行で、ほぼ真北から真南を指向する。検出長は共に約14mに渡り、調査区を南北に横断して調査区域の外へと延びている。両溝の断面形状は浅いU字状で、北側壁で観察される断面では、西側の溝に2回以上の改修が観察されるものの、東側では観察されない。心材間の距離は凡そ6mを測る。

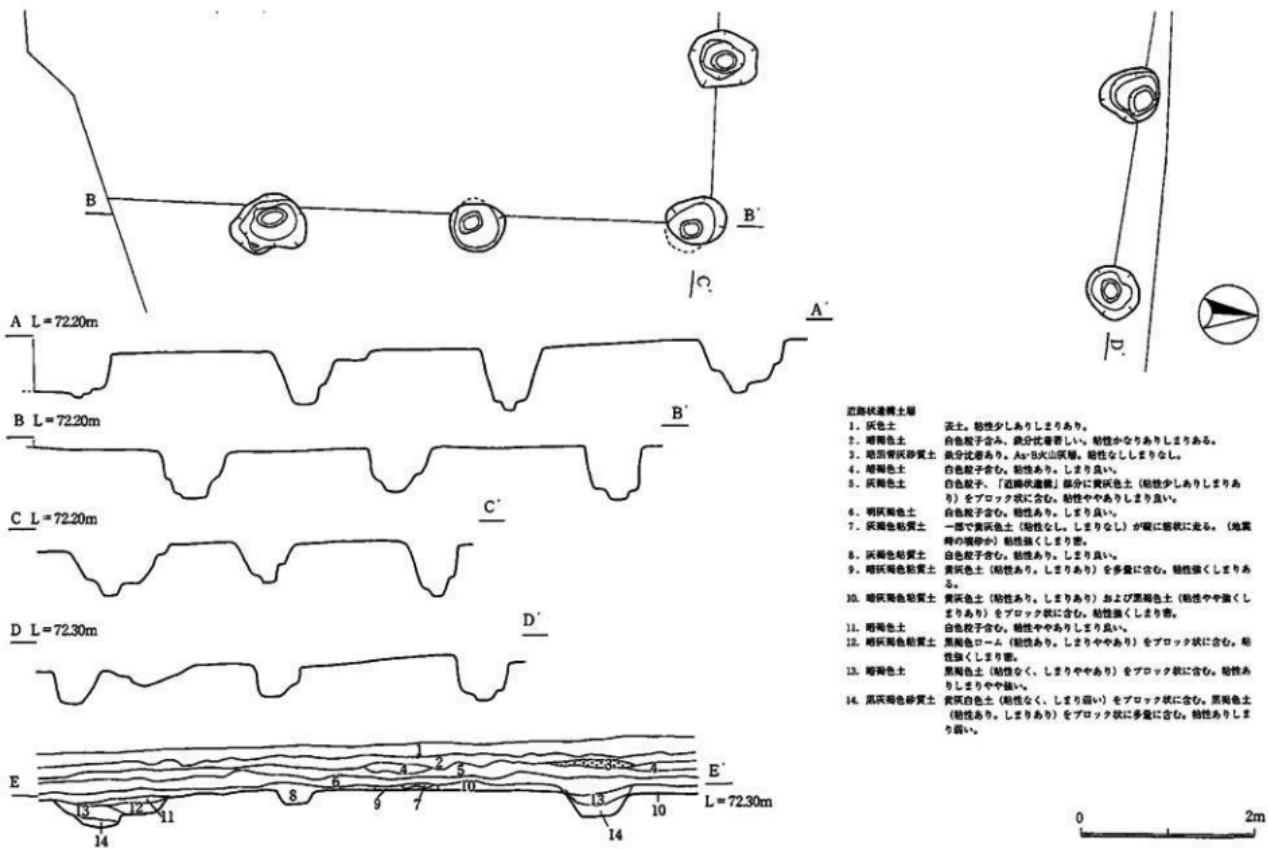
検出された状況より、この2条の溝は道路状遺構と想定された。路面にあたる両溝の間には平坦面が広がるが、同面に轍等の硬化面は検出されていない。

両溝からの出土遺物はないが、東側の側溝(11号溝)が1号住居跡に切られ、また西側の側溝(10号溝)が8号住居跡に切られる点、さらに、道路面において確認される砂脈(噴砂痕)との関係より本遺構は9世紀前半以前の構築と判断され、9世紀前半に発生したとされる洪水によってその機能を完全に停止したものと想定できる。

大溝

本遺構は調査区域の西端部で検出されている。A区の東側において検出された大溝と形状および覆土の堆





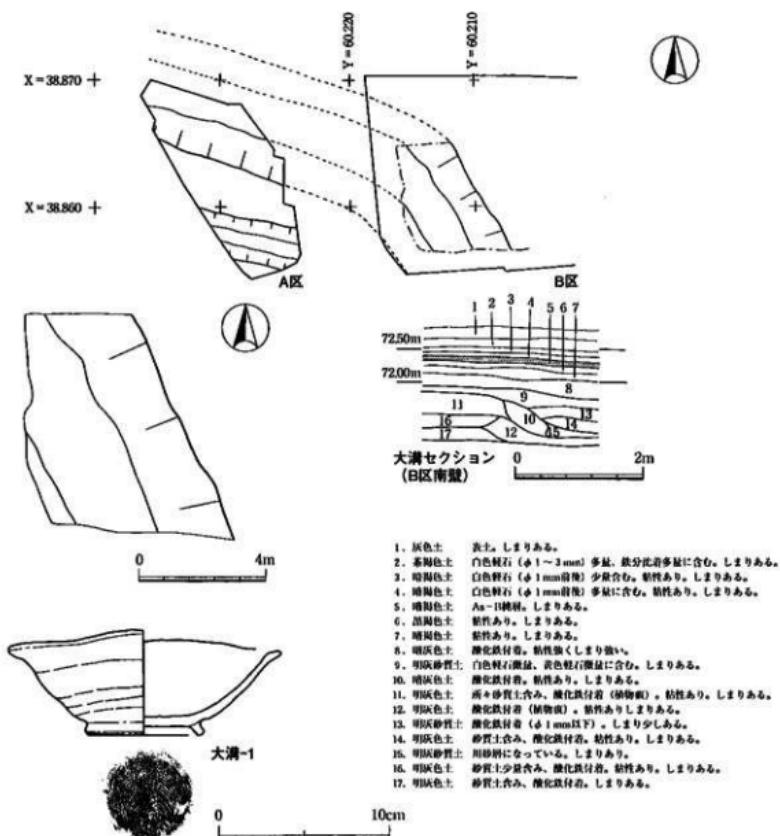
第55図 B区北側道1・2号掘立柱建物跡、10・11・13号溝 斜図11

VI 下増田熱波Ⅱ遺跡

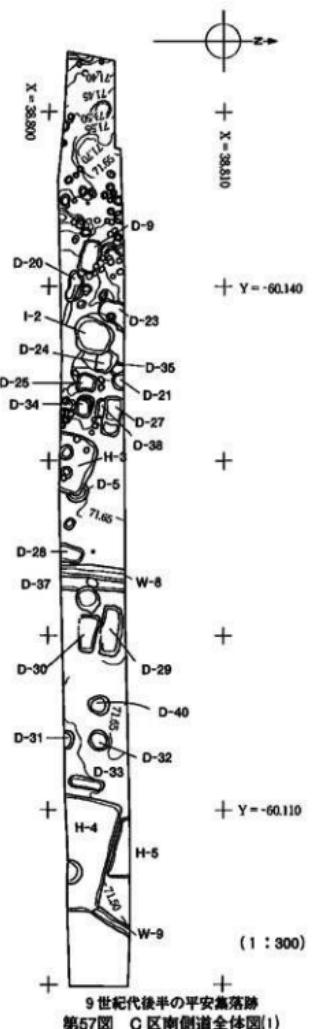
積状況より同一の遺構と判断される。部分的な調査ではあったが、その走向方向は北西から南東方向で大きく蛇行するものと想定される。幅は推定で8m、深さは1.25mを測る。

溝は浅間C軽石を混入する褐色粘質土層面を切って構築され、最終的に9世紀前半以降に埋没したと考えられるもので、その埋没状況は自然堆積が考えられる。

出土遺物には9世紀後半の須恵器坏の完形品が溝最下層付近にて出土している。



第56図 B区北側道大溝・同出土遺物



第3節 C区南側道

第1項 概要

本調査区においては、他の調査区同様、鍵層となる浅間B軽石層および9世紀前半の洪水層の確認を念頭におきながら調査をすすめていたが、浅間B軽石、洪水層の2つの鍵層はどちらかの原因でその堆積を確認することができなかった。

遺構はこれらの鍵層を検出する目的で徐々に掘り下げを進める段階で、標準堆積土層IX層前後で第1面が確認されている。検出された遺構・遺物はその特徴より9世紀後半代より中世にわたる集落と確認された。第1面の調査終了後、さらに確認面を掘り下げた結果、シルト層上面において方形周溝墓を確認するに至り、同面を第2面として調査を実施した。

第2項 9世紀代～中世

検出した遺構は、集落跡確認面で住居跡3軒、土坑21基、井戸跡2基、溝状遺構2条、ピット多数である。各遺構別の分布状況は調査範囲の制約のため明瞭ではないが、西寄りに偏在する傾向がある。

井戸跡

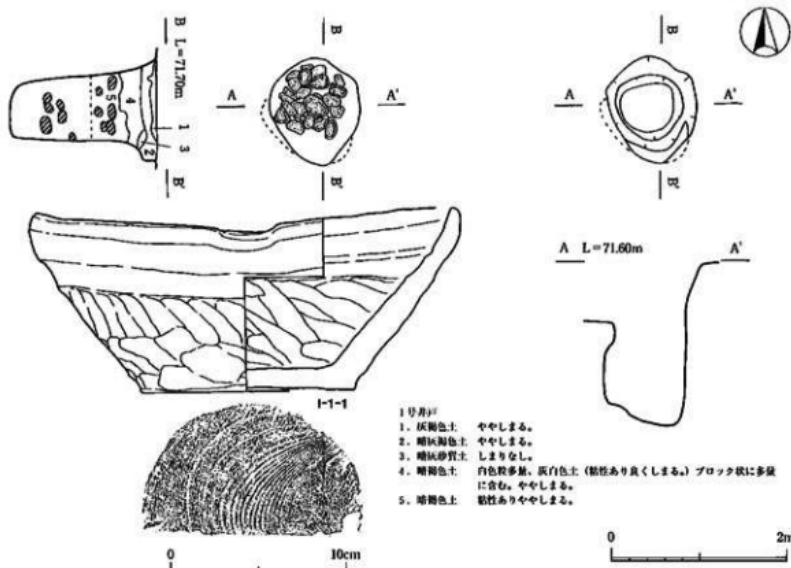
中世の遺構と判断されたものに2基の井戸がある。1号井戸は調査区の西端部に、また、2号井戸（36号土坑）は中央やや西寄りで検出されている。

1号井戸跡

本遺構はX=38,800、Y=-60,140で検出された。形状は平面形は不整円形、断面形は円筒状を呈する。規模は長径1.2m、確認面下の深さは約1.8mを測る。覆土は上層で自然堆積を示しているが、確認面下約70cmの深さにおいて、約20~30cmの円礫が大量に出土しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。埋没状況から判断して、石組みの井戸とは考えられない。本遺構の下層より方形周溝墓が検出されており、本遺構よりも古い。出土遺物には14世紀以降の須恵質の鉢1点が出土している。

2号井戸跡

本遺構はX=38,800、Y=-60,130において検出された。形状は平面形は円形で断面形は円筒状を呈する。規模は長径2.0m、確認面下の深さは約1.4mを測る。1号井戸同様に覆土は自然堆積で、確認面下約0.3mの深さにおいて、約20~30cmの円礫が大量に出土しており、人為的な埋め戻しが行われている。9世紀後半の遺物を出土した24号土坑と重複するものであるが、本遺構からの出土遺物はなく新旧関係は捉えられていない。形状および埋没状況より判断して、1号井戸同様に中世の所産と判断した。



第58図 C区南側道1号井戸・同出土遺物

住居跡

3軒の住居跡が検出されている。遺構はその他のものが西側に偏在する傾向にあるものの、住居跡は東側より検出されている。各住居跡の概要は以下の一覧表にまとめた

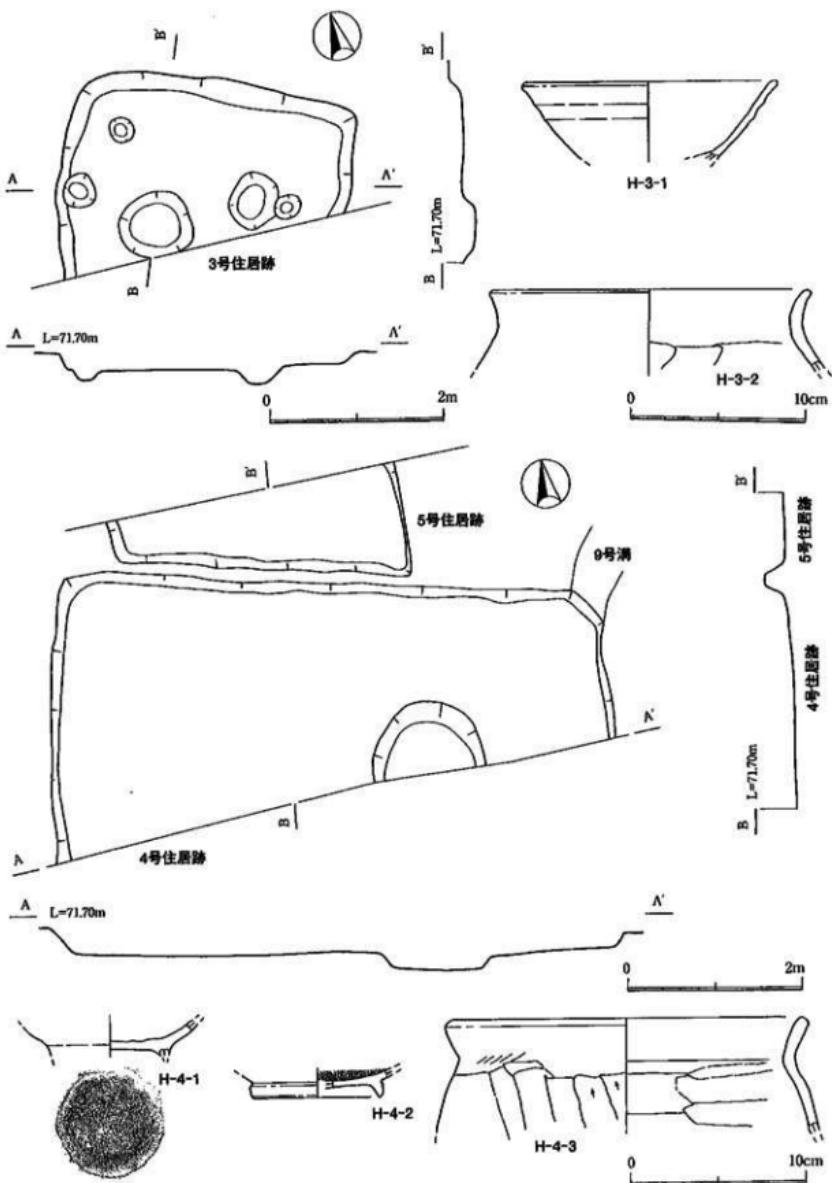
表10 C区南側道住居跡一覧

遺構番号	検出位置		規模 (m)		長軸	カマド	重複	出土遺物	時期
	X軸	Y軸	長軸	短軸					
3号住居	38,800	-60,120	3.0	—	N115°E	—	5号土坑より新	土師器壺・甕	10世紀後半 ～11世紀代
4号住居	38,800	-60,100	6.0	—	N100°E	—	9号溝より旧	土師器壺・甕、須恵器壺、灰釉陶器碗	10世紀後半 ～11世紀代
5号住居	38,800	-60,100	3.5	—	N100°E	—	なし	なし	不明

土坑

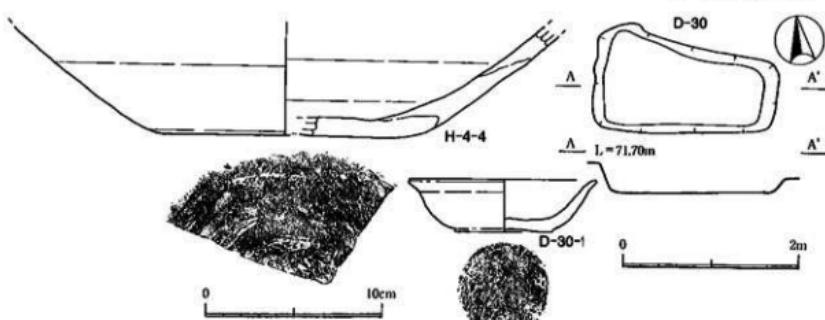
検出された土坑は20基である。X=38,800, Y=-60,130周辺に集中する傾向がある。平面形は円形・楕円形(5・21・31・32・35・37・40号)、もしくは隅丸方形(19・20・22・23・24・25・27・28・29・30・33・34・38号)を呈する。このうち、隅丸方形を呈するものは長軸を東西若しくは南北方向にとるものが多く、規則性が感じられる。出土遺物はほとんどみられず、資料が少ないために性格は不明である。

土師器の壺を出土した30号土坑はX=38,800, Y=-60,120で検出されている。遺物より9世紀後半の所産と考えられる。



第59図 C区南側道3・4・5号住居跡、同出土遺物

VI 下増田越渡Ⅳ道路



第60図 4号住居跡出土遺物、30号土坑、同出土遺物

第3項 シルト層上面

1号方形周溝墓（周溝の一部）

本遺構はX=38,800, Y=-60,140において検出されたものである。

9世紀代の集落確認調査後に実施した、シルト層上面で確認した。

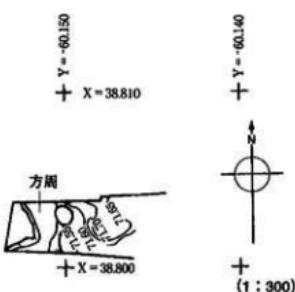
平面形状はL字に曲がる溝であるが、隣接する本線部分の県埋蔵文化財調査事業団調査区域において（未報告）、事前に検出されていた遺構である。呼称を方形周溝墓としたのも上記の理由からで、同調査団より調査時に御指導を賜っている。

本調査区において確認できたのは周溝部分の隅角である。周溝の幅は3.1~1.3m、確認面下の深さは0.7mを測る。

覆土は自然埋没と判断されるもので、中層に灰白色のシルト質層がレンズ状に観察され、分析には至っていないがIIr-FAの可能性がある。

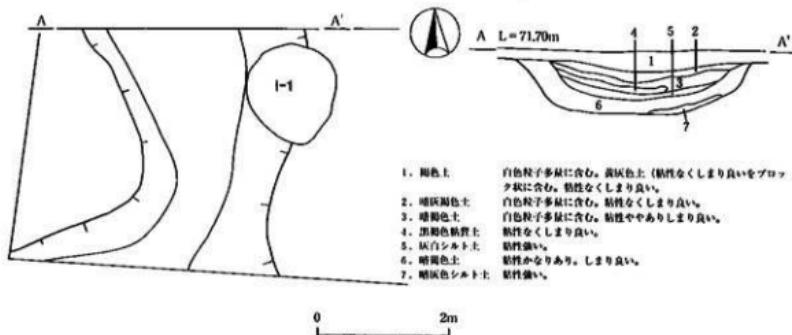
溝の底部はコーナー付近から南西側で、北側に比べやや浅くなる傾向が見られる。

遺物は検出されていない。古墳時代前期から中期の所産であろうか。

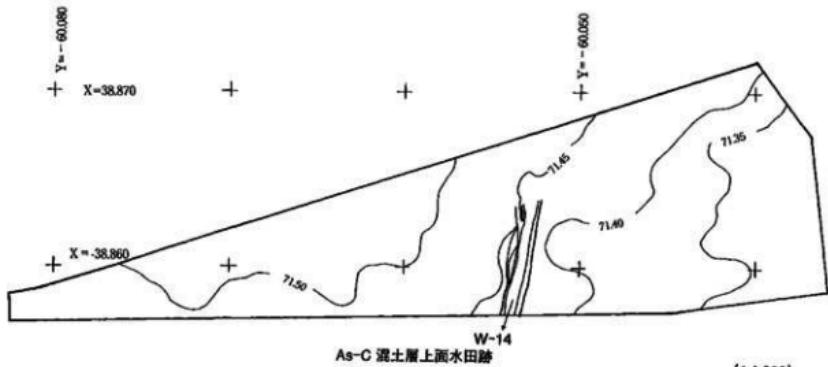
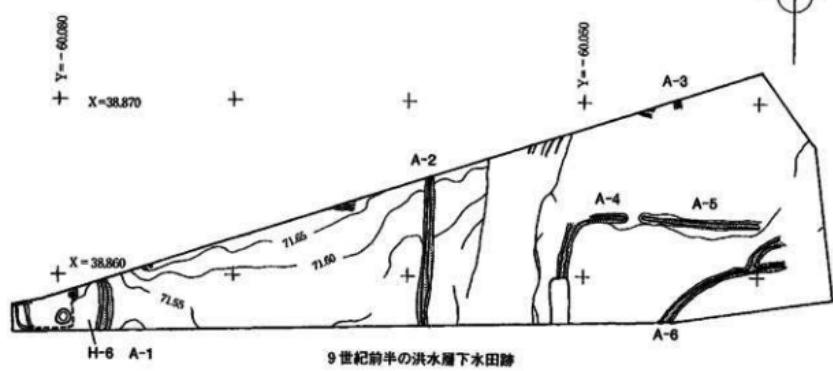
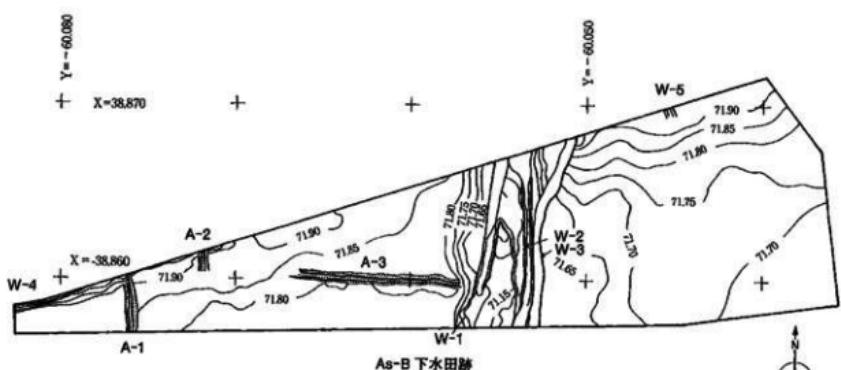


シルト層上面（1号方形周溝墓の周溝部分）

第61図 C区南側道全体図(2)



第62図 C区南側道 1号方形周溝墓



(1 : 300)

第63図 D区北側道全体図

第4節 D区北側道

本調査において確認された文化層は3面（4期）である。

第1面浅間B軽石層下においては水田跡および畦畔を検出した。水田面では人や動物の足跡は検出されなかった。畦畔の走向は、東西および南北方向である。他に溝5条を検出した。構築の時期は、埋没土の上層に浅間B軽石が堆積している点より浅間B軽石層下以前の所産と考えられる。

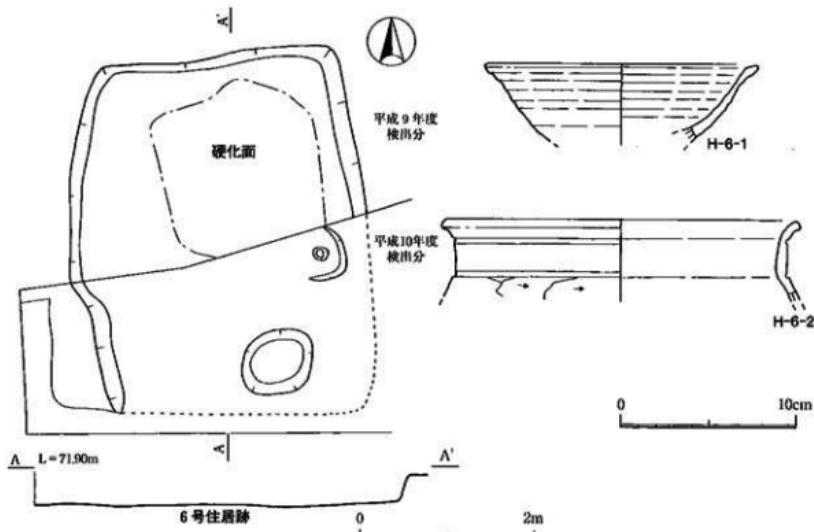
最も大きい2号溝については、幅約2m、確認面よりの深さ約55cmを測る。断面形状は逆台形状を呈する。その性格は水田耕作用用水路としての役割の他、東西に走向する畦畔と直交する点などにより、畦畔とともに水田区画の役割を担っていた可能性も考えられる。

第2面は9世紀前半に生じたとされる洪水層下の水田跡である。6条の畦畔を検出している。畦畔は南北方向および東西方向に構築されている。また、取水施設として畦畔の間に水口が検出されている。

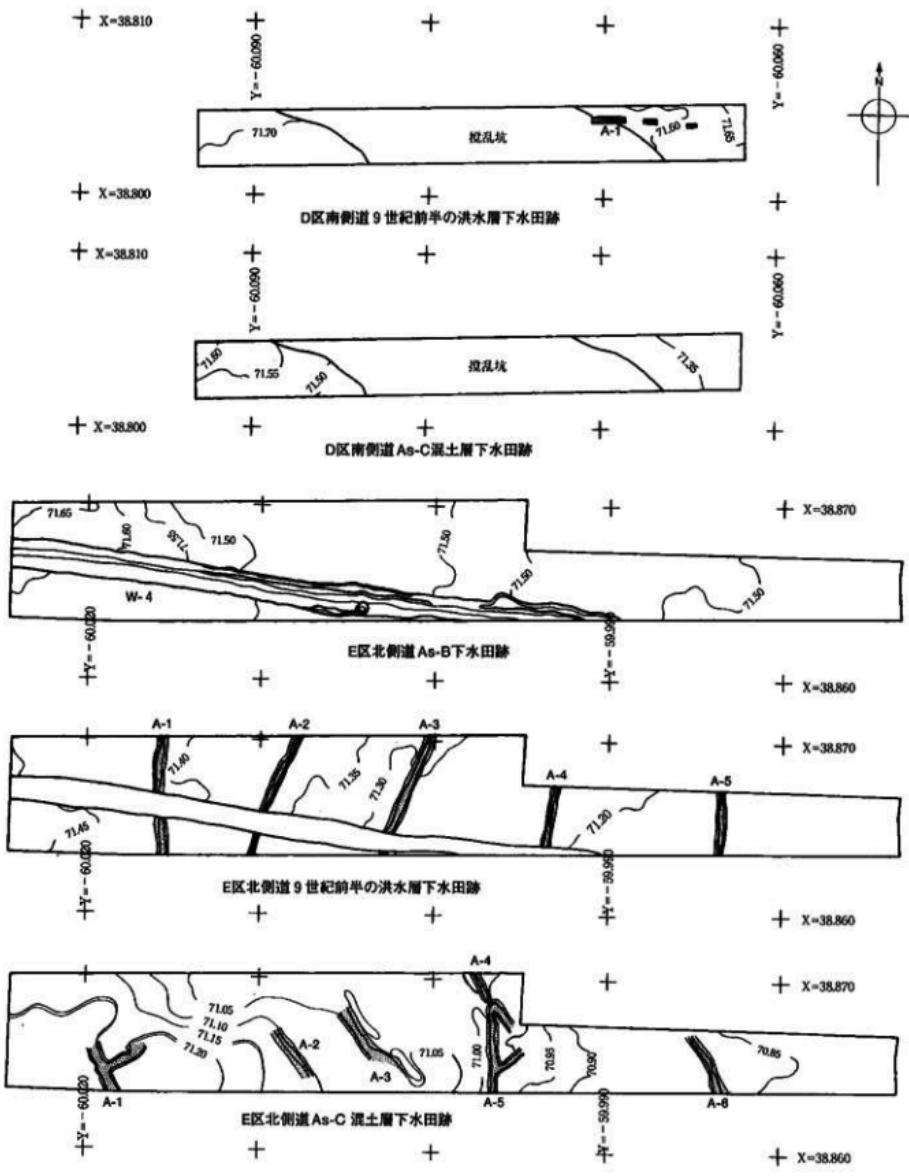
尚、調査区西境付近で検出した6号住居跡は平成9年度調査の18号住居跡である。遺物としては9世紀後半以降の遺物が出土しており、9世紀前半の洪水以降に構築された遺構と判断される。したがって、本文化層よりも時期が新しくなる。

さらに、この水田面では確認されていないが、弘仁九年の地震に伴うとされる噴砂跡が水田面の直下にて広範囲に確認された。したがって、噴砂の発生より洪水の発生までの間には若干の時間差が想定できる。

第3面の浅間C軽石混土層上面において水田跡を検出した。しかし、水田跡の遺存状態は良好ではなく、この時期の特徴である、小区画の畦畔は検出されなかった。他に溝を1条検出している。南北方向に構築されている。



第64図 D区北側道 6号住居跡・同出土遺物



第65図 D区南側道・E区北側道全体図

(1 : 300)

第5節 D区南側道

中央部分は北西方向から南東方向に幅15m程の搅乱坑が斜方向に縦断している。遺構検出が可能であったのは、調査区の東西両端部である。

本調査区において確認された文化層は2面である。

第1面は9世紀前半とされる洪水層下水田跡である。この面での水田跡の遺存状態は良好とはいえない、東西方向に断続的に延びる畦畔1条を検出しているのみである。遺物は出土しなかった。

第2面は浅間C混土層下で水田跡を検出した。しかし水田跡の遺存状態は良好でなく、畦畔は確認できなかった。やはり遺物は出土していない。

第6節 E区北側道

本調査区において確認された文化層は3面である。

第1面浅間B軽石層下では水田跡を検出した。畦畔は確認できなかったが、溝を1条検出した。走向は西北西で直線状に伸びている。規模は上端幅が1.3~2.1m、下端幅0.3~0.6m、確認面よりの深さ40~55cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。

第2面9世紀前半洪水層下では水田跡および畦畔5条を検出した。この畦畔の走向はいずれも南北方向で直線状に、さらに8~10mの等間隔を保って構築されており、規則性がうかがわれる。

第3面浅間C混土層下では水田跡および畦畔6条を検出した。いずれも断片的ではあるが小規模畦畔という、この時代の畦畔の特徴の一端を表しているといえる。

なお、本調査区において出土した遺物は、土師器片等である。

第7節 G区北側道

本調査区において確認された文化層は4面である。

第1面が浅間B軽石混土層に埋没した畠跡、2面がHr-FAに埋没した水田跡、3面が浅間C軽石混土層上水田跡、4面が浅間C軽石混土層下水田跡である。

第1面の調査区中央付近で浅間B軽石層下畠跡を検出した。しかし、後世の搅乱の影響を被ったためか畠の部分は削平されており、全体的に遺存状況は良好とはいえない。そのため、サクの掘り込みは深いところで20cm程度、浅い所で5cm程度である。幅は約30cm測る。

第2面ではHr-FA層下において水田跡を検出した。直上にはFA層が層厚3cm程堆積しており、調査区中央部にすすむにつれて残存状態が良好であった。畦畔は北東~南西方向に構築されているを確認した。幅は約1m、高まりは約6cmを測る。しかし、東側においては後世の耕作によるものと考えられる削平の為に遺存状況は良好ではなかった。残存する水田面の標高は東部71.15m~西部70.85mで、地形的には大間々扇状地の傾斜方向と一致する。水田面では、水路および水路等取水に関する施設は検出されず、人の足跡や耕作痕も確認できなかった。また、水田に伴う遺物も検出されなかった。

第3面の浅間C軽石混土層上面では水田跡を検出した。ほかの文化層と同様、調査区中央部分では遺存状況が比較的良好であった。しかし、水田面は起伏が激しく後世の耕作の影響を受けていたためか畦畔や人の足跡、耕痕跡は確認できなかった。また、調査区北側と東側では後世の削平を受けていたためか、水田跡の遺存状況は良好とはいえない。残存する水田面の標高は、北西70.95m~南東70.70mであり、15cm

程の高低差が確認された。遺物については土器片が少量出土している。

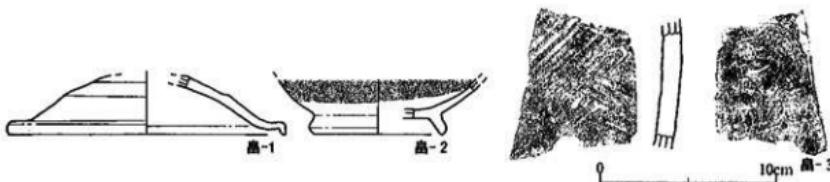
第4面の浅間C軽石混土層下面において検出された水田跡は、今回の調査を行った中で、最も古い時期にあたる水田である。調査区では浅間C軽石の純層は確認できず、層厚約10cmのC軽石混土層に埋没した状況で水田跡が検出された。調査区のはば中央を東西に走る形で大溝（15号溝）が検出されたが、これが水田跡を破壊していたため、検出面積は調査面積全体の2/3程度に止まった。

調査区全体を概観すると、水田の遺存状況の差が明瞭である。北側では、東西および南北方向とともに畦畔が構築されていることが確認され、古墳時代に代表されるような小区画水田が連続して確認されている。畦畔の遺存状況は南北方向は良好で平均して6~7cm、中には10cmをこえる高まりも存在する。ただし、東西方向のものは確認されてはいるものの、ほとんど平坦に近い状態で残りの良いところでも2cm程度であり、場所によっては途中で消滅してしまう部分も見受けられた。

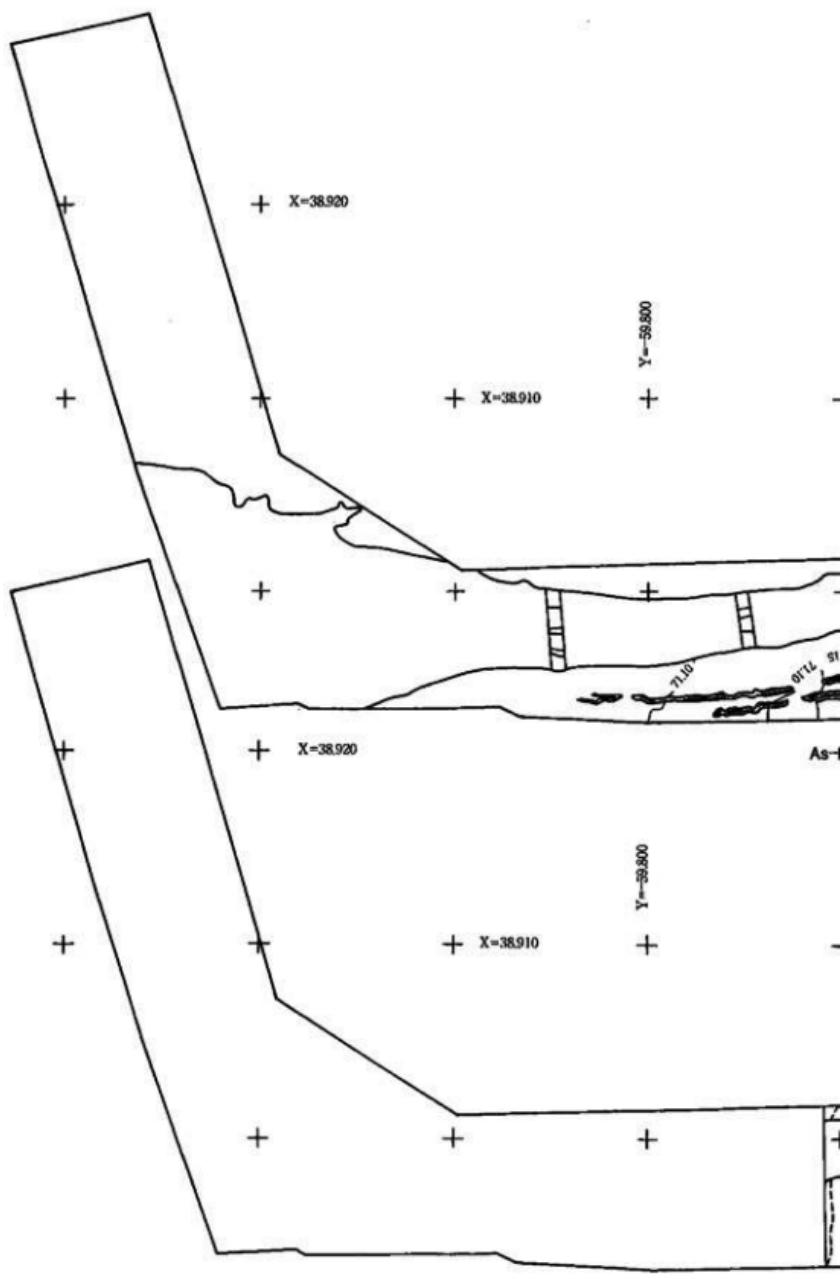
残存する畦畔の幅は比較的狭く大半が40cmを前後する範囲内に収まる。また、調査区の中央にすすむほど大化する傾向がみられ、最大で約1mに達しようとするものも確認されている。しかし、畦畔自体が調査区の中で、前述の大溝に切られたり、調査区外にのびているものや、途切れていたり完結していないために全貌を明らかにできず、したがって小区画の個数や面積を把握するには至らなかった。また、水田面において耕作を行ったとされる起伏を確認したが、足跡等は検出されなかった。残存する水田面の標高は北西70.90m~南東70.45mで、45cm程度の高低差が認められたが、これは地形的に大間々扇状地扇端部分にあたる為の自然傾斜によると考えられる。水田面では水口および水路等取水に関する施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代と考えられる瓶底部が検出されている。

以上、遺存状況が良好であった調査区北側とは対照的に調査区東側においては後世の搅乱によってほとんど消滅している状態であった。



第66図 G区北側道出土遺物



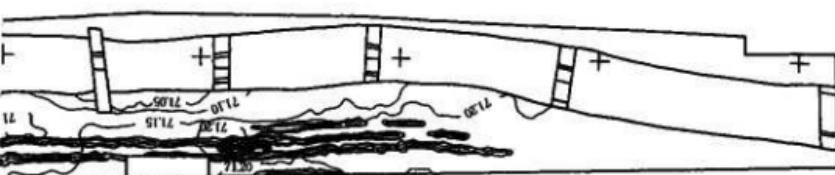
Hr - FA

第67図 G区北側



Y=59.750

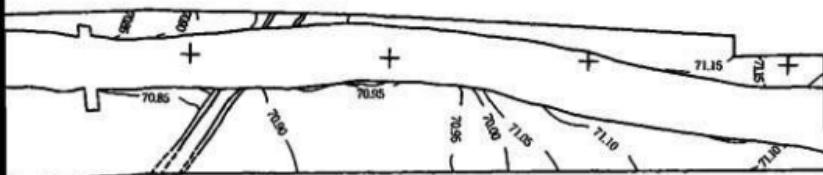
+ + + + +



8 畦跡

Y=59.750

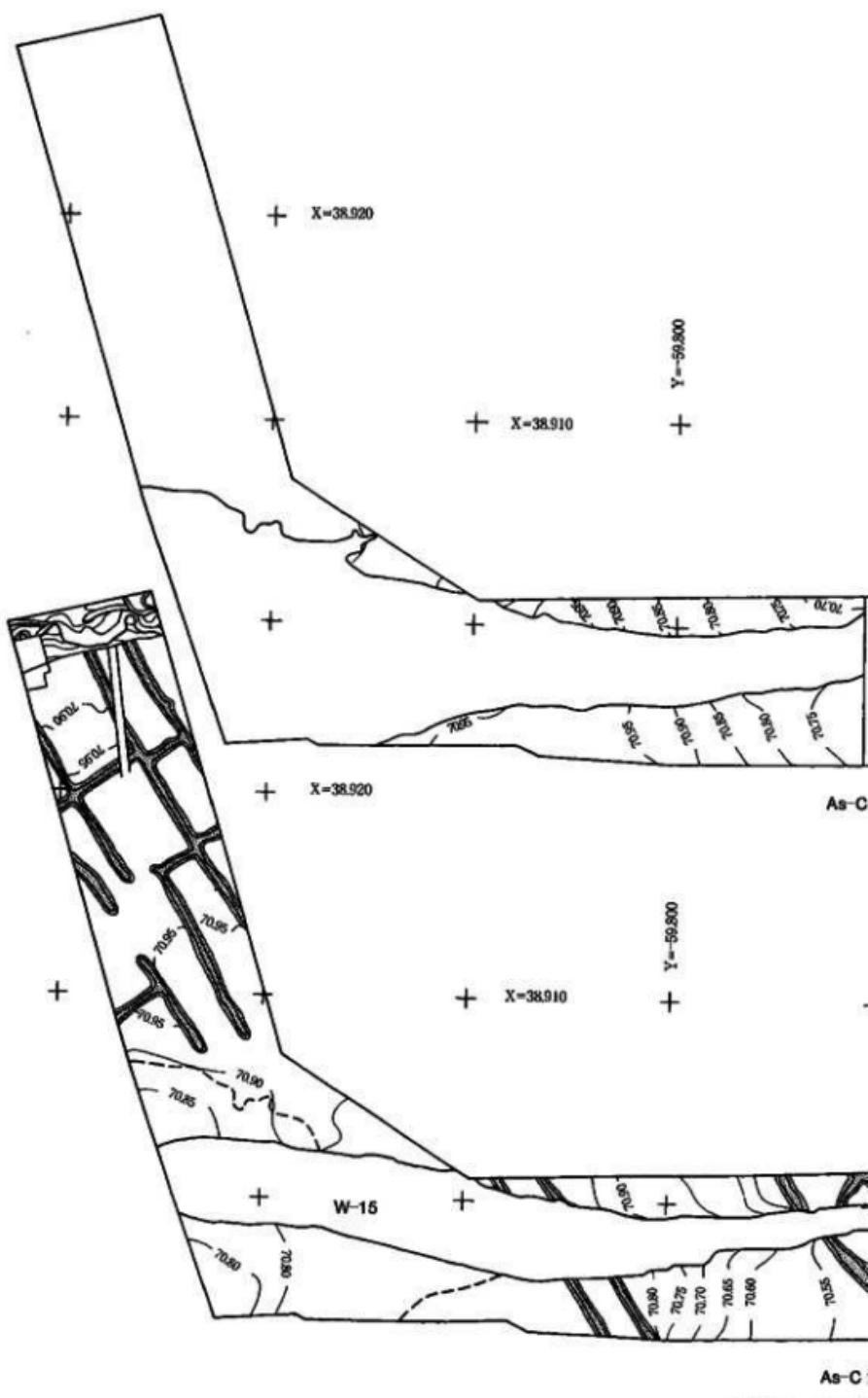
+ + + +



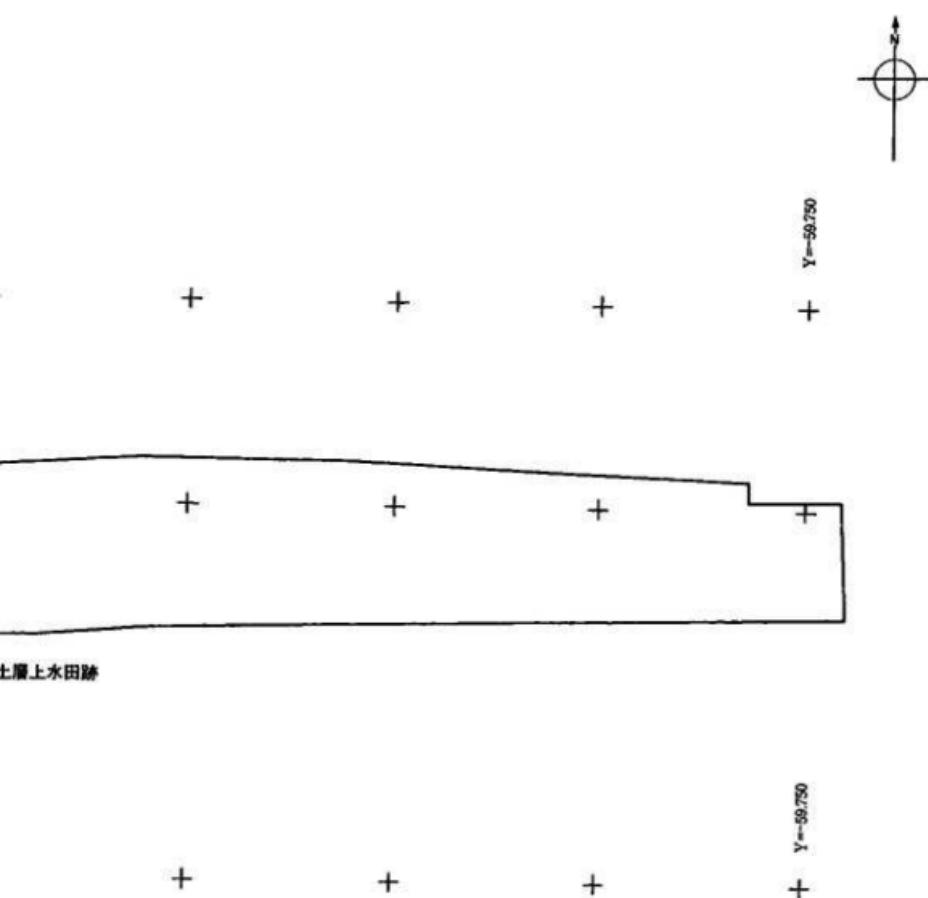
畠下水田跡

(1 : 300)

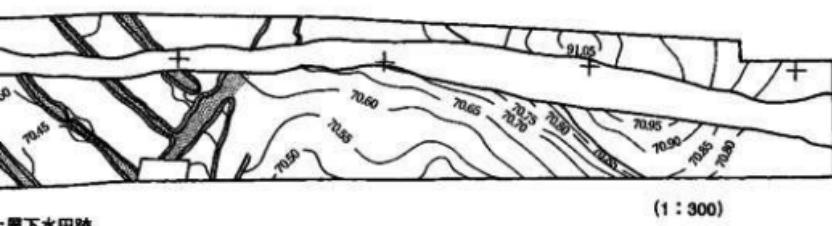
全体図(1) 折図12



第68図 G区北

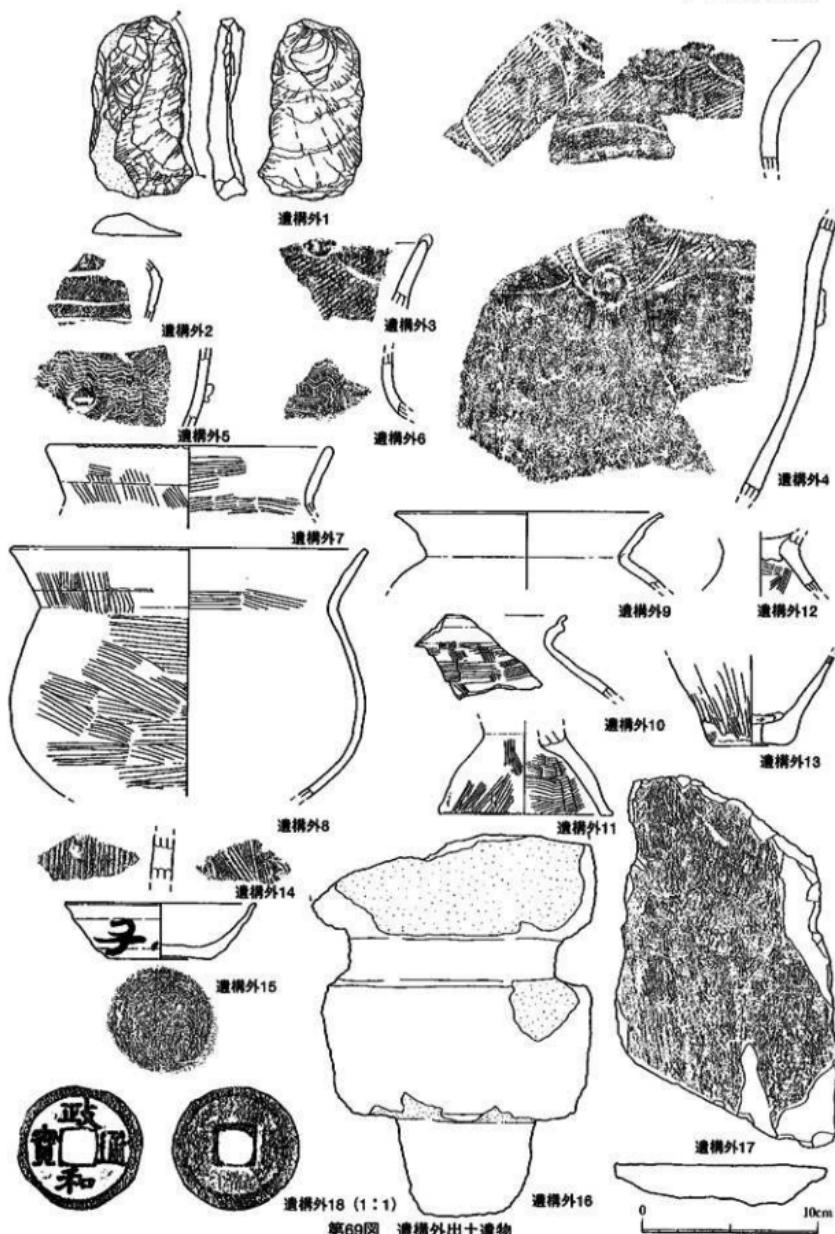


上層上水田跡



上層下水田跡

全體圖(2) 折圖13



第5章 総まとめ

今回の調査は、A・B・D・E・G区北側道およびC・D区南側道の「合計」7地区にわたる調査である。調査にあたっては、平成9年度調査および過去の周辺における調査成果に基づき、主としてAs-B層下、9世紀前半に生じたとされる洪水層下、Hr-FAおよびAs-C混土層下等の文化層を想定した。しかし実際、調査の過程において地区によっては指標となるテフラが削平をうけ面的な広がりとして確認できなかったために、当初の予想とは異なる部分もあった。ここでは調査の成果について代表的なものを概略してまとめたい。

最も注目すべき遺構は、B区北側道において9世紀前半以前の文化面より検出された、掘立柱建物跡および道路状遺構である。この二つの遺構はともに10世紀代と考えられる住居跡に切られている点や、特に掘立柱建物跡については柱穴が弘仁九年（818年）に発生した地震に伴う砂膜（噴砂痕）に切られている点等より構築された時期は9世紀前半以前と考えられる。さらに、この二つの遺構は、恐らくほぼ時期を同じくして営まれ、何らかの関連性をもつて機能していたと推測される。今回の調査は一つの調査区の面積が狭いため得られる資料が極めて限定され、現状はまさに「点」である感は否めない。また、仮に道路であるとするならば必然的に目的地やそこへ至るルートが問題となってくる。したがって、本遺跡の周辺環境、遺構の位置する延長線上に存在していた施設、道路状遺構や掘立柱建物跡が構築された当時の下増田地域の状況等、より多角的に検討する必要がある。そうした意味においても今後の周辺地域における発掘調査の成果に大いに期待したい。

また、B区北側道で9世紀後半から11世紀にかけての集落跡が検出され、E区北側道及びG区北側道においてAs-C混土層下面より古墳時代の小区画畦畔を伴う水田跡を検出した。尚、広範囲な地域において平安時代末期のAs-B層下面水田跡を検出したが、これは荒砥川左岸の微高地に集落を、そして付近の後背湿地に水田等生産域を求めるという、広瀬川低地帯における地形を生かした土地利用の特徴を示す例といえよう。また、遺物についても、破片ながら縄文時代晚期安行3b～3c式に比定される土器を始め、古墳時代前期の石田川式土器から10世紀にかけての土師器、須恵器が出土しており、この地域が長い間にわたって人々が生活を営んできた土地であることを示すものといえる。

表11 遺構一覧表

時代	遺構名	A区北側道	B区北側道	C区南側道	D区北側道	D区南側道	E区北側道	G区北側道
古 墳 時 代	住居跡	—	—	—	—	—	—	—
	掘立柱建物跡	—	—	—	—	—	—	—
	土坑	—	—	—	—	—	—	—
	井戸跡	—	—	—	—	—	—	—
	溝	2	—	—	1	—	—	1
	水田跡	—	—	—	As-C混土層上層	As-C混土層下	As-C混土層下	Hr-FA下
平 安 時 代	万形周溝墓	—	—	1	—	—	—	—
	住居跡	—	6	3	1	—	—	—
	掘立柱建物跡	—	2	—	—	—	—	—
	土坑	—	9	20	—	—	—	—
	井戸跡	—	—	—	—	—	—	—
	溝	3	7	2	5	—	1	1
中 近 世	水田跡	—	—	—	洪水層下・ As-B層下	洪水層下	洪水層下	洪水層下 As-B層下
	高塚	—	—	1	—	—	—	As-B層下
	前塚	—	—	—	—	—	—	—
	土坑	—	14	—	—	—	—	—
	佛	2	—	—	—	—	—	1
	水田跡	—	—	—	—	—	—	—
	井戸跡	—	—	—	2	—	—	—

表12 B地区遺物觀察表(1)

遺物 番号	器種	口径・底径 厚さ(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成④材質	出土位置
1 号 住 居 場 跡	須恵器 环	3.1 5.4	1/2	口縁～体部は直線的に開き、底部切り離しは回転糸切りである。	①石英・長石・角閃石 ②灰褐色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	(11.4) 3.2 5.8	1/2	口縁～体部は内湾気味に開き、底部切り離しは回転糸切りである。	①石英・長石・角閃石 ②にぶい赤橙色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	10.7 3.5 5.8	完形	口径10cm前後の小型环である。口縁～体部は内反気味に丸みを持つ。内体部に粉痕あり。底部切り離しは回転糸切り無調整である。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②にぶい赤橙色 ③未還元	床着
	須恵器 耳皿	9.3 4.6 3.0	口縁部～ 底部欠損	無高台の両端を押出す耳皿である。底部切り離しは右回転糸切り無調整である。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②赤橙色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	5.4	体部～ 底部	体部は内湾気味に開き、底部の切り離しは右回転糸切り無調整である。	①細かな石英・長石粒 ②灰色 ③還元	埋没土
	土師器 环	11.7 6.2 5.2	1/2	口縁～体部は内湾し瘤部で外反する。高台は小さく短い。内部は内凹となるが、へラきの範囲は口縁内部周縁にとどまり、残る内部には十字状・瘤状姿に略文を施す。回転糸切り。	①石英・長石・角閃石 ②灰褐色 ③酸化	埋没土
	須恵器 环	12.0 5.1 5.8	1/2	口縁～体部は内湾し瘤部で外反する。高台は小さく短い。内部は内凹となり全面にへラきを施す。ロクロ成形。	①石英・長石・角閃石 ②灰黄褐色 ③未還元	床着
	須恵器 环	13.6 8.3 5.2	1/3	口縁～体部は直線的に開き、高台は1.5cm前後である。底部切り離しは回転糸切り。	①石英・長石・角閃石 ②灰黄褐色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	14.2 9.5 6.7	完形	口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。底部切り離しは回転糸切り。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②橙色 ③未還元	床着
	土師器 环	14.7 8.4 7.0	完形	口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②橙色 ③酸化	埋没土
2 号 住 居 場 跡	土師器 环	14.9 8.2 6.6	完形	口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②浅黄色 ③酸化	床着
	灰釉 甕	13.3 6.6 2.8	2/3	口縁～体部は大きく開き、瘤部でさらに外反する。高台は三日月状を呈する。釉は漬け掛けで体部中位まで、底部までは及ばない。	①長石 ②灰白色 ③還元	埋没土
	灰釉 甕	14.6 7.6 5.0	完形	口縁～体部は内反気味に開き、高台は通常の形態である。釉は漬け掛けで口縁部や内外周縁にとどまる。底部は回転糸切りである。	①長石 ②灰白色 ③還元 ②浅黄色 ③酸化	床着
	土師器 甕	(19.0).....	口縁部～ 副部	口縁部は「コの字」状に屈曲する。厚さは0.6cmである。外：横位ヘラナダ内：横位ヘラ削り。	①石英・長石・角閃石・褐色 ②褐色 ③酸化	埋没土
	土師器 甕	(18.6).....	口縁部～ 副部	口縁部は短く内湾気味に立ち上がる。外：横位ヘラ削り。内：横位ヘラナダ	①石英・長石・角閃石・褐色 ②黄褐色 ③酸化	埋没土
	須恵器 羽釜	(20.0).....	口縁部～ 副部	口縁部は内傾し、瘤部は面をなす。瘤部は張りがないタイプ。ロクロ成形。	①石英・長石 ②浅黄色 ③酸化	埋没土
	転用 甕	幅14.9 厚さ1.2	1/2	須恵器甕の副部片を転用した腹である。副部片を打ち焼き内側に仕上げている。内面は光沢が見えるほど使用されている。	①長石・片岩粒 ②青灰色 ③還元	埋没土
	転用 甕	幅19.5 厚さ1.0	完形	須恵器甕の頭～副部片を転用した腹である。内面は使用痕が観察される。	①石英・長石・片岩粒 ②灰色 ③還元	床着
	鉄刀子	残長4.0 幅0.8	柄部片	断面連合形状の刀子に柄部がある。		埋没土
	土師器 环 6.4	体部～ 底部	体部は内湾気味に立ち上がり、高台は面をなす。外底部に縦刻文字「井」がある。	①石英・長石・片岩粒 ②灰黄色 ③酸化	埋没土
7 号 住 居 場 跡	灰釉 甕	(12.5).....	口縁部～ 体部	口縁～体部は内湾気味に立ち上がる。釉は漬け掛けで内外底部までは及ばない。	①黑色・長石粒 ②灰色 ③還元	埋没土
	灰釉 甕	(13.4).....	口縁部～ 体部	口縁～体部は内湾気味に立ち上がる。釉は漬け掛けで内外底部までは及ばない。	①長石粒 ②灰色 ③還元	埋没土
	須恵器 羽釜	(20.8).....	口縁部～ 副部	口縁～頭部は膨らみ内湾し、瘤部は面をなさない。頭部は幅なくなる。外：横位ヘラ削り(ヘラナダ？)。	①石英・長石・角閃石 ②灰色 ③還元	埋没土
	土師器 环	(12.3) (6.0) 4.1	1/4	口縁～体部は内湾し、上位でさらに瘤やかに屈曲する非ロクロ土器である。内：ヘラナダ、外：体部上位～底部手持ちヘラ削り。	①石英・長石・角閃石 ②にぶい褐色 ③酸化	埋没土
7 号 分 住 居 場 跡	土師器 环 7.0	体部～ 底部	体部は張りのある瘤から内湾気味に立ち上がる。内部は内凹(余体にへラ削り)となる。	①石英・長石・角閃石 ②青灰色 ③酸化	埋没土

表13 B地区遺物観察表(2)

遺物番号	器種	LH径・底径 高さ(cm)	遺存率	器形及び成・変形の特徴	①粘土②赤陶③焼成④材質	出土位置
7号住居跡	須恵器 环	14.9 (5.5)	高台欠損	口縁一部は緩く内反気味に開く。底部の切り離しは回転系切りである。	①石英・長石・角閃石粒 ②灰褐色 ③泥元	埋没土
	須恵器 环	(12.0)	口縁部 一全体	口縁部は開き、端部でさらに緩く折れ曲がる。	①石英・長石粒 ②灰褐色	埋没土
	須恵器 环	(14.4) 7.0 5.6	1/2	口縁一部は緩やかに内汚し、端部でさらに外反する。	①石英・長石粒 ②灰褐色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	(14.6) (5.3)	2/3	口縁一部は緩やかに内汚し、端部でさらに外反する。高台が付損した後も崩落して使用している。	①長石・石英・角閃石粒 ②灰褐色 ③未還元	床着
	須恵器 环	(16.0) 6.9 6.3	1/2	口縁一部は緩やかに内汚し、端部でさらに外反する。内部には部分的に擦が付着し、灯明用に使用されている。ロクロ成形。	①石英・長石粒 ②灰褐色 ③未還元	埋没土
	灰陶 施	(13.3) (3.3)	口縁部 1/2	口縁一部は緩やかに内汚し、端部でさらに外反する。内部には部分的に擦が付着し、灯明用に使用されている。ロクロ成形。	①長石粒 ②灰褐色 ③還元	埋没土
	灰陶 施 (1.5)	底部	高台は三日月状を呈し、内外の物は自然粘である。	①長石粒 ②灰褐色 ③還元	埋没土
	灰陶 施	(17.6) 7.2 3.1	1/3	口縁部は端部でさらに外反する。高台は断面三日月状を呈する。	①長石粒 ②灰白色 ③未還元	埋没土
	須恵器 羽釜 蓋	(20.0)	口縁部 一側部	口縁部は内側し端部は面をなし、胸部は張りがない。ロクロ成形。	①石英・長石・結晶片岩粒 ②灰白色 ③還元	埋没土
	須恵器 羽釜 蓋	(18.8)	1/3	口縁部は内側し端部は面をなし、胸部は張りがない。ロクロ成形。	①石英・長石・結晶片岩粒 ②灰白色 ③還元	床着
	須恵器 环	(12.7) (8.0) 5.0	1/2	口縁一部は内汚し端部に至る。底部の切り離しは回転系切りである。	①長石・石英・角閃石粒 ②灰褐色 ③還元	埋没土
8号住居跡	灰陶 施	8.2	底部 1/2	柄の範囲は内外の底部にまでは及ばない。高台の断面は三日月状を呈する。底部は回転系切り後回転ヘラナリ。	①長石 ②灰白色 ③還元	埋没土
	灰陶 広口瓶	底部	頸部は7.9cmあるため長頸瓶ではなく広口瓶とした。肩部は丸みを帯びる。袖は内外に及び、肩に外輪は全部、内部は上位とする。	①長石・黒色粒 ②灰白色 ③未還元	埋没土
	須恵器 环	10.1 5.0 2.7	3/4	口縁部は緩やかに内汚す。底部の切り離しは回転系切りである。	①長石・石英・角閃石粒 ②黄褐色 ③未還元	床着
9号住居跡	須恵器 环	底部 1/2	高台は高さ2cm以上を有する。	①長石・石英・角閃石粒 ②明赤褐色 ③未還元	床着
	土 瓶	(22.8) (10.0)	口縁部 一側部	口縁部は内側し端部は面をなす。胸部は張りがない。ロクロ成形。	①長石・石英・角閃石・片岩粒 ②にいわ褐色 ③未還元	カマド
	須恵器 羽釜	21.7	口縁部 一全体	口縁部は内側し端部は面をなす。胸部は張りがない。ロクロ成形。	①長石・石英・角閃石・片岩粒 ②にいわ褐色 ③未還元	カマド
	須恵器 环	16.0 9.0 6.6	1/2	口縁一部は直線的に開き、高台は2cm以上ある。ロクロ成形。	①長石・石英・角閃石粒 ②にいわ褐色 ③未還元	カマド
	須恵器 环	13.5 6.6 5.5	3/4	口縁一部は直線的に開き端部でさらに外反する。底部は回転系のり。	①長石・石英・角閃石 ②灰褐色 ③未還元	埋没土
10号住居跡	土師器 甕 5.6	胴下部 底部	胴・底部は径の小ささで底部より緩く開く。外：横位ヘラナリ、内：斜位ヘラナダ。	①長石・石英・角閃石 ②明赤褐色 ③未還元	埋没土
	土師器 甕	5.6	口縁一部は直線的に開き端部でさらに外反する。外：横位ヘラナリ、内：斜位ヘラナダ。	①長石・石英・角閃石 ②明赤褐色 ③未還元	埋没土
41号土	須恵器 环	(12.6) 7.8 5.3	1/3	口縁一部は直線的に開き端部でさらに外反する。ロクロ成形。	①長石・石英・角閃石 ②灰褐色 ③未還元	床着
B(大溝)	須恵器 环	16.0-14.3 6.8 6.2	完形	口縁一部は緩やかに内汚し、端部でさらに外反する。歪みがひどい。底部の切り離しは右回転系切りである。	①長石・石英 ②灰褐色 ③還元	埋没土

表14 C地区遺物観察表(1)

遺物番号	器種	LH径・底径 高さ(cm)	遺存率	器形及び成・変形の特徴	①粘土②赤陶③焼成④材質	出土位置
3号住居跡	土師器 环	(14.6)	口縁部 一全体	口縁一部はわずかに内汚気味に開く。	①石英・角閃石粒 ②暗灰褐色 ③還元	埋没土
	土師器 环	(18.3)	口縁部片	口縁部は緩く立ち上がり、大きく崩壊しない。内：横位ヘラナダ。	①石英・角閃石・褐色粒 ②黄褐色 ③還元	埋没土

表15 C地区遺物観察表(2)

遺物 番号	遺物 番号	器種	口径・底径 器高(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
4 号 住 居 跡	1	土師器 环 (2.0)	底部 1/2	高台欠損、底部の切り離しは回転系切り。	①石英・長石・角閃石 ②暗茶色 ③無化	床着
	2	灰釉 塊	7.4	底部 1/2	高台は三日月状を呈し、内部の輪は自然輪である。	①長石 ②灰色 ③還元	埋没土
	3	土師器 上 筋	(20.8) (6.6)	口縁部 一部部	口縁部は腹く立ち上がり、大きく屈折しない。内:横紋ヘラナダ、外:継紋ヘラ削り。	①長石・角閃石・褐色 ②黄褐色 ③無化	床着
30 号 住 居 跡	4	須恵器 環 (14.4)	底部 1/4	底部は平たく納め、外輪部に粘土紐の痕跡あり。	①石英・長石粒 ②灰色 ③還元軟質	床着
	1	須恵器 环	(10.7) 5.7 3.0	1/3	口縁一部は縦やかに内反し、端部でさらに外反する。底部の切り離しは回転系切りである。	①長石・石英・角閃石粒 ②白色 ③未還元	床着
1 号 井 戸	1	須恵器 鉢	23.9 12.2 10.4	3/4	片口の鉢である。口縁一部は内反気味に開き、端部で小さく内反する。クロロ成・整形を基本とし 内部は指ナダ、外部は指捏・指ナダで、内部は使用により滑沢である。底部は回転系切りである。	①長石・石英・片岩粒 ②暗灰色 ③還元	埋没土

表16 D地区遺物観察表

遺物 番号	遺物 番号	器種	口径・底径 器高(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
6 号 住 居 跡	1	須恵器 环	(15.7)	口縁部 一部部	口縁一部はわずかに削れて開き、端部でさらに外反する。クロロ成が強い。	①長石・褐色 ②暗灰色 ③還元軟質	カマド
	2	土師器 鉢	(20.5)	口縁部 一部部	口縁部は「コの字」状を呈し、底面は沈線がなされる。外:横紋ヘラ削り	①石英・長石・角閃石・褐色 ②黄褐色 ③無化	埋没土

表17 G地区遺物観察表

遺物 番号	遺物 番号	器種	口径・底径 器高(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
高 跡	1	須恵器 环 (2.5)	口縁部 一部部	口縁部は彌遠で小さな斜り面で切られる。回転ヘラ削りは天井部の中位から始まる。	①長石粒 ②灰色 ③還元軟質	埋没土
	2	灰釉 塊 (7.4)	底部 1/4	高台は彌遠三日月状を呈す。端部は内外底部までは及ばない。	①長石粒 ②灰色 ③還元	埋没土
	3	須恵器 鉢	口縁部	内:同心円凸出具、外:平行叩き。	①長石粒 ②青灰色 (断面 は2mm) ③還元	埋没土

表18 遺構外遺物観察表

遺 構 外	遺物 番号	器種	口径・底径 器高(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
遺 構 外	1	網片石 器	長さ10.3 幅5.2	完形	縫隙部を網状に調整を加え、刃部を形成した後 打削による網片石器。	④安山岩	7号住 埋没土
	2	網文土 器 鉢	破片	縫隙部で区切られた網文帯を施す。「くの字」状に傾曲するところから口縁部に近い部分と思われる。細窄部。	①長石・角閃石 ②暗褐色 ③無化	X=38.860 Y=-65.190
	3	網文土 器 鉢	口縁部片	口縁部は手平で縫隙部には押打された貼り附れが残る。網文帯は縫隙部には張り付いた部分が残る。地文は無鉛陶文である。晚晴安行3-b-3式並行か。	①石英・長石・褐色 ②暗褐色 ③無化	X=38.860 Y=-65.210
遺 構 外 遺 物	4	網文土 器 鉢	口縁一部	口縁部は波状となり、その間に網状の貼り附れが施される。網片石器帶には網状に貼り消しした部分と縫隙部の網文帯が複数枚。弧状波状文で構成される。口縁部は波状文の貼り附れが施される。地文は無鉛陶文である。3-b-3式並行か。	①石英・長石・褐色・角閃石 ②黄褐色 ③無化	7号住 埋没土
	5	弦生土 器 鉢	剥片	剥離状工具で波状文を施し、浮文を貼り付ける。剥離式土器。	①石英・長石・角閃石 ②黄褐色 ③無化	10号住 床着
	6	弦生土 器 鉢	剥片	剥離状工具で波状文・葉状文を施す。剥離式土器。	①長石・角閃石 ②黄褐色 ③無化	2号住 上層
7	土師器 鉢	口縁部片	口縁部は「くの字」状に削削し、縫隙部に削みを入れ、内外面削り目調整を施す。古式土師器。	①長石・褐色 ②灰褐色 ③無化	7号住 埋没土	
8	土師器 鉢	口縁部片	口縁部は「くの字」状に削削し、縫隙部は彌遠形を呈する。内外面削り目調整を施す。古式土師器。	①長石・褐色 ②灰褐色 ③無化	7号住 埋没土	
9	土師器 鉢	15.4	口縁部片	口縁部は「くの字」状に削削する。古式土師器。	①長石・褐色 ②灰褐色 ③無化	8号住 埋没土	

表19 遺構外遺物観察表

遺構番号	遺物番号	器種	口径・底径 器高(cm)	遺存率	器形及び成・蓋形の特徴	①粘土②色調③焼成④材質	出土位置
遺構外遺物	10	土師器台付裏	-----	11縁部片	口縁部は「S字」状に屈曲する石田川式土器である。肩部は崩毛口調整である。	①石英・長石・角閃石粒 ②黄褐色 ③酸化	Aa-C混上
	11	土師器台付裏	10.0	脚部	脚部は彫れ気味に開き、端部で面をなす。内外細かな崩毛口調整。	①長石・褐色粒 ②黄褐色 ③酸化	X=38.870 Y=-60.190
	12	土師器高环	-----	脚部	脚部と環部との接合には粘土の充填が観察され、脚部内は崩毛口調整される。内外赤彩。	①石英・長石粒 ②黄褐色 ③酸化	X=38.820 Y=-60.190
	13	土師器底	4.4	底部	底径の小ささを瓶である。孔は單孔で直徑1.2cmである。	①石英・長石・角閃石粒 ②黄褐色 ③酸化	Aa-C混上
	14	円錐埴輪	-----	破片	円筒埴輪片と思われる。内外崩毛口調整である。	①石英・長石・片岩粒 ②茶褐色 ③酸化	2号溝 埋没土
	15	須恵器环	10.8 5.8 3.2	2 / 3	口縁部は直線的に開き、底部切り離しは同板系切りである。外体部崩毛正位「子」あり。	①石英・長石・褐色粒 ②橙色 ③酸化	X=38.870 Y=-60.190
	16	五輪塔 空風輪	長さ(21.9) 幅14.9		空風輪である。空輪頂部は欠損している。空輪は宝珠形、風輪は輪状を呈する。火輪に接続するほぞは長さ5.5cm、幅8.0cmである。④粗粒安山岩		Aa-B'下
	17	用途不明 石製品	-----	破片	繊剤により継縫1本と横縫2本単位が2本で区画される板状の④縫泥片岩である。板間に使用されたものか。	④縫泥片岩	X=38.860 Y=-60.200
	18	錢貨	内径：2.5cm 外径：0.6cm	ほぼ完形	北宋錢「政和通寶」初鋤年代(1111年)。		E区 Aa-B水田



1 遺跡遠景



2 A区北側道 As-B 下面全景



3 同 As-B 下面 1・2号溝



4 同 9世紀前半以降大溝



5 同 As-B 下面 A区北トレント

下増田越渡IV遺跡

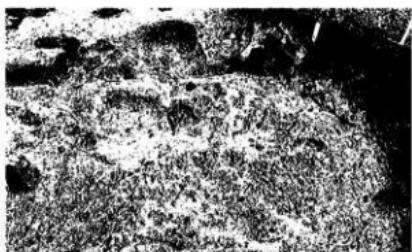
図版
18



1 作業風景



2 B区北側道 As-B下面14~16号溝



3 同 1号住居跡



4 同 遺物出土状況



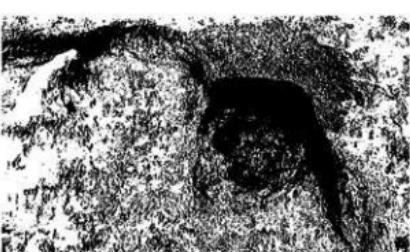
5 同 カマド近景



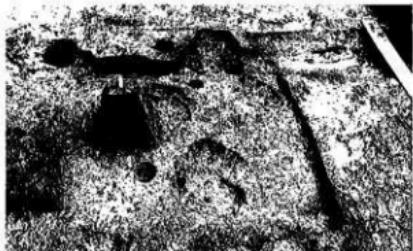
6 同 2号住居跡



7 同 カマド近景



8 同 7号住居跡



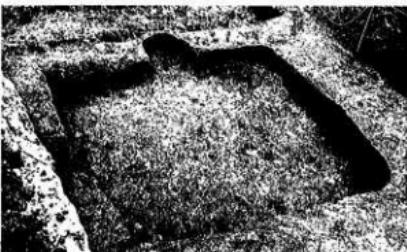
1 B区北側道8号住居跡



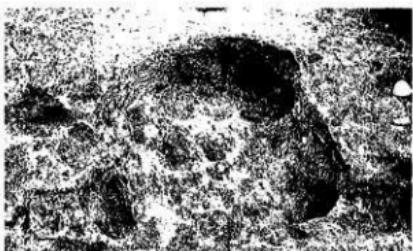
2 同 遺物出土状況



3 同 9号住居跡



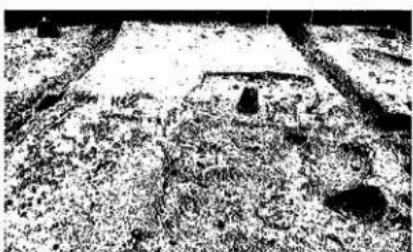
4 同 10号住居跡



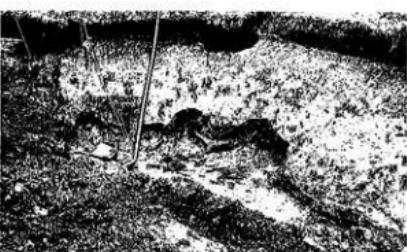
5 同 41号土坑



6 同 9世紀前半以前面1号掘立柱建物跡



7 同 10・11号溝（道路状造構）



8 9世紀前半以降大溝

下増田越渡IV遺跡

図版
20



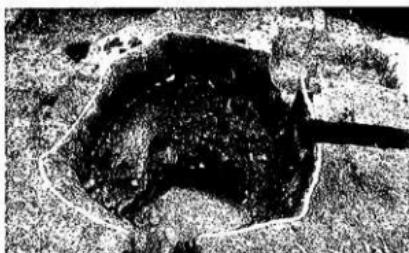
1 C区南側道全景



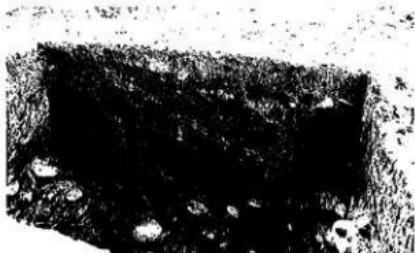
2 同 1号井戸跡



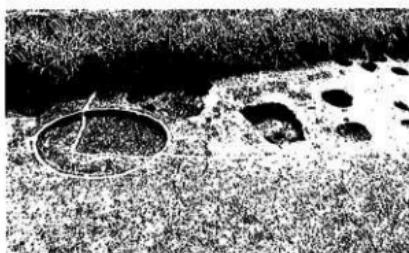
3 同 遺物出土状況



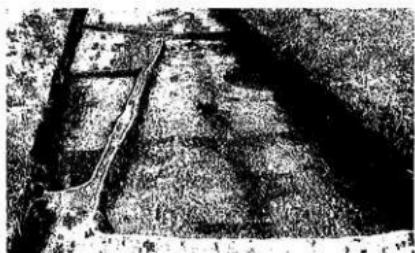
4 同 2号井戸跡



5 同 土層堆積状況



6 同 3号住居跡・5号土坑



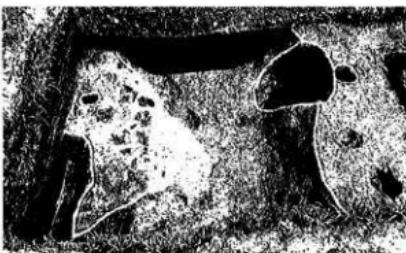
7 同 4号住居跡

下増田越渡M遺跡

図版
21



1 C区南側道 5号住居跡



2 同 1号方形周溝墓



3 同 土層堆積状況



4 D区北側道 As-B下面全景



5 同 6号住居跡



6 同 9世紀前半洪水層下面全景



7 同 9世紀前半洪水層下面水口



8 同 As-C混下面全景

下增田越渡IV遺跡

図版
22



1 D区南側道 9世紀前半洪水層下面全景



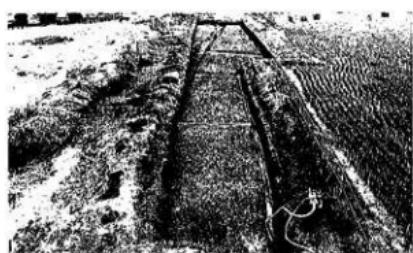
2 同 As-C 混下面全景



3 E区北側道 As-B 下面全景



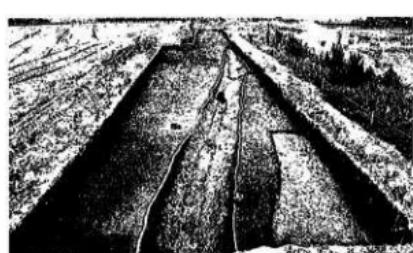
4 同 As-B 下面 4号溝土層堆積状況



5 同 9世紀前半洪水層下面全景



6 同 土層堆積状況



7 同 As-C 混下面全景



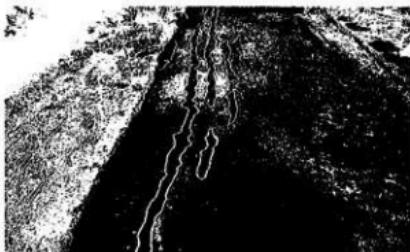
8 同 As-C 混下面畦畔

下増田越渡IV遺跡

圖版
23



1 G区北側道 As-B下面基本堆積土層



2 同 As-B下面蟲



3 同 As-C混下面水田跡



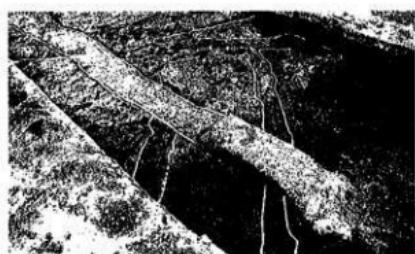
4 同 水口



5 同 水田跡



6 同 As-C混下面15号溝



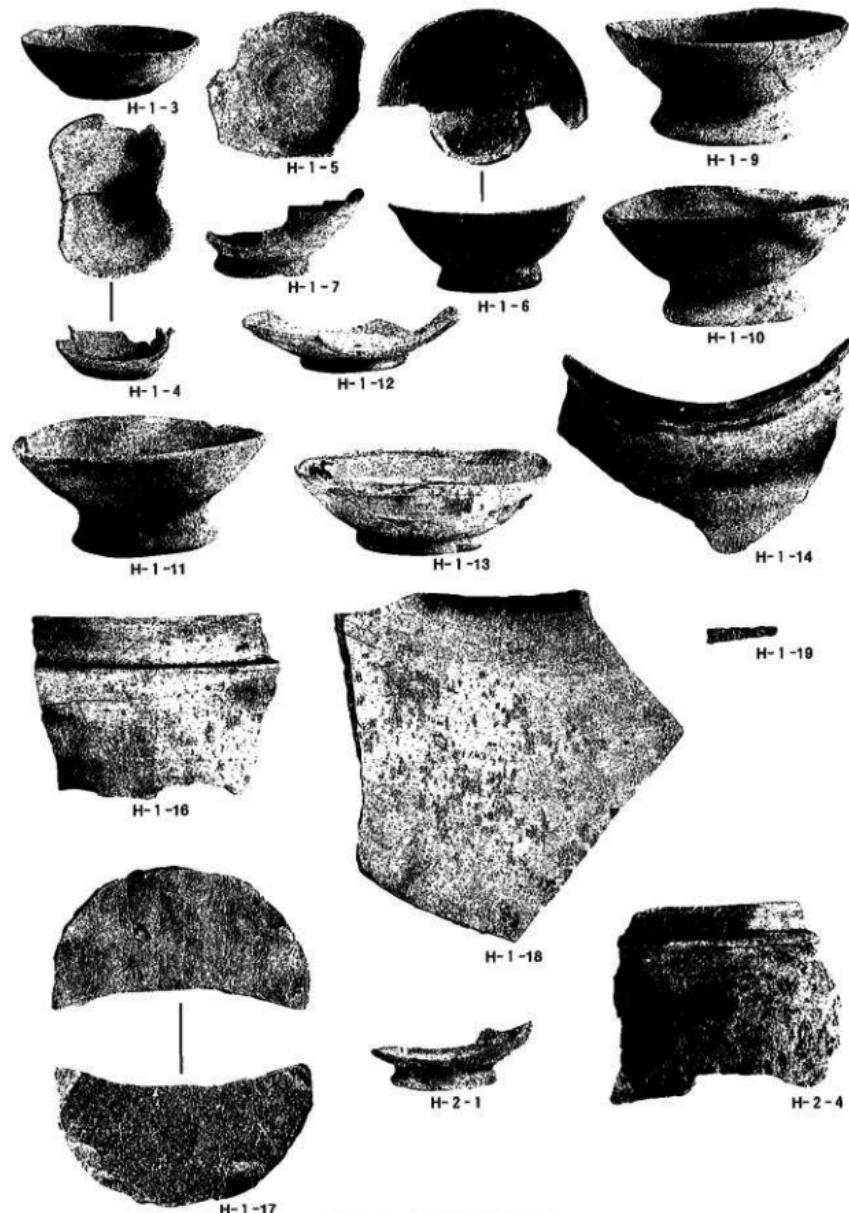
7 同 As-C混下面畦畔



8 同 As-C混下面水田跡

下増田越渡IV遺跡

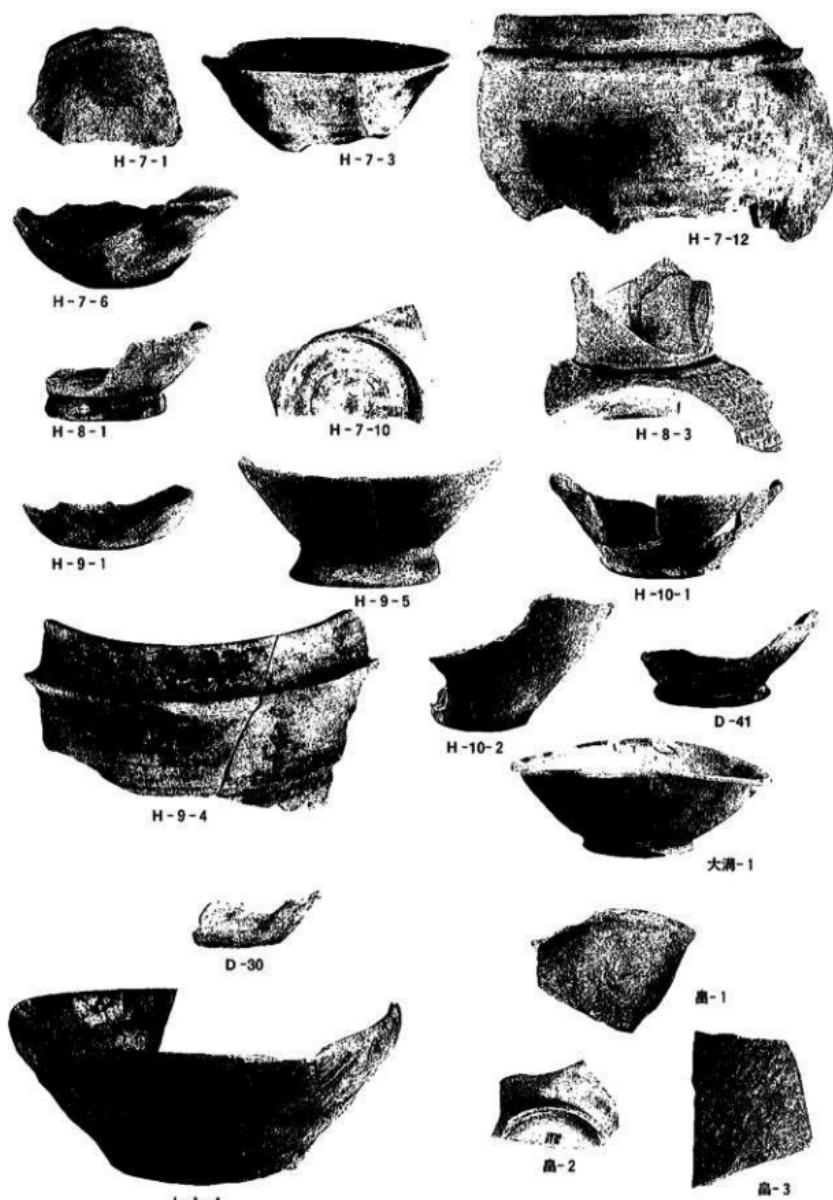
図版
24



B区 1・2号住居跡出土遺物

下増田越渡IV遺跡

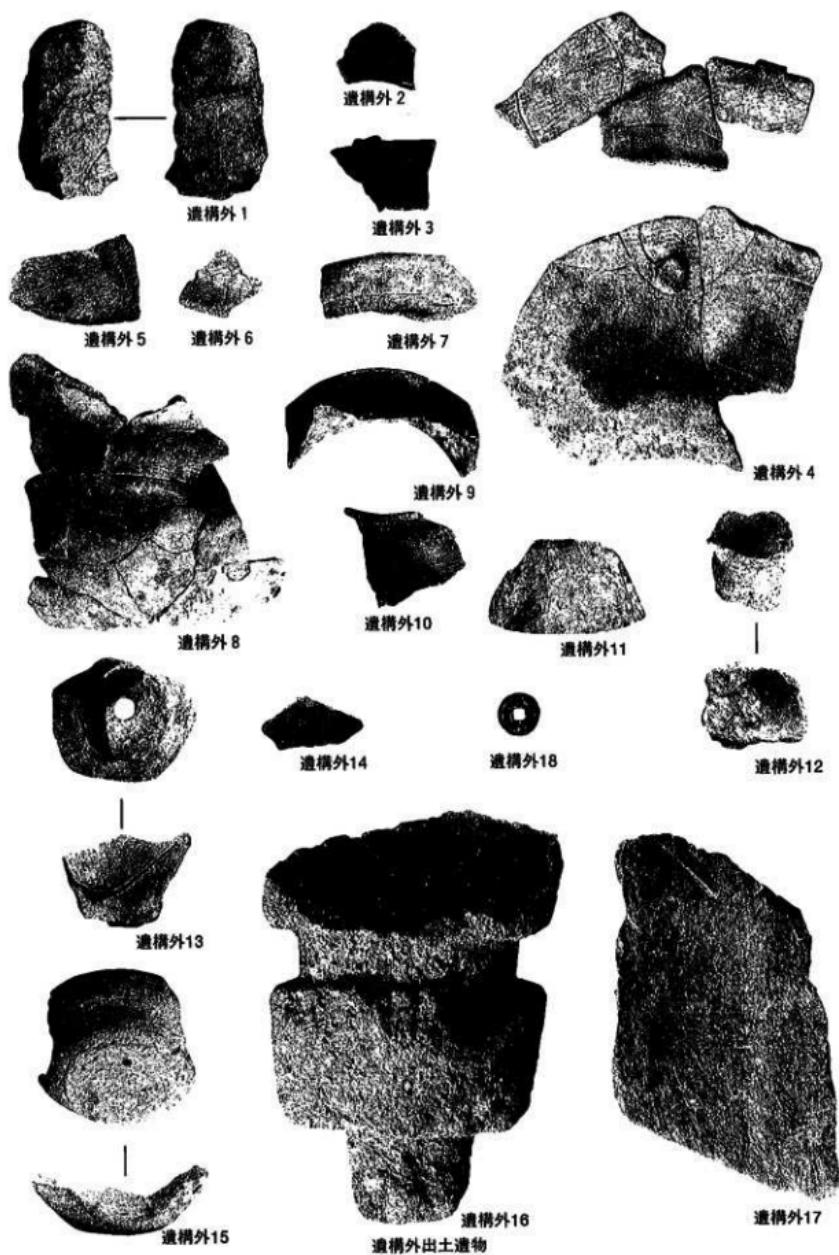
圖版
25



B区 7~10号住居・41号土坑・大溝、C区30号土坑・1号井戸、G区出土遺物

下増田越渡Ⅳ遺跡

図版
26



抄 錄

フリガナ	トクマルタカゼキニイセキ・トクマルナカダサンイセキ・ニシゼンシャクジサンイセキ シモマスダツネギニイセキ・シモマスダコエドヨンイセキ					
書名	徳丸高堰Ⅱ遺跡・徳丸仲田Ⅲ遺跡・西善尺司Ⅲ遺跡 下増田常木Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡					
編著者名	近藤晋一郎 千葉孝之 宮内 純 松川政基 大賀 健 間宮正光 高階敏昭					
編集機関	山武考古学研究所 / 〒286-0045 千葉県成田市並木町221					
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 / 〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4					
発行年月日	西暦1999年3月25日					
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	東 緯	調査期間 (調査面積)	調査原因	
徳丸高堰Ⅱ遺跡	群馬県前橋市 徳丸町68-1他	10G-26	139° 06' 29" 36° 19' 53"	19980423~19990319 (1,218m ²)	北関東自動車道側道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	
徳丸仲田Ⅲ遺跡	群馬県前橋市 徳丸町75-1他	10G-27	139° 06' 47" 36° 19' 54"	19980423~19990319 (3,402m ²)		
西善尺司Ⅲ遺跡	群馬県前橋市 西善町1166他	10G-28	139° 07' 20" 36° 19' 58"	19980423~19990319 (370m ²)		
下増田常木Ⅱ遺跡	群馬県前橋市 下増田町1541-1他	10F-4	139° 09' 39" 36° 20' 52"	19980423~19990319 (614m ²)		
下増田越渡Ⅳ遺跡	群馬県前橋市 上増田町1535他	10F-5	139° 09' 44" 36° 20' 53"	19980423~19990319 (2,449m ²)		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳丸高塚Ⅱ 遺跡	中世 館跡 水田跡	弥生以前 ～中世	中世面 堀2条、土坑12基、溝3条 浅間B軽石下面 畦畔2条、土坑1基、ピット5基 弥生時代以前面 溝3条、土坑1基、ピット15基	五輪塔火輪部・羽口 火舎	
徳丸仲田Ⅲ 遺跡	中世 館跡 水田跡	弥生以前 ～中世	中世館跡出土面 溝4条、ピット23基 浅間B軽石下面 溝20条、畦畔39条、土坑2基、ピット28基、水田跡、堅穴遺構1 FA堆積面 带状遺構1条 浅間C軽石混土層下面 溝11条、畦畔3条、土坑7基、ピット16基 弥生時代以前面 溝19条、土坑48基、ピット10基、不明遺構14	石鐵 土師器(台付甕・甕) 須恵器(坏) 土師質焰燒 常滑甕 瀬戸焼香炉	
西善尺司Ⅲ 遺跡		弥生以前 ～中世	浅間C混土層下面 溝5条、堀1条、土坑2基、ピット9基 弥生時代以前面 溝1条、土坑5基、ピット12基	土師器(台付甕・甕) 近世陶磁器	
下増田 常木Ⅱ遺跡	水田跡	平安 ～近世	畦畔・道路状遺構・溝 9世紀前半洪水層・畦畔3条 近世以降の土坑3基、溝7条(道路状遺構含む)	ナシ	
下増田 越渡Ⅳ遺跡	水田跡	弥生以前 ～中世	中世面 土坑15基、ピット15基 浅間B軽石下面 溝8条、水田跡、畠跡 9世紀前半洪水層～中世面 溝2条、土坑21基、ピット多数、住居跡3軒、井戸2基 9世紀前半洪水層下面 溝6条、畦畔12条、住居跡7軒、土坑9基、掘立建物2棟 シルト上面 方形周溝墓1基 浅間C軽石上面・下面 水田	網片石器・繩文土器(浅鉢・深鉢)・弥生土器(甕)・円筒埴輪・土師器(坏・甕・台付甕・高坏・瓶)・須恵器(坏・耳皿・羽釜)・須恵質鉢・灰釉陶器(塊・皿・広口瓶)・政和通寶・五輪塔空風輪・転用鏡・铁刀子	

北関東自動車道側道道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**徳丸高塚Ⅱ遺跡
徳丸仲田Ⅲ遺跡
西善尺司Ⅲ遺跡
下増田常木Ⅱ遺跡
下増田越渡Ⅳ遺跡**

印刷 平成11年3月20日

発行 平成11年3月25日

編集 山武考古学研究所

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷 (株) 文化総合企画

TEL 0476(93)0593